HUMOR MYSTERY

The Capricious Princess

Traveling Detective Agency

WRITTEN BY
KOSHI KURUMIZAWA



ユーモア・ミステリー

気まぐれ令嬢・移動探偵局

胡桃沢耕史
（くるみざわこうし）

KOBUNSHA

日本の所得税制度は、勤倹節約、貯金蓄財を極端にまで嫌う。税務署員の高額所得者を見る目はまるで罪人を見るようだ。そのため、これまで遊興や無駄遣いと無縁で働いてきた人も、財産ができると、心の中で泣きながら、無駄に大事な金を浪費しなくてはならない。財産家の家に養子に来た父が子孫にその財産を無事伝えるためには、年額一億円以上の赤字を出さなければならないと分かったとき、その困難な仕事を一人娘に命じた。学習院女子短大に在学中の十九歳の美しい祐未子は探偵局を設立し、凶悪な犯人を追うことで赤字作りを達成する。

愉快でしゃれたスリラー・コメディです。**「著者のことば」**

カバー・イラスト　湯村タラ

カバー印刷　半七写真印刷

ユーモア・ミステリー

気まぐれ令嬢・移動探偵局

胡桃沢耕史



カッパ・ノベルス

目次

第一話　潰れなかったベンツ……5
第二話　行方不明の相続人……39
第三話　三十二年目の和解……73
第四話　局長大いに怒る……107
第五話　殺人証明書売ります……141
第六話　灯油を買った処女……175
第七話　某重大事件……209

本文イラストレーション／湯村 タラ

〈第一話〉潰れなかったベンツ

プロローグ

時として、東京郊外には、恐ろしいほどの金持ちがいる。こういう人は、毎年の所得番付とか、紳士録にのっている一流企業の役員、世間に知られた有名人などとは一切関係ない。

裏町の名も知らぬ小工場の主人だったり、職業が何をやってるか分からず、ただ、だだっ広い邸に住んでいたり、もっと極端なのは、家に続く三百坪ぐらいの畑を、汚れた作業衣に破れた麦わら帽をかぶって、営々として耕していたりする。年間の収入はそれほどでないから、所得税は少ない。ところが資産は、億の下に0が一つつくのはごく当たり前、中には二つつくクラスの人もかなりいる。

別に本人が努力してそうなったわけではない。先祖が、それもごく近い祖父か父の代に行なわれた農地改革に際して、無償で政府からもらった土地が、今、この異常な土地価格の高騰で、億に0がつく資産になったのである。

だが途中でアパートをたてたり、事業に投資したりした人は、その時点で土地を処分し、ほどほどの小金持ちで終わるか、あるいはすっからかんになったりしている。いくらうまい話があってもガンとして土地を手放さず空地か畑にしていた人だけが今大資産家として残っているのだ。ただし0が二桁以上となるとさすがにそうはいかない。

石島家のように、先祖代々の地主でなければ無理だ。

中野の伊藤家、練馬の港家、世田谷の海老沢家、大久保の大田家、玉川の江戸家、豊島の豊島家など、足利・戦国などの古い時代にもうちゃんとした家があり、そのころただ葦が茂る草原を、馬が駆け回って遊べるほどに所有していた大地主で現在まで家系が無事につながっているところは、大体、資産は億に0が三つ以上つく。彼らにはそれなりの苦労がある。

毎年の税金対策に、使いもしない高級外車を買ったり、行きたくもない外国旅行へ行って経費で落とさないと、日本の所得税制度は、入ってくる金以上の金を、資産からむしり取って行くようになっていて先細りしてしまうのだ。

板橋区という、昔は東京都に入っていながら都民の仲間入りもさせてもらえなかった区がある。今はもちろん東京でも有数の地価の高い立派な高級住宅地だが。

そこに代々、千坪近くの邸をかまえ、何万坪か正確には分からない土地を持ち、アパートやビル、マンションなども、当主でさえどのくらい持っているのかよく分からないほど所有している石島家という資産家がある。家系を辿れば、平安時代の清少納言に行きつくというから凄い。

今、石島家の最大の問題は、アパートやビルから、毎月自然に入ってくる巨大な収益をいかに税務署を納得させる形で、使いきることができるかということだ。もし合法的に使わないでそれが収益にでもなったら大変なことになる。その額だけでなく、先祖以来苦心して守り続けてきた土地を税務署から所得税の対象としてむしり取られてしまう。

そんなことになったら御先祖様に腹を切ってお詫びしてもすむことではない。赤字にならなくてもせめてどうしても自然に入ってくる利益金だけは税務署が納得する方法でゼロになるまで使いきらなくてはならない。これが意外に難しい。そしてこの悩みから、この探偵局は生まれたのである。

1

庭にはまだ自然の雑草が茂り、塀際の松や杉の大木は、武蔵野が原野だった時代からの物だ。池にいる鮒や目高も、ここに自然の小川が流れていたころの魚の子孫が代々卵を生んですみついている。塀の外は舗装道路に車がびっしりと混み合い、マンショ

ンや、アパート、プレハブ造りの安住宅が並んでいるが、この古い板塀の中は、百年は昔の武蔵野の面影がそのまま残っている。

廊下の戸をあけ放して、縁側に座布団を出して広い庭を眺めながら当主の石島祐太は、たった一人の娘である祐未子にいった。

「私はおまえ一人しか子供を作ることができなかった。もっとも石島家は、清少納言の子孫だけあって、代々女腹だ。私も入り婿だ。だから子供が女だということは、ちっとも気にしとらん」

「当たり前よ」

浴衣に着替え、団扇を持って向かい合って坐っている祐未子は、むきになって抗議をする。こういうときは大きい目が一層大きくなる。

「女だからといって、お父様が肩身の狭い思いをすることはないわよ。今は女のほうがずっと強いんだから。大学の合気道部と、空手部では、今、私にかなう人はいないのよ」

「男と試合をするのか……」

いささか憮然とした表情で父はきいた。

「……そんな、おまえの生き方がかえって気になる。学校でも困っとるだろう」

「この間は拳闘部にも挑戦したのよ。ランニングシャツを上に着て。でも女はおっぱいがあるから拳闘だけは駄目ね。もちろんシャツの下にはブラジャーをしてがっちり防護したつもりだったけど、そこを狙って打たれると、痛くて、すぐ気絶しそうになって勝負にならなかったわ」

「恐ろしいことを聞かせるなよ。気絶どころか父さんは心筋梗塞を起こして死にそうになったよ」

と我が子ながら怖ろしそうに眺めた。

上流家庭とのつながりを求めて、学習院大学へやったのだが、これでは何にもならない。どこかの旧貴族の出身の、あまり才気や商売気はなくてもいいから、おとなしく上品で顔だちの良いお婿さんを釣り上げてくればいいと思った父の思惑はあっさり

崩れてしまった。

娘と違っておとなしいだけの母が、夫には晩酌のお代わりを、娘にはコーヒーを入れて持ってきたが、あらかじめ夫から、『今日は祐未子とは大事な話があるから』と伝えられていたので、早々に引っ込んだ。

家付き娘でありながら、全く出しゃばったところのない母であった。それでも母が別室へ退くまでは父は話を切り出さなかった。

また二人きりになると、

「例のベンツだがね」

と父はまことに困ったような口調でいった。

「ああ二千万円もしたやつね」

もう五年も前に、わざわざ西ドイツのダイムラー・ベンツ社に注文して作らせたものだ。冷暖房から、車内電話、それに他に金のかけようがないのでガラスや回りの鋼板を防弾にした。

ベンツ社では、日本のマフィアの大親分の注文と思って、ただひたすら念を入れて作り上げたが、石島祐太はやくざとは関係ないし、世間的にも知名度は薄いからギャングに誘拐されることはまずない。

それほどまでに丁寧な車にさせたのは、車の値段を高くしたいばかりであった。

どうしても税務署が納得してくれる形で、経費から支出を落としていかないと、利益に対して物凄い税金がかかってくる。千万円の利益は二千万円分の税金を加重させる。これが日本の所得税だった。このむじゅんした税制から財産を守るため、その年どうしても、二千万円以上の車を買わなくてはならない羽目になった。税務署が経費として支出を認めてくれる物品と種類は、極度に少ない。消耗してやがて価値がゼロになる物以外はすべて資産の増加として、また新たな課税源を発生させるからだ。

「うん、もう五年たっている。今年は帳簿上の価値をゼロにして、また新しく一つ買わないと、来年の三月の申告期にえらい目に会う。それであいつを、

番号板（ナンバープレート）を取り、車検証を破り棄て、どこかの土堤か空地に捨ててきてくれないか。例のプレス工場で潰（つぶ）させてもいいな」

「分かったわ」

これは前にやったことがある。三百万の特別仕様の国産車だった。そのときもずいぶん、もったいないことをするなと思ったが、そうしないと帳簿上の赤字が入らず、何倍もの税金をとられるときいて、仕方なくやったことだ。

「……二、三日のうちに工場に潰しに行くわ。三万円払うと、クレーンで吊り上げて、圧縮機（プレス）の間へ落としてくれるの。出てくるときはトランクぐらいの鉄の塊りになって出てくるから、ナンバーを外したり車検証を捨てたりする手間はいらないわ」

「そうか。それはよかった。その三万円も損金に計上できる。何しろうちの事業は、毎月音をたてて金が入ってくるだけで、社員もほとんどいないし、事務所もたった一つだし、出て行く金がないので、税務署は目の敵（かたき）にして狙うので困るんだな」

世間から見れば贅沢（ぜいたく）な悩みのようだが、自分の土地にたてたマンションやアパートから家賃をとるだけの仕事に、そう何人も社員をおいてもまた不自然で税務署に睨まれる。

もともと遊んでいるのが嫌いで、ゴルフも、競馬もやらない父は、事務所の掃除兼お茶くみの中年の婦人と、たった二人だけでこの仕事を片づけてしまっている。

経費の出しようがない。

ほとほと困ったという顔で溜息をついた。

「今年はもうどうにもならない。一応、ベンツは捨てる。三、四日で四千万円のロールスロイスが入ってくる。私自身、月に百万円の小遣いを使えといわれたら、もともと気が小さく育ったせいで、どうしたらいいか困ってしまう。といって社会事業に寄付したり、人に貸したりなんてことは、片腕切られるよりも、もっといやだしね。困った性分だな」

「別に困ることはないわよ。それが当たり前の人間だし、車を捨てるぐらいならいつでもお手伝いするわ」

「それだけではない。どう使っても今年は一億の利益が残りそうだ」

「まあ、一億も」

「土地の値上がりとともに、部屋代や、権利金、敷金が値上がりした。世間相場より安くしているつもりだが極端に安くすると、不動産協会から苦情をつけられるし、また税務署から、脱税行為として、いじめられる。私はどうしたらいいか分からない」

「じゃ、一億円全部をお国のためと思って税金に払っちゃったら」

「本当はそれがいいのだが、一億の利益が出ると分かると現在の税制では、国税、地方税、来年の予定納税で、二億近くは必ずとられる。利益をいったん出してしまったら、毎年の三月ごとに、資産を減らし借金をしなくては払いきれなくなるのが日本の税制の特徴で、世界のどこにもない不思議な現象だ。そんなことをしたら、私たちは物を生産する事業ではないから、十年もすれば丸裸にされてしまう。石島家の歴代の御先祖様に対して申し訳がたたない。もし許されるのなら、首でも吊って今すぐ死んでしまいたい心境だよ」

父の深刻な顔を見ると、その心境が冗談でないことが分かる。入り婿してからこの方、ただ財産を減らさないことだけに、神経をすりへらして生きてきた小心な父である。

「でも私だってそんな難しい問題どうしたらいいか分からない」

祐未子も返事のしようがない。

すると父はいった。

「私は、小心者だから、月に百万円の金はとても使えないが、しかしおまえならできそうだ。だから後は税務署が納得する形で使う方法を発見しなくてはいけない。つまり何かの事業をやる。そしていかに

も事業のためいったという形で、月千万円を使うのだ。辻褄さえ合わせてくれればいい。しかも事業の収益は、努力の甲斐なくゼロだったことにする。税務署が承知すればいい。たしかに考えてみればばかばかしい仕事だ。そして一方恐ろしく難しい仕事だ。しかしこの平安時代からの伝統ある、板橋の石島家を守るためにはぜひやってもらわなくてはならない」

「そんな私にばかり、難しい仕事を押しつけないで」

不平そうに頬をふくらますと、そんな演技でこのごろやたらにテレビに出ている中山美穂そっくりになった。

父はかしこまってガバッと手をついて娘の前に平伏した。

「お願いだ。どうか、学習院大学へストレートで入れたおまえの優秀な頭脳をふり絞って、父さんを助けてくれ」

「困るわ、お父様、そんな恰好しないで。ともかくまず先にベンツを捨ててくるわ。それから、二、三日、考えさせて。一生に一度の智恵を絞ってみるわ」

そう娘は答えた。

しかし自信はないらしく、その顔色は冴えなかった。

2

土、日をおいて三日目の月曜日だった。大学の講義は一日中ぎっしりつまっている。しかし目下の石島家にとっては祖先以来守り続けてきた財産を減らさないようにすることが最大の緊急事だ。

祐未子は登校前にまだ充分使えるベンツを捨てに行くことにした。大学で使うノート類だけ座席の横におき、エンジンキーを回した。

滑らかな回転音がする。いかに国産車が良くなっ

てもどうしても及ばぬ技術の差がある。

ハンドルを握り家の門を出て行くときにしみじみ思う。こんな良い車をみすみす廃品にしてしまわなくてはならない税制というものが憎たらしい。発展途上国だったら、まだ大統領や、首相が乗ってもおかしくない車だ。

国民に物資の無駄遣いを強制しているようなものではないか。

しかし今、彼女は、自分の家の財産を守り減らさないようにして子孫に伝える努力をすればいいのであって、政府の方針にまで口を挟む気はない。

家の前から、都心へ向かうのと反対の方向へ行く。流れが逆なので、幾らか混雑の少ない国道をしばらく走り、途中で左折して工場の多い一画へ入った。その工場街を抜ければ、荒川の土堤と広い河川敷にぶつかる。塵埃処理場とか、火葬場とか、車の解体工場とか、すべてこの世の最後の処置をする施設が、川を背景にするぎりぎりの所に並んでいる。

すべての自動車を、プレスにかけて、トランク状の大きさに固めてしまう工場も、その中にある。

土堤の上の道を少し走ってから下りた所だ。左は工場や汚れた土地ばかりだが右は広い河川敷に豊かに草が生い茂り、野鳥や蝶が飛び回り、川に沿った自然のままの光景が残っている。

ふと土堤の左側に一人の男が立っているのに気がついた。百メートルぐらい先だ。

手を上げている。この車に用があるようだ。近づくとかなり背が高い男だ。アメリカ風のヒッチハイクのつもりか、右手の指先を重ね合わせてはじいている。薄汚れたダスターコートに、古いショルダーバッグ。中の背広もよれよれで、ズボンの筋も消え、靴も泥がついて疲れたもので全体に身なりがよくない。女一人が運転する車に、男のヒッチハイクを乗せるのはかなり危険だ。女がハンドルを握っているので抵抗できない。アメリカでは絶対にやらないことだ。

よっぽどやめようと思ったが、近づくとそう人相は悪くない。犯罪を起こすような精悍さは見られず、何となくぼうっと生きている人のように見える。それに彼女は合気・空手は有段だし、実は高圧電流のスタンガンを、秘かに買って通学用カバンに入れてある。電車の中でよくお尻を撫でられるので、そのとき使ってやろうと思って機会を窺っていたのだ。

すーっと車を止めて聞いた。

「何か用」

「乗せてくれませんか」

男はいかにも腹のすいたような声でいった。近くで見ると百八十センチ近くの背丈があるが、体はヒョロヒョロにやせている。ちょいと突きとばしたら、そのまま後ろへひっくり返ってしまいそうな頼りなさであった。

「私、この近くの廃棄自動車を処分する工場までしか行かないのよ。ほんの五百メートル先よ」

「実はぼくもそこまで行きたいんです」

「じゃ、いいわ、どうぞ」

と左ハンドルなので逆に回らせて、右側の扉をあけさせた。男は乗りこんできた。ゆったりした座席だが、それでも長い肢がきゅうくつそうだった。

「ぼく堂四郎と申します。苗字と名前と合わせてです。どうしろと覚えてください」

「別に覚える必要もないわ。すぐそこで別れるんだもの」

祐未子は冷たくいった。五百メートル乗るだけで自己紹介は大げさだ。彼女はきいた。

「あの工場に勤めているの」

「いえそうじゃないのです」

「私はこの車に三万円つけて、潰してもらいに行くんだけど」

すると彼は思いがけないことをいった。

「それはよかった。どうかお願いです。そのときぼくを中に入れたまま工場に渡してくれませんか」

「えっ、何ですって」

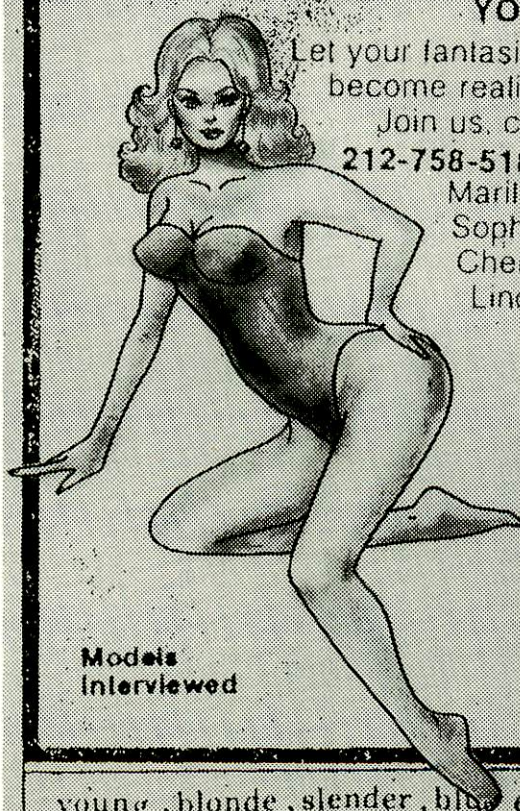
Girls Interviewed Daily, Wit

Imagine A Beautiful Blonde, A Busty Brunette and YOU!

Let your fantasies become reality. Join us, call

212-758-5188

Marilyn
Sophia
Cheryl
Linda



Models Interviewed

young , blonde , slender , blue eyed

「一人では死ぬ勇気はありませんので、このシートベルトを体中に巻きつけて、自分では外せないようにしてから工場に渡してくれませんか。ぼくは死体も何も残さずに、誰にも知られずに一瞬にしてこの世から消えて行きたいんです」

「何ですって……！」

あわててブレーキをかけて車を止めた。前後に車がいない土堤の上だからよかったが、町の真ん中でそんなことをしたら大事故が起こるところだ。

「……それじゃ、私が殺人罪になってしまうじゃない」

「でもトランク状の鉄の塊りの中に粉々になった人間の体がつめこまれていても外からは分かりませんから、完全犯罪が成立します」

「完全犯罪なんてそんなに甘いもんじゃないわ。ロスの疑惑人さんだって、結局捕まってしまったじゃない」

「でも、ぼく、もう三日も何も喰べてないんです。このまま飢えて苦しみながら死ぬよりは、いっそプレスにかけられて一瞬のうちに死んだほうが楽なのです」

あまりの気の弱さに呆れて物もいえない思いであった。

「何いってんのよ。いい男が。ともかくご飯さえ喰べられれば、もう少し生きていてもいいんでしょう」

「ええ、味噌汁で二杯だけご飯を喰べられれば、もう一日や二日は生きて行く元気が出るかもしれません」

「いいわよ。とりあえず、どこかの食堂でカツ丼でも喰べて元気を出しなさいよ。連れて行ってあげるから」

そのまま圧縮処理工場の前を通りすぎ、大きな道を走り出した。

道ぞいに、近くの工員や、トラックの運転手のための、定食食堂があった。

四つばかりのテーブルと奥に三畳の小座敷がある。まだ時間が早くて他に誰も客がいないので、その小座敷に上がり坐らせて、まず味噌汁にカツ丼、それにお刺身に、肉じゃがの煮付けをとってやった。

「すみません。ぼくお金を持ってないんですが、本当にいいんですか」

「当たり前じゃないの」

「じゃいただきます」

袖で涙と鼻をこすり、すぐ丼にかぶりついた。

もう三十はとっくに越している。男を見ているうちに全く世の中おかしいもんだとしみじみと思った。二千万円で買った、まだどこもいたんでいないベンツを、金をつけて捨てに行く者もいれば、三百円か五百円の食事代が無くて三日も何も喰べず、世をはかなんで死んでしまおうという男もいる。これが世の中というものなのか。

「あんた、奥さんとか、お友達はいないの」

「昔はそれぞれいましたが、今は一人もいません」

「そう。それで今はどこに住んでるの。私、別に警察じゃないから、いやなら答えなくていいけど、寝ぐらぐらいはあるんでしょう」

夢中になってかっこんでいたカツ丼も半分に減ってようやく人心地がついてきたのか、彼は少し元気の出た声で答えた。

「この近くの板橋区小豆沢の、第三小豆沢アパートという所に住んでいます」

「あら……」

と祐未子は驚いたような声でいった。

「……そのアパート、ガソリン・スタンドの横を入った、昔風の古い木造のアパートじゃなかったかしら」

「そうです。玄関前に八手の鉢が一つおいてあります」

「変な因縁だわ。それ、私の父の持っているアパートだわ。もう十五年以上も前に、何かの貸金の代わりに入ってきて、仕方なくうちで経営しているんだ

けど、いつも父はこぼしていたわ。入っている人は、大家に断わりもせずに勝手に変わるしお家賃は昔のままで、信じられないぐらい安いのに、滞納する人が多いし、中にはこの一年、まるで払わない人もいるって」

「それぼくなのです。払う気持ちはあるのですが、その日、その日の外交の歩合や、労働の賃金をもらってくることが多いので、喰べるのがやっとで、月末に家賃をまとめて払う余裕が生まれないのです」

「それで今は何をしているのです」

「新聞の勧誘とか、保険の外交とか、クリーニング屋の外回りとか、ありとあらゆる仕事をやってきましたが、いずれも一つもうまく行きません。最初の見習い期間の基本給や研修費まではもらえるのですが、新しい客を見つけることができず、結局は歩合給は入らずにクビになります。今度もそんな外交がいやでちゃんと働いて月給をもらいたいと思って、ある探偵社に就職したのです。ところがそこでもやることは、その探偵社の発行している人事興信録に有料で名前をのせたり、一部十万円もする興信録を買わせる仕事で、外から金をもらってこない限り、社員には一銭も給料が入らない仕組みになっていました。それでお客はもちろん一人も開拓できず、一円の収入もないので、もう三日も何一つ口に喰い物を入れなかったのです。それでひと思いに自動車の中に入って潰されて死んでしまえば楽だと思って、土堤で工場へ入って行く車を待っていたんです」

「冗談じゃないわよ。危うく殺人犯にされるところだったわ」

そういって三万円を出した。

「これで何日か生きて、新しく生きる道を探しなさい」

「いえいいんです」

彼は辞退した。

「どうして」

「どうせその三万円分を喰べてしまえば、また飢えて、プレス工場へ行くだけですから」
「しようがないわね。ともかくいらっしゃい。全く私、どうしろというのと怒りたくなるわ」
仕方なくその大男とまた車のほうに行った。とんだお荷物をしょいこんでしまった。

3

プレス処理工場との約束の時間は大分すぎてしまった。
しかし今日は午前中には、このベンツをスクラップにしてしまわなければならない。一応工場には電話をかけて、一時間ばかりおくれることを通知しておこうと思った。
そして店の前に置いてあった車のドアにキーをさしこんであけた。
そのとき車内の電話がしきりに鳴っているのに気がついた。あわてて電話機をとって耳にあてる。
「はい、こちら祐未子です」
「ああ祐未子さん、よかった。そちら大丈夫」
「何、大丈夫って、お母様。お父様は」
電話で聞く母の声は半分涙声だ。
「さっき警察の人がやってきて、連れて行ってしまったの。車のことで聞きたいって」
これには祐未子も仰天して思わず涙声になった。
「えっ、どうしたの。税金を少しでも節約するためまだ使える車を捨てようとしたことが警察にばれてしまったの」
「そんなことじゃないらしいわ。さっき潰そうとして工場に渡した車の中に、男の人の死体が入っていて、潰す寸前に見つかったんだって」
「まさか。……もう少しでそうなるところだったけど……」
「だから警察の人は必死にあんたを捜しているわ」
「それはおかしいわ。まだ私はその車に乗っていて

工場に渡してないわ。この電話を取って聞いてることでもそれは分かるでしょう」
「そういえばそうね。半分潰されそうになって、中に男の人がいるのが分かって押し潰すのを中止したらしいのよ。それなら電話なんかかからないわねー。でも中にいた男の人は死体で、身元も全く分からないんだそうよ」
「私の車に乗ってる人は、死体どころか、ちゃんと生きていて、さっきカツ丼にお刺身を喰べたばかりよ」
「おかしいわねー。でも早く何とかしなくちゃ、お父様が可哀そうよ。殺人容疑できびしく取り調べられているはずよ」
「わあーっ、大変。でもまあ、警察だって、昔と違ってそう手ひどい取り扱いはしないと思うわ。まず先に現場に行って、事件の大体の様子をきいてから、こちらの心構えを決めて警察へ行くわ。行っていきなり逮捕されて、何が何だか分からないうちに殺人犯にされたら、私だって、どうしようもないもの」
そういってとりあえず電話を切った。
エンジンのキーを回す。そのとき初めて、さっきの男がちゃっかり隣りの席に坐っていることに気がついた。どうせ彼にはどこへも行く所はないらしい。
「ついてきて。一緒にいる間はご飯ぐらいは何とかしてあげるから、少し手伝って。どうも面倒なことが起こったらしいの。男の人の手がいることが起こるかもしれないから」
「はあー、それでは」
「あまり気のりしない声ね。何だか頼りないけれど。それでも男だったら頑張って」
「はい。でもできるだけ早くぼくを死なせてください」
ハンドルを握って、また土堤のほうに向かう道を走らせながら、祐未子は苛だった声でいった。
「分かったわよ。どうにもならないときまったら、

ちゃんと死なせてあげるわよ。今、こちらはそれどころじゃないんだから、カツ丼分は、働いてもらうわよ」

車はまた荒川の土堤に登り、さっき通りすぎた、圧縮機の廃車処理工場の横まで来た。

土堤の上にも、土堤から下った工場の庭にも、パトカーが一台ずつ、赤い回転灯を照らしながら停まっている。そして何人もの警官があわただしく工場内を歩き回っている。制服の上に白衣をつけた鑑識課員が、隅のほうの担架の回りを、天幕で囲い、中で死体の検死を行なっている。

住宅地とは離れた河川敷なので、幸いヤジ馬の姿はなかったが、工場全体は作業をストップさせられているらしく、手のあいた工員たちが、庭で警官の動きや鑑識の仕事を、眺めている。

祐未子の車が、工場への下り口の道にかかったとき、あわてて、二人ばかり警官が近寄ってきて、制止した。

「今、中で事件があった。立入り禁止だ」

「私はここに三日ほど前から予約を入れて、車を圧縮してもらうように頼んであったものですが」

昂奮している若い警官に祐未子はそう答える。

「駄目だ。駄目だ、予約でも何でも受け付けるわけにはいかない。今日は、いや当分、この工場では作業中止だ」

やんわりと祐未子はいう。

「そんなことといって、お巡りさん、後悔するわ。もし中に隊長さんがいたら聞いてごらんなさい。石島祐未子が来ましたからって。もっともそれが面倒なら、ここから帰ってもいいけど」

年長のほうの警官が何か気がついたのか、あわてて挙手の敬礼をしていった。

「すぐ現場主任に報告してきます。たしか、石島ユミ子さんですね」

「そうよ。きっと隊長さんはふっとんでくるわよ」

「暫時お待ちください」

もう一人の警官のほうに手まねで命ずると、二人の警官の間に明らかに身分差があるのか、

「はっ」

と答えて先輩警官のほうに敬礼してから、その若い警官は下の工場の庭のほうに走って行った。

祐未子の予言したとおりになった。庭のパトカーの中から私服の刑事が二人飛び出して駆け足でくる。続いて庭にいた警官が七、八人その後を追ってくる。中には腰の警棒を外して手に握ったり、ピストルのケースの蓋を外し、銃把の上を掌で押えて、いつでも抜けるように身構えながら駆けてくる者もいた。

まるで殺人の現行犯の兇暴な男でもやってきたような狼狽ぶりだ。珍しいことにこれまでほとんど自分の考えを言葉にすることがなかった、自殺志願の空腹男堂四郎がそれを見て、

「みなかなり昂奮してますな。あれでは長生きできないな」

とぽつりといった。それがついさっきまで死にたがっていた男がいうのだから、何ともおかしかった。

刑事がまっ先に車に近づき、窓から覗くようにしていった。

「石島祐未子だな」

「ええ、そうよ」

「殺人と死体遺棄の現行犯として緊急逮捕する。自分で降りて来なさい」

「そんなに昂奮しなくても降りて行くわよ。でもね、その前に、さっきここへ『予約している石島です』といってやってきた女と私が同じ人間かどうか、受付をした従業員を呼んできて首実検でもさせたらどうなの」

相手はぐっとつまった。彼女はさらにいう。

「もし現行犯としての緊急逮捕なら、よけいしっかりした証拠がないと、不当な逮捕になりかねないわ。死体遺棄にも何にも、私は今日ここへ来たのは今が初めてなのよ。まして殺人なんて。私が乗せてきた人はこうしてピンピンしてるわ。受付の人を呼んで

きて」

いかに強引な刑事でも、現在の警察では証拠も逮捕状もないのに、扉をあけて祐未子を外にひきずり出して手錠をかけるわけにはいかない。

一人の警官が気をきかして、工場まで駆け下りて廃棄車輛の受付係の老人をひきずってきた。息を切らせながら坂を駆け昇ってきた、六十ぐらいの男は、眼鏡をかけ直し、車の中を覗きこんだが、

「さっき来た人とは全く違います」

ときっぱりといった。刑事は叱りつけるようにいう。

「いいか。もう一度よく見ろよ。昔から犯人は必ず現場に戻るという原則があるのだ。後で間違いましたじゃ通らないよ」

「だから、はっきりと違います。私はもう六十五歳になりますが、一時間前に見た女の人を間違えることはありません。もっと面長ですし、年は同じぐらいだけんど、こんなに可愛い女子ではありましねえ。もっと何とかという女漫才に似たブスで、こちらのようなタレントと間違えるような可愛い子ちゃんじゃありません。年はとってもこれでも女にかけては、目がきくほうで……」

なおもしゃべろうとするのを、

「よけいなことまでしゃべらんでもよい」

一喝された。

「九時半に予約して、名前は、石島祐未子という電話があって、そして九時半にちゃんと車に乗ってやってきたんだから、さっき来たその女が当人の石島祐未子に違いない。とすれば、石島祐未子は犯人であり、今来たこの女が自ら石島祐未子と名のるからには、もはや犯人であることは間違いない。理屈からいったらそうなる」

刑事に叱られて不服そうにしていた受付係の老人がいった。

「ところが、刑事さん、少しおかしいことを今、思い出しましたよ」

刑事の鬼のような顔がますますきびしいものに変わった。

「何だ早くいえ」

「この人が今乗っている車を見て初めて思い出したんですが、予約を受けるとき、後で整理する都合もあって、車の種類と色をきくのです。たしか予約ではクリーム色のベンツとききました。やってきたのは同じクリーム色でしたが、国産の車でした。そのときは、まーお客さんの中には見栄を張ったり冗談で、『ロールスロイスだ』『ベンツだ』という人がいるので、そんなものだと軽く考え、別に聞きもしませんでしたが、今、考えてみると、それもおかしいです」

「たしかに今の話は間違いないのだな」

「もう五十年も車だけ見て暮らしてきています。間違いなど絶対ありません。コロペットの59年型カスタムです」

「ふーむ」

と唸ってしまった。

車の扉をあけて祐未子は出た。もちろん誰も手錠などかけたり、逮捕しようなどとする者はいない。少なくとも殺害現場でも見るとか、体や衣服に血痕がついていたり、服がちぎれていたりという、有力な証拠がない限り、この場ではどうにもならない。

何しろ逮捕状もまだ無いのだ。そのとき例の空腹男がのそりと反対側の扉から出てきた。やたらに大きい。

「この人は」

刑事がきく。

「私の会社の従業員で、どうしろうさんというの」

「どうしろう。本名ですか」

「ええ」

そう答えた男は思いもかけないことを刑事にいった。

「死体の状況を見せていただけませんか」

「いや、それはできません」

「なぜですか」
刑事が答えた。
「少なくとも、私どもの心証の中では、この社長令嬢の石島さんの死体遺棄、損壊の未遂、の両罪の容疑は今の証言で消えましたが、しかし男の殺人への容疑については消えていません。ともかく石島祐未子という名は、この事件の中で出てきた最初で、ただ一つの名前ですから。少なくとも貴女が石島祐未子である限りは、容疑は消えません」
「たしかに私は本物の石島祐未子よ。ほらここにちゃんと学生証もあるわ」
そういって、いつも胸のブラウスの内側に紐で吊るしてある、学生証と通学定期が入った革ケースを出して見せた。刑事はことさら胸に顔を近づけ、ときどき鼻をひくつかせて肌の匂いをかぎながら、それでも顔だけは真剣な表情で中の写真と当人の顔とを見比べている。
「なるほど、学習院大学。それでベンツに乗っておられる。そしてまだ使える立派なベンツを廃棄処分に持ってくる。さすがにお金持ちのやることは違いますな」
そういいながらも自分にいい聞かせるように小声でつぶやいた。
「いくら金持ちでも、きれいな若い娘さんでも、それだから殺人をしないとはいえませんからなあー」
それから、今、思いついたかのように刑事は提案した。
「死体の様子は、途中で私が話をします。事件の概要についても説明しますから、一緒に署まで同行してくれませんか」
「ええいいわ」
と祐未子はあっさりいった。
「……逮捕はできない。といってこのまま自分らの手の届かない所に放免してしまうのも惜しい。それで言葉巧みに署に連行する。これでしめたと……もし刑事さんが考えるのなら大間違いよ。私は、今警

察に不当に逮捕されているお父様にあって、釈放してもらうようにするために行くんだから」

「――――」

と声に出さないが刑事はにが笑いした。

「ともかくお嬢さんにはかないませんよ。何でもお見通しだから。警察官としては、やりにくい世の中になったもんです。ついでといっちゃ何ですが、私はこの年でまだベンツという高級車には乗ったことはありませんのでね、一つ後ろに乗せていってくれませんか。あんた方も罪人のようにパトカーで警察へ運ばれるよりは、自分の車で乗りつけるほうが何ぼか気分もよかでしょう」

そういうことで、この鬼瓦のような刑事を乗せて、また土堤の道を、板橋の区でも、北端地域を受け持つ、浮間警察署へ戻ることになった。

4

ベンツから降りた刑事はすっかり得意そうになって署に入って行く。

「おうどうしたんだ。犯人はもう捕まったのか」

中へ入って行くと、両側から同僚の捜査課の刑事が声をかける。

「うん、まあ、そういうようなものだ」

彼は漠然とあいまいに答える。それにしては同行の刑事はいないし、容疑者らしい男女には手錠もかけられていないので、同僚たちが不審そうな顔をする。

「うんまあー、今のところは重要参考人に任意出頭に応じてもらった段階だがね」

とこれは後ろには分からないように小声でいったつもりだが、ちゃんと二人には聞こえていた。

しかし二人とも黙っている。

二人は捜査課の取調室へ通された。署に残っていた課長も出てきて、二人の前には忽ち五、六人の目付きの鋭い刑事が並んだ。気の小さい者ならこれ

だけで震え上がってしまって口もきけなくなる。
一応中心に坐っている課長は、責任者だけあって言葉遣いは丁重であった。
「石島祐未子さんですね」
「はい」
「そちらは」
「私がこれから始めようとする会社の重役予定者です」
祐未子が代わって答えると、課長は直接きいた。
「それに間違いありませんか」
「はい」
「お名前は」
「堂四郎」
「どうしろ？」
「はい、御堂の堂に四の四郎と書きます」
「そうですか。お呼びした事情は大体お察しのとおりです。今朝、石島祐未子さんは九時半に車を圧縮して廃棄する処理工場に持って行くことを予約していました。予約は三日前には入っていました。予定の時刻にあなたは行きました」
「私ではありません。それについてはその刑事さんが実情をよくご承知のはずです。先に刑事さんから現場の状況を聞いてから、私らの事情聴取をしてください。そうしないと話が二度手間になりますから」
祐未子は課長でも刑事でも全然怖れず、ずけずけという。思いがけない強い口調に少し気難しい顔で課長が、
「百目鬼刑事、さっきまでの実情というのを先にちゃんと私に報告しなければ駄目じゃないか」
と叱った。
「はい。申し訳ありません。私も別にこの方を容疑者として連れてきたわけでなく、ただあんまり事件が不思議なので参考人として来てもらっただけで……」
「弁解はいい。早く状況をいいなさい」

また叱られて、刑事はあわててさっき、廃車受付の係の爺さんに聞いた話をした。

これでは容疑など何一つない。課長も頭をかいて詫びた。

「これは失礼しました。我が署期待のホープ百目鬼刑事が、意気揚々としょっぴいて、いやお連れしてきたので……私はもう石島祐未子を連行してきたものとばかり思いまして……」

「私、石島祐未子です。ですから犯人は石島祐未子ではありません。私の名を名のるニセ者です。ここを誤解しないでください」

「そうです。そうです。そのニセ者のほうの石島の本物の犯人をひっぱってきたとばかり思いこみまして」

すると突然あの空腹の男が、椅子に坐って背をのばしたまま、無表情の声で、お経のような文句を唱えだした。抑揚区切りが全くない。

「犯罪捜査規範第七章取調。第一六三条（取調の心構え）取調に当っては予断を排し被疑者その他関係者の供述、弁解等の内容のみにとらわれることなく……」

刑事たちはこの妙な男にびっくりしている。

「ところでと」

一節を朗々と誦し終わった彼は、

「親愛なる刑事諸君、君らが先ほど殺人事件の重要容疑者として逮捕した、この石島嬢の父君は今、どうなされていますか」

といった。

みなは一瞬、気をのまれてお互いに顔を見合わせている。祐未子でさえ、さっき今にも死にそうだった空腹男の、この堂々としたしゃべり方にただ驚いている。

ようやく課長が気を取り直したようにして、

「本署においては一度、容疑者として断定した者は、当人の反省を待ち速やかな自供をうながすために、二十四時間は独房に入れ、一切の外界との連絡を断

つ。弁護士との接見も禁止される。面会も差し入れもできないという内規になっています」

それから課長はぐっと顔を近づけてのり出すようにして堂にいった。

「……ところで君は誰だ。馬鹿に警察の捜査規則に詳しいようだが」

「特に誰というほどの者ではありません。名前はさっきいったように堂四郎です。今日、このお嬢さんの社長に飯を喰べさせてもらって、死ぬのを少しのばさせてもらっただけの男です」

何だか要領を得ない。いずれ締め上げるときは留置場にでもほうりこんで、ゆっくり締め上げてやればいい。もう少し当人の言い分をきいてやろう。子供か女の子でもからかうつもりになってきて、刑事たちは彼の次の言葉を待った。

「この石島祐未子さんは取りあえず、死体を持ちこんだ女と違う。しかし石島家が予約して車を工場に運ぶことをどこかであらかじめ知った者がやったことには違いない。そうなれば、もしベテランの捜査官なら、まず石島氏が、どこかで誰かにそれをしゃべったことがなかったかを聞くのが順序だろう」

刑事たちはいっせいに動揺した。いわれればコロンブスの卵で当たり前のことだが、ともかく頭から石島祐太が殺し、娘に運ばせたとばかり思いこんで、その線で当人のすなおな自供を待つばかりの気持ちであった刑事連はみな意外な点を突かれた思いになった。

課長は少し言葉遣いが丁寧になった。

「堂さん。一体どんなご経歴をお持ちなんですか」

「私は経歴なんて持っておりませんよ。東京大学の法学部で少し法律を勉強したのと、後は昔の、コナン・ドイルやシムノンやアガサ・クリスティの探偵小説を読むのが好きだっただけの男です。おかげでどこにも正式に就職せず、金と喰い物がなくなると少し仕事をして、また金ができると仕事をやめてアパートで寝転がって本ばかり読んでいるのでついに

女房にも逃げられ、まともな職業にもつけなかった男ですよ」

「ほう、東京大学を出られて、失業者」

課長はいかにも不思議な生物を見るような目で、この男を眺めた。それから、

「では、今貴君がいわれたとおりの観点から私たちは石島令嬢のお父様に事情をお聞きします。お忙しいところを何ですが、ほんの二、三時間で終わると思いますので、その間、お二人は署でお待ち願えませんか。たとえ誤認逮捕でも、いったん容疑者として逮捕勾留した者に対しては身もと引受人の署名捺印がないと釈放できませんので」

「分かったわ。それでは今日中に父を返してもらえるのですね」

「その可能性がかなり強いと判断されます」

これだけでも、警察側としては初動捜査のミスを認め、かなり譲歩した形になった。変な意地を張られて、もう二、三日泊められてはしようがないのでおとなしく待つことにした。文句は後でゆっくりいえばいい。この空腹男堂四郎が、変なことをこれ以上いい出して刑事たちを刺激しなければいいがと祐未子にはかえってそれが心配になってきた。

ところが彼はまた口を開いた。

「ここは浮間署だね」

取調べのために立ち上がった課長がふりむいて、

「ええそうですが……なぜ」

「吉岡君いるかな」

「吉岡というと署長の吉岡警視殿のことですか」

「うん」

「いますが」

「ちょっと呼んできてくれないか」

「署長をですか」

疑わしそうに見る。

「ああ、大学で同級だった。刑法は宮崎ゼミで一緒に習った堂だといってくれ」

「いうにはいいますが」

一人の見張りだけ残して、残りの刑事は捜査課長を囲むようにして留置場のほうへ出ていった。ほんの二分もしないうちに、金ピカの肩章の制服を着た、堂と同じ年ごろの男がやってきた。そして部屋へ入るなり、なつかしそうに堂の肩を叩いていった。

「なーんだ、堂君。来ていたのか。それならそれで早く連絡してくれればいいのに。相変わらず何も喰わず、推理小説ばかり読んどったのだろう。そんな生活をしていたら、誰も嫁さんには来ないし、そのうちに飢え死にしてしまうぞ。皆心配しとるよ」

堂の特有の生き方は、同級の友人の間には知れわたっているようだ。

「すまんな」

「特上の鰻丼でもとるか」

「いや今日はまだいい。さっきこのお嬢さんにカツ丼を喰わせてもらった」

「ほうこのきれいですてきなお嬢さんは、おまえの何なのだね」

そこで堂四郎は朝の土堤でヒッチハイクしてから、今までの事件のことをすべて詳しく説明した。

5

父はその日のうちに釈放された。それも署長以下、全捜査陣の丁重な見送りの中で警察を出たのだった。

犯人の逮捕はもっと早かった。

石島祐太が日常接触している人間は家族以外では、石島家の不動産管理の小さな事務所で、社長を手伝っている、ただ一人の社員の中年の婦人事務員だけである。

犯人はその婦人事務員の娘であった。本当の父が亡くなった後、四、五年して義父として入りこんできた男は、酒飲みのギャンブル好きで、母と娘がせっせと働いて稼いでくる金を遊んで費消してしまう。そして金と酒が切れるとすぐ母娘二人に向かって殴ったり蹴ったりの乱暴をする。

そしてつい先日、母を殴るのを必死に止めようとした娘ともみ合っているうちに邪(よこしま)な心を抱いた。いきなり着ていた服を脱がし、無理やり犯してしまったのだ。ボーイフレンドも作らずまじめに暮らしてきた娘は、それですっかりショックを受けて明け方まで泣いていた。母親がその娘を慰めているうちに、二人の間に自然に殺意が湧いたのである。

酒に酔って正体もなく寝込んでいた、この男を母と娘で、滅多突きにして殺したというのだ。

刑事が事務所にいる婦人事務員を連れてきて事情を聞こうとしたら五分もたたないうちに、彼女はわーっと泣き出して白状した。事件としては単純な事件だ。そして解決も早かった。

すべてが終わってから二、三日後、結局潰される運命を免れることになったベンツに乗って家を出るとき、祐未子はいった。

「お父様、私、とうとうすてきな仕事を思いついたわ。年に一億円は赤字で落とせる」

「ほう、それは何だね」

父は庭先で車の出て行くのを見送りながらきいた。

「それは昼ごろ、協力者の賛成を得られた段階でうちに電話するわ。でもヒントを一つね。せっかく、このベンツは潰されて鉄の塊りになるのを免れたのですからね、これも何かの縁でこのベンツをうんと利用してみたいの」

「ほう、では運送業か、白タクでも始めるのかね」

「それはすぐ分かるわ」

車は広い邸から相変わらず混雑している国道に出た。埼玉県全域から、荒川を越えて都内へ入ってくる車が、この国道へ集中する。大変なラッシュだ。

しかし小豆沢の町のガソリン・スタンドへ行くのには、この国道を通る以外は道はない。一キロほどの道を三十分もかかって進み、やっとガソリン・スタンドの横の小路へ入った。

細い道だが、わざわざ入ってくる車がないのでいている。

ともかく、月に千万円近くの金を経費として、税務署員が納得できる形で落としていかなければならない。どうしてもこれしかない。それは探偵だ。

このベンツで日本中を走り回り、何事もたっぷり費用をかけて事件を処理する。時には金で頬っぺたをはたくようにして、真相を自供させる。

ただしいずれも、金を払った相手には情報提供費として、がっちり領収証だけ取っておく。そして報酬と経費の決算が最後に一億円の赤字と出れば、父は資産の中から、多額の所得税をむしりとられないですむ。

今、自分にできる親孝行はそれしかない。

あの婦人事務員と娘がやった義父殺しは悲惨であるが、彼女が新しい仕事を始める上にはいい教訓になった。

それにたしかに人殺しは重罪だが、事情が事情だ、同情すべき余地はたくさんある。父も経費落としにこれ以上のものはないと大喜びで、最高クラスの弁護士をもう三人も現金を風呂敷に包んで頼みにいった。金が大っぴらに使えるのが嬉しくて仕方がないようだ。

もちろん執行猶予がついて出てきたらすぐに、もしつかなくても、二、三年で出てこられるだろうから、その後は必ず石島不動産が親子ともに使うつもりでいる。

先日警察の帰り、別れるときに、堂四郎には、要らなくなったベンツのプレス代三万円を渡し、

「二、三日後に仕事を頼みに行きますから、それまではたくさん喰べて生きていてね」

とくれぐれもいっておいた。いくら死にたい男でも、まだ金があるうちは、約束どおり生きていてくれるはずだ。

そのボロアパートはすぐ分かった。

あまりの古さと、傷みの激しさにびっくりした。いくら自分の家の持ち物といってもこれではひどすぎる。恥ずかしいから、とり潰してしまい近代的な

マンションか、白塗りのモルタルのしゃれたアパートにでもたてなおしたいくらいだ。しかしこの物凄いひどさも、安い値段で住める原因になっているのだから、ここを潰されては早速困る人も出てくるのだろう。

正面玄関の八手の鉢の前にベンツをでんと止めた。子供がやってきて珍しそうに車の中を覗きこむ。おかみさんがすぐ出てきて、

「こんな所に車を止めちゃ、困るね！」

と文句をつけてきた。しかし彼女は毅然としてそのおかみに答えた。

「私は石島です。このアパートの持ち主です。分かりますか」

「ああ」

と声を上げ、まじまじと彼女の顔を見てから、急にぺこぺこしだした。

「これはこれは、石島社長のお嬢様ですか。これは知らぬこととはいえ、先礼しました」

それを無視して中に入り、

「堂さんて人いますか」

ときいた。

「堂さんなら一階の左側の三番目の部屋ですよ。それで何ですか、いよいよ堂さんは追い出されるんですか。……それは可哀そうですよ。たしかに堂さんはここ一年ばかり家賃を全然払っていないってことはきいていましたが、しかしあの人は決して悪い人ではないんです。ただ探偵小説の本が好きで、ひまがあれば寝転がって本を読んでいるのです。仕事に行かないので、全然、お金が入ってこないだけなんです」

祐未子はにっこり笑ってそのおかみさんに答えた。

「ご心配なく。追い出しに来たんじゃないわ。堂さんにもできるいいお仕事を見つけてきたのよ」

「それじゃ、堂さんも喜びますわ。堂さんの部屋はご当人と、読みかけの本以外は本当に何ひとつないから、どんな貧乏な泥棒でも入りません。だから鍵

はかけてませんよ」
「ありがとう」
礼をいってから、ノックもせずに扉を押した。本当に鍵などかけていない。そのまま開いた。
たった一枚の毛布に丸くくるまったまま、堂は寝ていた。上衣とワイシャツが脱ぎちらされ三、四冊推理小説の文庫が転がっているだけで、後はきれいに何もない部屋だった。
つかつかと入って行くと、まず窓をあけて、くさったような男の体臭を外に出し、まだ気がつかずに寝ている堂の毛布をひっぱった。
ごろごろと体が三回ばかり回転して部屋のはじにぶつかり、
「あーっ、何するんだ」
といってやっと目をさました。
「起きたのね。よく聞いてよ、新しい仕事が決まったのよ。私たちの」
「ぼくたちの」
「そうよ。私が社長で、あなたが重役。これからは寝転がって本ばかり読んでいられないわよ」
「しかしぼくはとても毎日決まった時間に出勤して働くなんて無理だ」
彼女は毛布をさっさとたたみ、あたりを片付け出した。
「誰が会社出勤しろなんていった。ここで本物の探偵になってもらうの。これからもこの部屋で一日中机に向かって好きな探偵小説を読んでくれればいいのよ。ふだんはね。そしてもし仕事が入ったら、その今まで読んで頭の中に入っている知識や、東大で習った法律の知識を全部使って、事件を解決するのよ。世の中には、この間、私の父や私の身の上に突然降ってわいたような事件に巻きこまれて同じように困っている人がたくさんいると思うの。そのために、こちらから車で出かけてやって、向こうが払えるだけの費用で事件を解決してやるのよ」
「それは面白い。ぼくもこれまで本で蓄積した知識

を実際に応用してみたかったのです」
「思いきり活用できるわよ。さあ、話が決まったら、ぐずぐずしていられないわ。十時には大工が来て、窓や床を直すわ。十一時に家具屋が来てベッドと机を入れる。ここはこれから全国を走り回る移動探偵局の東京本部になる所ですからね。十二時にはペンキ屋。電話や無線機の設備は一時に入るわ」
それはまさに彼女が綿密にたてたスケジュールどおり、正確に実施された。
大勢の職人が次から次へと出入りし、忙しく仕事をし、その間に同じアパートの人にはすべてもりそばを配り、職人には寿司やコーヒーを出しているうちに午後三時にはすべての仕事は終わった。
『移動探偵局　東京本部事務所』
新しく作られた白塗りの扉にそういう大きな看板がかけられた。
中には机が二つ向かい合い、隅に疲れたらいつでも横になれるシングルのベッドがおかれた。窓は明るいアルミサッシにレースのカーテンがかけられ、その上に黒い遮光カーテンもつけられた。机の上には電話、無線機、タイプ、筆記具、そして六法全書や捜査関係法規例集などが並べられた。
職人たちも去り、嵐のようなひとときも終わった。廊下で見物していた、アパートの住民たちもみな自分の部屋に去って、やっと二人だけになった。
「私も今日からこの部屋にずっと泊まるわ」
石島祐未子は事も無げにいった。
堂四郎はあわてた。
「それは困ります。こんな狭い部屋で、ベッドは一つしかおけません」
「だったら、二人でよりそって寝ればいいじゃないの。シングルだって充分二人で寝れるわよ」
「そんなことできません。ぼくは十年前に女房に二週間で逃げられて以来ずっとセックスをしていません。だからもし欲望がわいてきたら」
「だったら……」

と祐未子は言いながら、扉にとりつけたばかりの内鍵をきちんとしめ、窓の黒い遮光カーテンをひいた。同時に電気のスイッチを押すと、甘いムードのピンクの光になった。ボロアパートの中によくこんな部屋が、それも僅か半日の間にできたと思えるほどの、ムードたっぷりの部屋になった。

「……その十年ぶりのセックスをしてみたらどうなの」

「そんな……」

後は声も出せないでいる彼の前で、祐未子はドレスを脱ぎ、スリップも、その下の二つの下着もとった。

小さな台所がついている。そこでタオルを絞って、裸の体を拭き、彼にも、

「さあ、裸になりなさい。体を拭いてあげるわよ。これからは二人で協力して、世の中の不正と戦って行く、探偵になるのだから、一心同体の気持ちでなくてはやっていけないわ。それには、まず肉体的に本物の一心同体にならなくては駄目よ」

ついに堂の体からも着ている物はすべて脱がされてしまった。あまり栄養が豊かでない体を、何度も何度も濡れたタオルで拭いて、きれいにした。そのうちに、やせた体に似合わぬたくましいものが直立してきた。

「本当にこれが十年も使われないでいたなんて、あんたも変わった人ね」

そういうと彼女はとび上がって首を抱きしめ、甘いキスを交わしながら、ベッドに倒れこんだ。

一時間、二時間、二人には充分すぎる陶酔のときがすぎた。

その声はアパート中に聞こえたかもしれなかったがもう祐未子は気にもしない。これも仕事のためだ。必要なのだ。それにしてもたっぷり満足した。

ぐったりした彼女はどうにか片手をのばして電話機をとり胸の谷間にのせた。すぐダイヤルを回してから話しかけた。

「お父様やっと仕事が決まったわ。この間の人と二人で探偵事務所を開くの。全国をベンツで移動して歩くので、移動探偵局と名をつけたわ。年間一億は経費で落としてみせるわ。そうね。私はO型で気まぐれのところがあるから、『気まぐれ令嬢・移動探偵局』とでも名前をつけようかしら。今二人の調印が終わったところなの。じゃ、バイバイ。またね」

〈第二話〉　行方不明の相続人

1

日本で仕事をしている限り、昔はどの企業の目も銀行に向いていてその一挙一動を常に気にしていた。そして今は企業の目は全部、税務署に注がれている。いかにその不当（と、どの企業の当事者も必ず思っている）巨額の収税から免れるかという、合法的な伝票操作が、業務のすべてに優先する。

大体、企業の本来の目的は利潤追求にあり、その利潤の中から払う税額をいかに少なくするかという点では共通している。

ところが、社長一人、重役一人のたった二人の、この会社、

『気まぐれ令嬢・移動探偵局』

は全く目的が違う。そのすべての目が税務署に向かって注がれているところは同じだが、いかにして税務署が快く納得してくれる範囲で赤字を出し、その損失赤字を年間一億に持って行くかだけが会社運営の目的なのだ。ともかく、社長の父が、先祖伝来継承した、膨大な不動産がどうしても自然に産み出してしまう年間一億の利益を合法的に納得できる形で相殺してゼロにしなくてはならない。

少なくとも絶対に利益を出してはいけない。

そういう目的で作られた探偵社だ。その事務所はもとが六畳一間分のスペースに台所と押入れと玄関しか無い木造ボロアパートの一室だから、探偵局に改造するに際して、いくら外をペンキで塗り、新建材のきれいな扉をつけても、それで中が広くなるというわけのものでない。二つの事務机に、無線機やその他の機材を積み重ね、あいたスペースには、シングル幅のベッドを押しこむと、もう中を歩き回る余地もない。

客が来たらどうするかと、ひとごとながら心配になるが、そこは最初から移動探偵局と名づけて、こちらから即時出張を建前にしているだけあって、先

方から客がとびこんでくることはないようにしている。

といって、朝がもうとっくにあけて、窓のカーテン越しに、明るい陽がまぶしく射しこんでくるころまで、ベッドの中に入っていていいというわけのものではないが、まだ二人は裸のままベッドで抱き合って、利潤にも赤字にも、何の関係もない作業を、汗まみれで営んでいた。石島局長もそのたった一人の局員堂四郎も共に若いのだ。

クーラーが備えつけられそれがフルで回転しているので、土台のゆるんだボロアパートの建物全体が根太から震動する。だから二人がベッドの中で裸で抱き合って、お互いの背中に、びっしりと汗の粒が浮かび上がるほどの、過激な接触による快適なスポーツに熱中して床や扉がベッドと共に震動しても、それがそんな運動のためだとは、ストレートに思わせないでいられる。

たとえそうとは分かっていても、外の人に直接にはそういわせないようにするのが、名家の令嬢としての心掛けでもあり、またあえて学習院大学へ彼女が通って身につけた品性にもなっている。

激しい陶酔の後の静かな安息のひとときも終わった。今日もまた暑い夏の日が続く。

局長が、たった一人の部下の体をゆすぶった。

「さあ、起きましょう。御飯にしましょう。今日あたりはきっと、大きな仕事がとびこんできそうよ。うんとお金がかかって、絶対儲かりっこないような、いい仕事が……」

損失は大歓迎だが、それが税務署が膝を叩いて感心するような合法的な形で、計上されなければならない。そんなうまい仕事なんてそう滅多にはない。

「ともかく汗を拭いて、ちゃんと服を着て、いつでも外へ出られるようにしましょう。ベッドにいる間は、二人の愛の巣だけど、ベッドを離れて机に向かったら、……狭いから椅子に坐る以外ないわ。そのときからもう仕事は始まったと思ってね」

本当はまだぐずぐずベッドの中にいて、できれば夜通しの運動に疲れた体を横たえ、好きな探偵小説でも読んでいたかったらしい、怠け者の堂四郎の体を局長はひきずり起こした。

先日、荒川の土堤でぼんやり立っていた空腹の彼を拾ってきて、ともかく今度の仕事のパートナーにして以来、飯はたっぷり喰べさせるが、決して怠けてごろごろさせることはしなかった。少なくとも今の立場では、たとえ年齢は部下の堂より十七歳も若い十九歳であっても、立場としては社長であり、全面的な保護者でもある。

二十四時間そばにいて、三食をたっぷり喰べさせる代わりに、ひとときも勝手な時間をあたえない。しかしそうでもしなければ、この東大の法学部を出た三十六歳の男、堂四郎は、また一人では生きていけない情けない男でもあった。

自分より二十センチも背の高いひょろっとした男の裸の体を後ろから押すようにして、全裸の祐未子は小さなキッチンの流し台の前に行った。調理や食器洗いのブリキの流し台が同時に、洗面所や洗濯場もかねている。これは古い小さな木造アパートでは、どこも同じ構造になっている。冷たい水でタオルを絞り彼の体の汗と、さっきの運動の結果生じた体の汚れを何度も拭いた。それから自分の若々しく張りきった体もゆっくり拭く。

堂四郎のむさ苦しい部屋が、つい先日気まぐれ探偵局に改造されるとき、特別にアンペヤ容量の多い電線をひいて、パワーの強いルームクーラーを置いたので、冷たい水で拭き上げた体はみるみる乾いて、全身が涼しくなった。

石島局長は胸と腰の下着を二枚だけつけると、スリップは省略して白いワンピースを直接着た。堂局員はパンツ一枚の上に、シャツは省略してズボンとワイシャツだけつけ、いかにも活発に仕事をしているように袖をまくって折った。

ちょうど、それを待っていたかのように扉の外を

ノックする音がした。二人は顔を見合わせた。
たしか先日三大紙の三行広告欄に、気まぐれ令嬢・移動探偵局の広告は出した。
『どんな困難な事件でも喜んで引き受けます。調査は入念、解決は迅速、ただし費用は格安。平凡な事件はお断わり』
二わく分六行を太い罫線で囲い、目立つようにして、それに電話番号を書いておいた。
ただし住所は誌してないので、直接この局を訪れる人はいないはずだ。昨日の夜の出前の寿司だったら、引き換えに料金を払って、表に容器を出してある。
一瞬誰かと疑ったが、ともかく、もうベッドから起き上がって、身仕度だけすましておいてよかった。ベッドをちらと見たが、別に乱れていない。狭い部屋だから、ベッド全体をかくすことはできない。まあー仕方がない。
「どうぞ」
その声と同時に、一人の男がぬーっと顔を出した。人相がひどく悪い。サラ金の取り立てか、暴力団の中幹部あたりでもやらせたら似合いそうな鋭い目付きをしている。
最初は二人とも思わず表情が硬くなったが、しかしすぐに、どうもどこかで一度見たことがあるのに気がついた。先方は、
「やあー、様子を見に来ましたよ」
と、何やら親しそうに話しかける。まだよく思い出せないでいると、
「百目鬼です。百に目に鬼と書く」
といった。それでやっと、祐未子のほうが思い出した。
「ああ浮間署の刑事さんですね。私を無理やりにでも殺人犯にしようとした」
「いやー、あんときは申し訳ないことでした。まあー職務熱心のあまりのことと、どうかお許しください。あれからお二人が探偵事務所を始めたと聞きました

ので、まあーどんな具合か様子を見に来たわけです」

「そりゃーどうもご丁寧なことです」

「しかし、机も無線機もその他の資材もなかなか充実して立派なもんですな。それにベッドまである。疲れたら一休みできる。我が警察の刑事部屋にもこういうベッドがあり、疲れたらそばで制服を脱いでスリップ一枚になった婦警さんが優しくマッサージしてくれるというような仕組みになっていれば、私なんかたとえ停年が来ても絶対警察をやめんで、兇悪犯人逮捕に頑張り抜きますよ」

そういってまたベッドを一睨みする。よほど気にかかるのだろう。

「何もそんないやらしい目で見ないでください。ここはもともと堂さんのお部屋だったのを事務所にしたもので、部屋が狭いから堂さんの夜寝るところも一緒になってしまっただけです。私が堂さんと二人でそこを利用するなんてことは絶対ありません」

祐未子は思わずそう強調した。しかし先方はベテランの刑事だ。まして自白の名人といわれた男だ。むきになって祐未子が弁解すればするほど、内心ではこれは怪しいと感じている。ただし今は捜査でないからそれ以上は追及はしない。

「そうですか。まあ、そうでしょう。ところで立ち話も何ですので、そこへ坐らせてもらっていいですか」

来客用の椅子はどこにもない。置く余裕（スペース）がないのだ。二人の神聖な愛の営みの場所をむざむざ他人に踏みこまれるのは、女として辛いが、拒否するとまた怪しまれる。

「どうぞ、どうぞ」

というと、そこへ刑事が、

「では失礼します」

といって坐った。もう一つ、

「失礼します」

という可愛い声が聞こえ、一人の少女がその横に

並んで坐った。ばかでかい百目鬼刑事の後ろにかくれて、今まで石島局長にもその向かい側に坐っている、堂局員にも少女の姿がまるで見えなかったのだ。

十六歳ぐらいだろうか。ほっそりした体に長い肢が、短いスカートからはみ出す。

それを気にして一生懸命隠そうとしてスカートをひっぱっている。まだ胸も無い。ポニーテールでまとめた髪や顔は少女漫画の主人公のように可愛い。

「あら、そのお嬢さん、刑事さんのお子さん」

……それにしてはずいぶん違いますねーという声がもう少しで続いて口から出そうになったのを出さなくてよかった。

百目鬼刑事はあっさりいった。

「いや、昔から瓜のつるから、なすびはならぬといいますよ。いくら間違っても私からはこんな可愛い子は生まれませんよ。もし生まれたら女房を姦通罪で逮捕して拷問にかけて相手のハンサムのタレントの名を白状させてやりますよ」

自分の顔や姿のことはかなり正確に心得ているらしい。石島局長は、

「じゃーどうしたの。もしあんたが刑事さんじゃなかったら、そんな可愛い子を連れて交番の前を通ったら、婦女誘拐罪容疑で取調べを受けるところだわ」

「まあーそうでしょうな。私もそれで、ここのアパートの前まではタクシーを奮発しましたよ。人にじろじろ見られるのがいやでね。どうしても、この子のことで、あなたの気まぐれ探偵局に解決していただかなければならない問題ができたのでね」

「すると、私たちに用があるのは、その後ろのお嬢さんのほうなの」

少女が立ち上がって、ぺこりと頭を下げた。

「よろしくお願いします。弓子と申します。等々力弓子と申します」

それまで黙っていた、堂四郎が、

「あの局長、またお寿司を取っていただけませんか。

まだ朝飯をすませておりません。お客さんにも一緒にとって差し上げましょう。そろそろ積極的に経費落としに取り組まないといけませんからね。私が電話をかけます」

と、すぐに勝手に上寿司を四人前注文した。よく考えてみれば、この探偵局は、本来の探偵業務より合法的な赤字を一億出すことに設立の目的があるのだから、彼のこの提案はたとえ額がいくら少なくとも、理論的には正しい。

四人前にそれぞれお吸い物をつけて注文してしまうと、電話をおいた堂は、すぐにいった。

「百目鬼刑事とお嬢さんは、故郷が一緒ですな。それも茨城か栃木ですな」

「え、どうして」

と刑事が驚いて聞くのへ、さらにいった。

「そして、それは山の中の川が大きく曲がっている村落の出身で、本来はあまり田畑がたくさんできない貧しい山間地でしょう。お二人の家は、親戚かそれでなくても、かなりその故郷の村の中で実家どうしが近い場所にあった」

刑事は感心して答えた。

「まさにさようです。どうしてそんなことまで分かるのです。先日あんたが署長と話をしているのを聞いたときから唯者でないと思ったが、しかしそんなことまでいつ調べたのです」

「いえ別に調べたわけではありませんよ。三字の苗字は関東では、茨城と栃木との特徴です。どうめきもとどろきもどちらもその音にあてて書く漢字はたくさんありますが、元は川の曲がり角で、水が大きく音をたてる場所を意味するので、山の奥の谷川の屈曲部や急流部には、必ずある姓です」

「そうですか。さすがに東大を出ておられる方だけあって、何でも知ってらっしゃる」

刑事も弓子も、このひょろっとした、自分一人ではこの世の中に生きて行くこともできない、生活無能力者の男の言葉をひどく感心して聞いていた。

そこへ大特急で上寿司が届いた。堂局員がいった。
「それでは一緒にお寿司を喰べながらお話を聞きましょう。腹がへっては戦さができないといいますからね。本当の空腹になると、人間は生きていることさえいやになりますからね」
扉の所で受けとった四つの容器を、弓子は一つずつ皆の前に置き吸い物の椀も配った。そして自分で玄関の横についている小さな台所にあった薬缶で湯を沸かし、茶筒から茶を出して土瓶に入れた。ほどなく熱いお茶もちゃんと四人の前におかれる。
ただ可愛いだけでなく、なかなか気がきいている子でもあった。

2

「今朝、私が机に向かって、昨日のコソ泥の一件の調書を作っていたとき、突然、この娘が訪ねてきたのです」
寿司を喰べながら刑事はまずそういった。
「私も五年前に村に帰ったとき、まだ小学校に行っていたこの子に会っただけですから、初めは弓子ちゃんとは分からんかったです。あまりの成長にびっくりしましたが、まあ、この時代の五年間はこんなものかと、すぐ納得しました。それでなぜ来たのか事情をききましたところ、まあ、この子の実家で今、さまざまのことが起こってるのでしてね、これはもう一歩間違うと犯罪というところまで行きそうですが、今はまだ被害者も出ておらん状況で警察が捜査を始めるのには、ちと弱い。どちらかといえば、民事の当事者どうしの争いで、警察には民事不介入の原則があるので、私の力ではどうにもならんといって、この子を説得して帰そうとしたら、わーっと泣き出しましてね。『もし警察が取り上げてくれないなら、荒川の橋から身を投げて死んでしまう』というので、困って考えているうちにこの探偵局のことを思い出しましたのです」

「そうですか。ではその刑事さんに話した事情というものをあなたから話していただけませんか」
「はい、お話しします。どうかこの探偵社のお力添えで、今度の問題を解決してください。お願いします」
もう一度ぺこりと頭を下げてから、この十六歳の少女弓子は、年に似合わぬしっかりした口調で語り出した。
「さきほど、そこの背の高い局員の方がおっしゃられたように、私の村はかつては田畑がほとんど無く、とても貧しい所でした。それで私どもの、お爺ちゃんや、お婆ちゃんの時代は村の人はほとんど、東京へ奉公に出て、女の人も吉原や洲崎という場所へ売られていったそうです。ちゃんと暮らしていた人でさえ大部分は満洲へ渡って行ったそうです」
「そうですか。今では」
「今でも若い人は、男は東京でバーテン、女はソープという所へ勤めに出て行く人は多いのですが、これは派手な雰囲気に憧れ、贅沢をしたい人が多いからで、今ではちゃんとした村の人は、別に特に贅沢をしたいのでないなら、ふつうに暮らして行けます。林業も盛んですし、近くに有望な金鉱もできてその地下の鉱業権を巡って、村の土地が高いお金で取引されているのです。それも成田などと違って、その土地から離れなくてもいい。今までどおり住んだり、田畑を作ったりしていても、地下の採掘権だけ認めればいいので、村は今、札束が舞い上がるほどのブームにわきたっています。しかしお金は人間を狂わします」
少女はそういって溜息をついた。しばらく考えていたが、また元気を振るい起こすようにしていった。
「私たちのお婆さんという人は、戦争のころ結婚しましたが、広い満洲に行けば、土地はいくらでもあるという、政府の宣伝に共鳴し、夫婦二人で満蒙開拓団という団体に入って満洲に渡ったのです。もちろん、満洲ではたくさんの畑を耕し、若夫婦は大き

な土地を持つ自作農として、幸せに働いていたそうです。終戦の年には、四歳の男の子と、一歳半の女の子の二人の子供を持ちました。そして親子四人で広い満洲でずっと働いて行けると思ったときに、突然の終戦で日本が負け、日本人は村を追われ、現地の農民に襲われ、無一文になって、生命からがら歩いて逃げる生活が始まりました。母は乳飲み子でまだ若い祖母に抱きかかえられてきましたが、兄は四つで歩かされてきたそうです。それが足が痛くて歩けなくなったのです。それに祖母にとっては頼みの夫の祖父は、途中でロシア軍に見つかったとき、まだ働ける若者だということで、目の前から捕虜の日本の兵隊の列の中に入れられて、連れて行かれてしまったそうです。女一人でとても二人の子を連れて日本まで帰れない。それに食料も無くなってしまった。仕方なく、母子三人が、飢え死にするよりは、せめて坊や一人の生命だけでもこの世に残したいというので、子供をほしがる満洲の人に売ったそうです。代わりに、粟でできた黄色い饅頭を二十個ほどもらって、次の大きな町へ辿りつくまで祖母も母も野垂れ死にしないですんだそうです。でも終戦後、故郷へ帰ってきた祖母は、いつもそのとき手放した四つの男の子のことを気にかけて、物かげで手を合わせては『無事に生きていてくれ』と祈っておりました」

話している少女も涙ぐんできたが、聞いてる三人も、ついしゅーんと黙ってしまった。あまりにも悲しい話だったからだ。

「ところが、母の兄がつい二年ほど前に帰ってきました。……でも母はその兄にはとうとう会えませんでした」

「どうしてですか」

「祖母は女の子一人だけ連れて帰ってから、少しして満洲の土地でロシア軍に捕われた夫が現地の収容所で栄養失調で労働ができなくなって、日本人の収容所長から虐待をされて殺されたということを、帰

国した仲間の兵士からの話で聞きました。それでも祖母は残してきた男の子に申し訳ないというのでついに再婚しませんでした。帰国したとき赤ん坊だった女の子はやがて年ごろになり結婚しました。もちろんそれが私の母で、非常にきりょう好しだったので、村では裕福とされている、地主の等々力家へ嫁に行ったのです。そして結婚後ほどなく私が生まれました。祖母は女の子がこうして無事結婚するまで成長し私という孫まで生まれたので非常に満足で、ときどき、満洲に置いてきた、男の子のことを思い出す以外はとても幸せだといっていました」

「それでどうして、お母さんが……」

「母は、見かけは丈夫で別に病気の気配はなかったのですが、やはり赤ん坊のとき、ろくにお乳もなく喰べ物もなく、半年以上も満洲の荒野を放浪して歩いたのが、幼い体に応えていたのでしょう。やっと三十七歳になったばかりの四年前に、急に心臓に発作が起こり、倒れてそのまま亡くなってしまいました。私が十二歳で小学校を卒業したばかりです」

聞いているとますます気の毒になる。

「祖母はまだ元気で、今でも元気ですが、そのときも、娘の亡骸にすがりついて離さずに『ああ親の私が代わりに死にたかったよ』と何日も泣き明かしました。でも男って仕方がないもんですね。母が死んで一年もたたないうちに、父はもう町のほうのスナックに勤めていた女を見つけてきて後妻に入れ、私と祖母は今の等々力家では居候のようになってしまいました」

ここまでは悲しいことを別にすればさして話としては複雑でない。ちゃんと聞いていれば、そのままずっとのみこめる、いわば他にもよくある話である。局長がいう。

「それで、お婆さんや弓子さんに出て行けとでもいうんですか」

そうだったら、どうも警察の介入できそうな問題ではない。

お寿司も無くなり木の容器は片づけられ、お茶がまた配られた。局長が女で、たった一人の局員が、いつもぼうっとしている、ひょろ長い男では、こんなことは、お客で依頼人である弓子が、事情をしゃべりながらやるという、妙な状態にならざるを得なかった。

「いえ、もっと話はこみ入っているんです」

みなのお茶碗に茶を注ぎ足しながら、弓子は話し続ける。

「母が亡くなって二年目に、第四回か五回目の、残留孤児のテレビ放送があったのです。そのとき祖母が突然、一人の四十二、三歳の男の人を見て『お父さんだ。お父さんがいる』と騒ぎ出したのです。祖母はもう七十を越しています。お父さんというのは、自分の夫のことです。つまり私にとっては祖父を意味するにしては若すぎます。それにシベリヤに送られて、収容所の日本人隊長に虐め殺されたことは、もう確認されています。そこで私は『お婆ちゃん違うわよ。ほら、もしかするといつもお婆ちゃんが、お兄ちゃんといっていた、満洲で置いてきた、男の子かもしれないわよ。成長して父親そっくりの顔になったのよ』といいました。『おう、そうよ。きっとそうよ』俄かに両眼からあふれ出てきた涙を、しきりに拭きながら祖母は喰い入るようにテレビを眺めていました。その人は全く日本語は話せませんでしたが、しきりに中国語でしゃべることが字幕に映り、それが母の覚えている、悲しい別れの状況とぴったり一致しました」

四十年目の再会だ。そのときの祖母の喜びは、聞いている三人にもしみじみ分かった。

「その子は勉という名の子でした。それで大きくなったときに、日本人であったことを忘れないように、祖母は自分の子の衣服の裏には、勉という字を書いた布を縫いつけておいたそうです。その四十二、三歳の男の人は陳勉学さんといいます。そして自分の名は、子供のときに、服の裏に勉という名が書い

てあったからだといいました。祖母は、いきなりテレビの前でわーっと泣き伏し、両手を合わせて、『許しておくれ、許しておくれ』と謝ります。私もどうにもできませんでした。今、私たちは、母が死んでしまったため、この等々力家では、厄介者扱いになっています。大っぴらにはこんなテレビも見れません。ただ幸いに、その日は私の父は新しく貰った後妻と、その間に生まれたばかりの赤ん坊が可愛くて、居間で楽しそうにふざけていて、私たちのいる部屋まで覗きにこなかったのです。『どうしようか』と祖母はしばらく考えていましたが、突然、いいました。『あたし明日、東京の代々木に行って勉と会ってくる。これまでずっと使わないで貯めていた遺族年金があるし、川の向こう側には、ずっとほうりっ放しになっている、私の実家がある。そこに住んでもらえば、この等々力の家には何の迷惑もかけずにすむ。無理にでも連れて帰ってきてしまえば、おまえのお父さんは、世間の評判を気にする人だから、お兄ちゃんを満洲に追い返したりはしないよ』そういうことで、翌日、私とお婆ちゃんは、町へ洋服を買いに行くからといって、朝早くに出て昼には対面をすまし、夕方にはもうお兄ちゃんを故郷の村へ連れて帰ってきてしまいました。初めはびっくりして怒っていた父や後妻も、村の人は昼のニュースを見て続々とやって来るし、県知事からお祝いの電報まで来る状態で、仕方なく、お兄ちゃん、つまり亡妻の兄の帰還をお祝いする宴席の用意までしてくれました」

堂がいった。

「そこで帰国したあなたの伯父さんの、村での生活が始まったのですね」

「ええ、初めはうまく行きました。陳勉学さん、つまり勉（つとむ）さんは、祖母の夫を覚えている老人たちにとっては、本当にシベリヤへ連れて行かれて亡くなったお婆ちゃんの旦那さまとそっくりで、村の道を歩いているときには思わず声をかけたくなるそう

です。とても働き者で、まる五十年間も住む人がいなくてぼろぼろに崩れていた祖母の実家を、自分一人の手ですっかり、きれいに作り直し、近所にほうりっ放しの荒地になっていた畑も、いつの間にか、じゃが諸や大根がちゃんとなるようになりました。村では若い人はみな都会へ出て、畑をやるなんて人はとても少ないので、村の仲間でも、自然にみなに大事にされるようになりました。日本語も初めはなかなかうまくなりませんでしたが、この半年で急に上手になり今では何でもしゃべれるようになりました。それに私が自分のたった一人の妹の子供と知ると、ユミ子さん、ユミ子さんと、まるで自分の子供のように可愛がってくれます。満洲にはお嫁さんと子供がいて、日本で生活ができるようになったら呼びよせるというので、私もお婆ちゃんも楽しみにしていました。だからこのままだったら、何も相談に来ることはなかったのですが……」

堂がいった。

「どうやらこれからが、私たちに頼みに来た事件の本題のようですな。それを伺う前に、コーヒーとケーキでも取りませんか。ついでに、ぼくはチャーシューメンを一杯喰べたいのですが、いいですか」

と勝手にいって、コーヒーとケーキを注文し、自分は別にラーメン屋にチャーシューメンを注文した。長いこと栄養失調の状態に追いこまれていた肉体が、回復に向かうときに、急に異常なほどの食欲を示すことがある。どうやら今の彼の体はそんな状態であるらしかった。

3

四日後、ベンツは充分な用意をして、ボロアパートの本社の前を出た。

運転は、特別に浮間署から休暇をもらった百目鬼刑事が、黒いモーニングを着て山高帽をかぶって、ハンドルを握っている。

自分でもおかしな気分であろう。ときどき胸の白いネクタイを、片手でいじって、

「こりゃー何だか奇妙な感じですなあー」

といっている。みな、今日これから行なう気まぐれ令嬢・移動探偵局開設の、最初の探偵業務のための扮装である。

こういう、しっかりと話の筋が通った、しかも複雑な推理のいる事件だったら、どんなふうに金を使って、経費を計上しても、地元の税務署の鬼より怖い署員を、納得させることができる。本当に仕事に必要な経費だからだ。その結果、収入のほうがうんと少なく支出が予想外に出ても、良心的に業務を推進したというので、どこからも文句が出しようがない。

後ろの堂四郎はタキシード。そして石島局長は、白いイブニング姿である。

仕事が仙台や、青森で、どこか途中で休憩、昼食とでもいうことになれば恥ずかしくて、レストランへよることもできないだろうが、その田舎の村へは、東京を朝早く出れば、三時間ぐらいでつく。せいぜいアパートを出るとき、近所のおかみさん連中が、

「おや、大家さんのお嬢さんと、いつも腹ぺこの堂さんがえらくおめかしして、どこかの結婚式にでも呼ばれたのだろうか」

と珍しそうに見送っただけですんだ。

車は、十七号線をまず大宮まで走り、途中で、宇都宮へ向かう四号線へ向かって右折して行く。百目鬼刑事にとっては、何度も通い馴れた、故郷への道であるから、運転には全然危なっけはない。

本来は単に民事の紛争かと思っていたが、弓子の話を聞いているうちに、多少刑事犯罪に該当するような匂いも出てきたので、もし犯人逮捕などという事態になったら、司法警察権のある、百目鬼刑事がいなくては事件は解決しない。それで連れて行くようになったのである。

車は関東地方の平野を走る。あちこちの畑の中に、


Remember
She's
HUMILIAT
DISCIPL
Anythin
Connoisseu
Real
CALL
(212)

もうかなりプレハブや新建材の住宅が並ぶ地区ができている。昔は故郷を出て一旗上げるため人々が出て行った土地が、今、大東京の通勤可能範囲として、宅地造成され分譲されている。逆に都会人のベッドタウンに化しているのだ。

弓子や、帰国した陳勉学さんが住んでいる山間の渓谷に面した土地までは、その宅地の地価高騰のブームはやってこなかったが、代わりに別のブームがやってきたそうだ。

四日前、出前のコーヒーとケーキがやってきて、ついでにチャーシューメンが届けられ、みながそれに手をつけだしたころ、弓子の事情説明はいよいよ事件の核心に迫った。

今、車の中から、はるかに、赤城や榛名の連山を眺めながら、三人はそのときの弓子の熱っぽく語る話を思い出していた。

「突然、山から金が取れるという噂が村に広まってきました。たしか昭和の初めごろにもそんな話があったそうですが、そのころはすぐ立ち消えになってしまったそうです。やがて大戦争が始まって、金など掘ってる余裕がないというのが、その理由だったそうで、祖母は若い十二、三歳のとき、金掘りの飯場で、二、三カ月、飯炊きの手伝いをしたが、お給金ももらわないうちに、鉱山主の会社が潰れどこかへ夜逃げしてしまったのを覚えているそうです。それと比べると今度は本当だといってました」

こう語った弓子は、その噂が起こってからの村の変わりようを細かく話しだした。

それによると、どうやら最も有望な金脈は、お婆さんが五十年もほうり出していた、川の対岸の実家の下を大きく通っているらしい。他の家は、地面の下深くに通っているので、家そのものは立ち退かず、畑もそのままにしておいてよかったのだが、お婆さんの実家は、地表の浅い所に有望鉱脈があるので、できれば、家ごと引っ越してもらいたいと、業者がいってきた。

山の斜面で、百メートルか、二百メートル横に引っ越しするのは別に何も難しいことではない。畑もまた、別な斜面に作り直せばいい。そう思って申し出を受けた弓子の父が、業者と話し合いをしようと思ったら、それが意外に難しいことが分かったのだった。

その小さな土地の名義人は、お婆さんだったが、どうせ只同然の値打ちのない土地だが、自分が死んで全くの他人に取られてしまうのもつまらないと思って、十年ほど前、まだ健康だった自分の娘の名義に書き替えておいた。ところがその娘が先に死んで今のところ、正式な名義人がない。

順ぐりからいえば、娘の弓子の名義に自然になるところだが、兄の勉が帰ってきて、今、住んでいる弓子から見れば、何もない伯父さんが永久に住めるように、伯父さんの名義にしたい。祖母としても、妹が先に死んだが、もし生きていても、本当の相続人である兄の勉がいるのだから、無一文で帰ってきたお兄ちゃんに、これまでの不幸な生活をさせてきたお詫びに、名義を書き替えてやりたい。もしそれを鉱山会社が高く買いとってくれるなら、そのお金で、ずっと満洲に置いてあるきりの、向こうの奥さんや子供を呼んで、隣りの畑を耕すなり、町か東京へ出て商売をすればいいと、そう考えた。

それに真っ向から反対したのが、弓子の父であった。

母の夫であった父は、当然、亡くなった妻の財産は、自分のものだと主張し始めたのである。

村の法律に詳しい爺さんに聞いてみると、その父の言い分が正しいらしい。しかも実子の陳勉学は、一人で黙々として畑を耕し、そこを出て行こうとしない。かげで老母が『勉さんは絶対出て行かないでね』といってるせいもあるが、妹が死んですぐに後妻を迎えた上、何かというと、自分の母や、残された妹の子をこれまで邪魔にしてきた、弓子の父なる人に、兄の勉は心の底で強い反感を持っているせい

でもあった。

ところが、十日ほど前突然、その伯父の陳勉学、日本名北原勉がいなくなってしまったのであった。

今のところ、一人でどこかへ出て行ったのか、誰かに誘拐されたのか分からない。

それだけでなく、弓子の父は、

「お前にいい縁談を見つけてきたよ。女はお嫁に行くのが一番だ。法律上は、女は十六歳になったら結婚できるんだから、来月にでも見合いして、取りあえず籍だけでも入れておきなさい」

とすすめるようになった。もう一人の相続人である弓子を早く他人にしてしまう魂胆は明らかだ。頼みの伯父は全くどこへ行ってしまったのだか分からない。

そうなれば、残されたのは、もう七十を大分すぎたお婆さん一人だ。娘も、せっかく満洲から帰ってきた男の子も、もう居なくなった後では、いつまでも頑張りきれない、老いの身のよせるところがない。せめて男の子の陳勉学さんが、満洲から妻子を呼びよせ、日本人の社会の中で一人前の生活ができるようになったら、そこへ身をよせて楽しい老後をおくろうと思っていたのに、また他人ばかりの中で肩身を狭く、暮らさなければならなくなる。とても頑張りきれるものではない。お婆ちゃんが可哀そうだ。そういって、弓子は泣き伏した。

そのとき、石島局長は最後に弓子に質問した。

「それであなたのお父さんが、あなたの結婚の相手に決めた人は……」

「それが隣り村で、一応ちゃんと土地持ちの人なのですが、もう三十五になっていて、子供一人いる人なのです」

「まあー」

「それも前の奥さんは死に別れでなくて、夫の女狂いと、変態に愛想をつかして逃げていったそうです」

「変態？」

「ええ県庁のある町の会社に電車で通っているんですが、同じ電車に乗り合わせた女子高生のお尻を撫でたりする痴漢行為や、近所の若奥さんのいる家のお風呂や便所を覗いたりするんで、もう何度も警察に捕まっていて、誰もお嫁に来てがないんです」

「まあー、何てことを、実の親がそんな、変態の助平な人に、あんたみたいに可愛い人をお嫁に行かせるなんて」

そのとき少女はうつむいて、しょんぼりして答えた。

「でも、これ民事事件なので警察で止めるわけにはいかないんですって。無理に断わればお婆ちゃんはひどい目に会うし、伯父さんは急にいなくなってしまったし、私、どうにもならないので、ふっと百目鬼さんのこと思い出して、浮間署を探してやっと刑事さんにあったらそんな返事でしょ。私どうしてもお嫁に行かされるぐらいなら、さっきいったように荒川の橋の上から……」

終わりまでいわせずに、

「分かったわ。うちの移動探偵局でこの問題を解決してあげるわ」

と祐未子は大きくうなずき受け合ったのである。

そしてその日は夕方まで、ほぼ一日中かかって、くわしく作戦を練り、少女をいったん故郷の村へ返した。

そして四日目には、一切の準備を整え、移動探偵局の大型ベンツは、タキシードにイブニングの二人をのせて百目鬼刑事の故郷の村、そして弓子が待っている、山奥の谷間の村に向かって走っているのであった。

東京を出て二時間、そろそろ平野部は終わり、赤城、榛名と続く山系の登り道へ入りかけるころ、石島局長は前の席の、モーニングに山高帽という珍妙な恰好の百目鬼刑事にきいた。

「もしこの事件に、刑事さんが活躍する余地があるとすれば、突然行方不明になった陳勉学さんの行方

ね。私は決して、お兄さんが一家の争いに巻きこまれるのがいやで、自分から身を隠したんだなどとは思わないわ。これはあの土地の権利を狙う側の人間がどこかに誘拐して隠したに違いないわ」

「もちろんそれが分かれば立派な刑事事件ですからね、私も黙っていません。関係者は全部浮間署へひっぱっていって、浮間署の収監規則の第一条まる一週間は差し入れ、面会、弁護士接見禁止を適用して、徹底的に絞り上げてやりますよ」

「でもそれには、お兄さんを隠したという証拠が必要でしょう。ただ広い山の中をあちこち探しても何もならないわ。そこは正攻法一本槍の警察の捜査とは一味違う、我が気まぐれ探偵局のやり方を黙って見ていてね」

そう百目鬼刑事に釘をさした。

道はだんだん勾配が急になり、周囲の山並みが険しく迫ってきた。谷川の音がごうごうと鳴り、刑事の苗字も、あの斉藤由貴に似た少女の苗字も、ごく自然に生まれたという感じがよく分かった。

「やあ、村が見えてきました」

そう百目鬼刑事がいった。車は曲がりくねった渓谷沿いの細道を入って行く。やがて、何軒かの家が狭い地域に固まっている村へ入った。

一軒の家の前に、弓子が白いブルゾンにジーンズの姿で立って待っていた。

「いらっしゃい」

車が止まると、下りてきた三人に挨拶した。

「昨夜おそく、母の所へ電話をいただいた、二十世紀鉱業の方ですね」

「はい、そうです。等々力さんのお家はここですか」

と、初対面のような顔をして、石島がきく。

「ええそうです」

弓子も初めて会う人に対するように答える。これから先はすべて詳細に打ち合わせができている。それに従って芝居は進行して行く。

モーニングに、山高帽をかぶった百目鬼の姿に、彼を知る村人は好奇の目を注いでいる。

家の裏に集まった村人の中から、

「あんた、東京で刑事をやってるんじゃなかったのかね」

と不思議そうにきく者も出てくる。

「いや、今は二十世紀鉱業という大会社に引き抜かれてな、社長のボディガードと、運転手をやっとります。何しろ景気のいい会社でしてな。ここんところずっと金鉱をあてっ放しで、金がうなっているので、月給も警察のちょうど十倍も入りましてな、どうしてもといって引き抜かれましたのでな。あはは十倍ですよ。わっはは」

とわざと百目鬼は豪快に笑ってみせた。

中から主人夫婦が出てきた。欲の深そうな男と、夫とは明らかに二十歳近くは年が違っている、弓子のすぐ上の姉といっても通じそうな若い妻とであった。

その妻は、まだ生後、やっと一年たったばかりのような赤ん坊を抱いていた。

「昨夜弓子さんからお話を聞きました。どうぞお上がりください」

そこで、タキシードにイブニングの二人は奥の座敷に通された。

一応応接間になっている。三人は椅子に腰かけると、百目鬼がまずいった。

「私が今度、警察をやめて、二十世紀鉱業に勤めるようになって、この社長のもとで働いているうちに、ここの有望鉱区のことを聞きました。幸い私はこの村の出身であり、弓子さんを小さいときから知っておりました。で、すぐに連絡の役を務めさしていただきましたのです。紹介が遅れましたが、この女の方が、二十世紀鉱業の社長の石島祐未子さんで、石島財閥の唯一の継承者です」

祐未子はイブニングにふさわしい優雅な挨拶をした。

「そちらの方は、主に鉱山関係の業務のうち、鉱区の申請や登録など、法律関係の実務を取り扱っている、堂常務さんです」

堂もおうようにうなずいた。あれからせっせと食事をし、おしゃれにも気を使うようになったので、ようやくそれらしい貫禄もついてきた。

こういう探偵の仕事が、もともと好きだったのだろう、いかにもそれらしく応じる。

弓子が奥からコーヒーを持ってきて、

「いらっしゃいませ。昨日のお話では、私とお婆ちゃんも、同席するようにということなので、一緒にお話を聞かせてもらいます」

そういって、長椅子のはしに坐った。お婆さんもひっそりと入ってきて、その隣りに坐った。

4

お婆さんと、孫の弓子は、あらかじめ計画を聞かされているから、ごく素直に長椅子に坐っている。しかし今の等々力家の当主である弓子の父と、その新しく若い妻は、昨夜急に電話があって、そして今日、いきなり乗りこんできた、この若い実業家らしい二人連れには、最初から警戒の念を隠さない。

出された名刺をしげしげと見ながら、

「二十世紀鉱業。聞いたことがありませんなあー」

と弓子の父はいう。百目鬼が主張する。

「私が今、その会社に就職していろいろとお世話になっているのだから間違いありませんよ。警察官として健全にやってきたこの私が」

この主人も、同じ村出身の顔見知りで、東京で警察官をやっている出世頭の百目鬼がいうので、一応は納得したようだ。

「そうですか。あんたがそういうのですからまあーそうでしょうなあー。しかしあの山の斜面の土地は、もう一週間も前の時点で大体の話し合いが決まり、後はこちらで書類を作成し、その書類と引き換えに、

現金を貰えばすべてが終わりという段階まで来ているのです。たとえお宅様がいくら百目鬼さんがいわれるような超一流企業としても今さら話をひっくり返すわけにはいかないのです」

今のところこの主人には、まだその土地に関する権利は何もないくせに、まるで自分一人の物のような言い方をする。

お婆さんと、弓子はただうつむいて、黙って主人の話を聞いている。

「それでどのくらいの額でお取引なされたのですか」

祐未子は女社長らしく、悠然としてきいた。

実は一千万円で取引がすすめられていることは四日前にやってきた弓子から聞いている。だがそれが洩れていることは主人は知らない。

「いやー一週間前に来た住菱鉱業さんのお話では一千五百万円。キャッシュで一時払いでしたよ。明後日には書類と引き換えに手に入る。元はといえば、お婆ちゃんが相続して私どもに譲られた財産ですから、少しお婆ちゃんにもお戻しして、久しぶりに、親孝行……といっても前妻の母のしゅうとめですから、義理の母孝行をしたいもんですよ。わっはははっは」

とまた笑った。お婆ちゃんは下を向いて怒りを耐えている。彼女としては、まだこの婿に、名義を譲り渡したつもりもなく、こんなことならもう殺されたって、書類にハンコを押すものかと思っている。

「そうですか、それはご損な契約をしましたね。あの土地が僅か千五百万円だなんて」

とにこやかに微笑みながら、祐未子はそういった。

「えっ何ですって」

「百目鬼さん、車からトランクを持ってきてください」

「はい社長」

百目鬼も、ここが今度の捜査の最も肝腎の所だから、上手に演技に努める。

立ち上がるといったん外へ出て、ベンツの後部トランクをあけ、アルミの四角いケースを取り出した。また応接間に戻り、テーブルに置く。

石島社長はトランクを前にして、ドレスのベルトの前あたりに吊るされている、銀の刺繍のポシェットをあけて鍵を出した。

「本当は今日は鉱地買付けという大事なお仕事なので、私もサファリ・コートに、乗馬ズボンか何かの、もっとスポーティな恰好で来なくてはならないのですが、今日は午後八時から、霞が関の旧華族会館で、ある宮様主催の晩餐会がありまして、一度、田園調布の邸に戻って着替えてから会場へ向かうと、どうしても時間が間に合いません。それで、ここにちょうど三時までいて、すべての契約をすませ、その足で直接霞が関の会場に向かうということで、こんな姿でやってきたのです。着るのに手数がかかる服でございますから」

若い後妻が目をまん丸くしてきく。

「華族会館で晩餐会というと、終わった後でダンスなんてするんですか。あの西洋の映画でよく見るような」

「ええ、ダンスは上流階級に属する家庭の子女としては、誰も必ず身につけなければならない教養ですものね」

「それで、宮様などと踊るのですか」

「ええ、たくさんの宮様の他に、皇太子殿下の二人の若い王子様などもお出でになり、気軽にお相手を申しこまれますよ」

「うわーっ、若宮様も。すてき。夢のようだわ。私、一度そんな世界を、お酒を運ぶ給仕女に交じってでもいいから、覗いてみたいわー」

とうっとりと叫んだ。その間に、アルミの大きなトランクがあけられた。

そこには一万円札がびっしり入っている。

実は祐未子の父の石島祐太が保証書を入れて、いつも現金を揃えていることで有名な町の金融業者か

ら、一日三%という高利で借りてきた金だ。
「まあー」
「それいくらあるんですか」
主人と若い妻はびっくりして、中を覗きこむ。堂が立ち上がり、隙間なく詰まった札束を持ち上げて、中を見せ、中も全部本物であることを示した。
「正確に百万円が五十束で、五千万円あります。私たちはこれをここへすべて置いて行くつもりです」
「えっ、あの川向こうの斜面の土地に五千万円も出してくれるんですか」
「もちろん、家と畑も含めての値段ですが」
「そりゃーまあー当然でしょうが、五千万円もの大金を」
「どうです。これまでの住菱さんのご契約とどちらになさいます」
「もちろん、千五百万円と五千万円とでは、誰だって、五千万円を選びますよ。土地は一度売ったら、もう二度とは売ることができないものですからな。それでどんな書類が必要なのですか」
するとそこで堂が初めて、そのほうの担当重役らしく、いかにもベテランらしい口調で答えた。
「私どもは書類すべて完全な形でこしらえて来たので、そちらがご用意なさるものは何もいりません。ただその土地の正統な継承者の方の直接のサインさえいただければいいのです」
「正統な継承者はもちろん私です。もともとあの土地は私の妻のものでしたが、妻が亡くなった後、ずっと名義はそのままになっていました。だが当然、それは夫である私の物に自動的になるのでして……」
「いえ、この場合は、民法第八百八十七条の規定により、被相続人の子が相続人となるという厳粛な事実がまずあります。本来はあの土地は私どもの調査では、そこのお婆さんが相続した物で、お婆さんとしては、自分が当然、先に死ぬものとして、娘さんに生前相続をさせたのです。しかしそれが逆目に出

て、娘さんが早死にしてしまった。それで順序として、弓子さんが母から相続するはずだったのですが、その手続きをしないで放置しておいた」

「だから配偶者である私の手に自然に相続されることになっている。少なくとも弓子は他家に嫁に行って、我が家とも関係が無くなるのです」

「いえ、それがそうはいかないのです。私どもは、ここを三時に出ないと、契約を途中のまま、また札束はトランクの中にしまって、華族会館へ戻らなければなりません。宮様がお出でになる晩餐会に宮様よりおくれるような失礼なことはできませんから。それで簡単に結論を申し上げますと、相続人のお兄様が満洲から戻っていらした。そしてここにいらっしゃる、お婆様、つまり本来は一度相続をなされた元の持ち主は、本当は心の中では、このお兄様にあの土地を相続させたかった。その事実を示すものとして、お兄様が帰国以来あの土地に住み、畑を耕し自活なさっているのを、親戚一同、みな黙認しておられた。これはすでに相続が実質的に行なわれていたと見なすことができます」

「そ、そんなばかな。勉君には我々が情けをかけて置いてやっただけだ。それなのに」

そのとき初めて、お婆ちゃんがはっきりとみなに向かっていった。

「勉さんは私の子です。そして今、たった一人残った私の子です。私はあの土地を勉に相続させます。勉もそれを信じてあの土地を耕していました」

堂がまたいかにも東京大学の法科出身らしく語り出す。

「多分、家庭裁判所の相続を専門に扱う調停人の意見も、その説を一番支持するでしょう。少なくとも私どもの会社の意見もそれと同じです。それでここに用意してある書類のすべてに長男の勉氏のサインが、目の前でいただけるなら、この五千万円は、このままここに置いておけますが、どうでしょうか」

苦渋にみちた声でこの家の主人はいった。

「しかしあの勉君は十日ほど前から、突然、山へ仕事をしに行くといって姿を隠したきり行方不明なのですが」
「それでもこのあたりの山でしょう。みなで探せば三時までには見つかりませんか。今、正午少し前ですが。そうでないと、私どもはこの五千万円、残念ながら、トランクに入れて持って帰らなくてはなりません」
堂四郎にそういわれて、主人はすっかり考えこんでしまった。
五千万円は大きい。どうしてもほしい。
主人はおずおずといった。
「見つければ見つからないことはないと思うんですが、すっかり人嫌いになってしまったようで、みなさんに会いたがりません。彼からサインだけ貰ってきたのではいけませんか」
「それがニセ物でなければね」
「もちろん山の中で必ず当人を見つけて、サインを貰ってきます。ニセ物かどうかは、お婆ちゃんか、またはいつも一緒にいて日本語を教え、代わりに中国語を教えてもらった弓子が見れば分かります。なあー弓子」
とそうきいた。弓子も父がそろそろ馬脚を現わしてきたのを知ってすぐに答えた。
「ええ、私なら、一目見ただけで、伯父様のサインはよく分かるわ。だからぜひ見つけてサインを貰ってきて」
といった。
父は若い後妻と何か相談していたが、すぐにみなにいった。
「私はあまり山へ入ったことがないんで、あちこちよう分からんのですが、うちのが若いときから山遊びが好きで、今でもときどき、食用きのこや山菜を見つけてきます。それで先日も山歩きをしているとき、山の中で二、三度、勉さんらしい人を見かけたと申します。必ず見つけてきてサインを貰ってくる

といっとりますので、その書類、うちの若いかみさんに預けてくれませんか」

何だかよく聞くとむじゅんだらけの話だが、目の前の五千万円ほしさに吊られて、そんなことを彼はしゃべった。祐未子は承知の上で、

「ええいいですよ。ちゃんとサインさえ貰ってくれば、それで契約は終わりですから。私どもとしては、できるだけ早く権利を確保し、お金をお引き渡しして晩餐会に行き、今夜の宮様や旧華族様方の話題を、華やかな黄金の話で賑わせたいのです」

と欺されたふりをした。

若い夫人は別室でスカートをズボンにはきかえ、書類を入れた封筒を受けとると、

「じゃー、私は山の中を探してくるわ。多分、一時間もしないで戻ってくるわ。待っていてね」

といって、山歩き用のゴム長をはくと、元気にとび出していった。ごく何気なく百目鬼刑事は、

「ちょっと自動車のエンジンや、ガソリンの具合を調べてきます」

といって外に出ていった。車へ戻ると中でモーニングをほうり投げ、ズボンも脱いだ。下にはちゃんとジャンパーにジーンズをはいている。さっと崖下を川っぷちに下り、先に細い川の流れを、飛び石伝いに対岸へ渡っていた。少しおくれて、吊り橋を通るため道を大回りした若いおかみさんが、山の細い道へ入って行く。草藪にかくれて、それをやりすごした百目鬼が得意の尾行術で後をつけて行く。

若いときからさんざん遊んだ山道だ。その後妻の後をつけて行くことなど何でもないことだった。

そして十分ぐらいして、山あいの谷間の切りたった崖の所にある洞穴に夫人が近づいて行くのを知った。洞穴には、鉄の格子がはめてある。きっと何人かの男が、勉を連れ出し、力ずくで、洞穴にとじこめてしまったのであろう。殺してしまうと問題になる。少なくとも弓子を嫁にやり、お婆ちゃんを無理やり納得させ、住菱鉱業との契約が終わるまでは閉

じこめておくつもりだったのだろう。
それを一目見ると、百目鬼は、すぐに自動車の所へ帰り、またモーニングを身につけ知らん顔して、主人と石島局長や堂局員が話している、応接室に戻った。
石島局長はすっかり二十世紀鉱業の社長になりきっていて、これまで二十世紀鉱業がどれほどの有望な鉱山を開発し、急成長してきた会社かを得々として話していた。
十分ぐらいして、若い後妻が、額に汗を浮かべて戻ってきた。
「お父さん、見つかったわよ。あの勉さんが山の中を何か考えながら歩いていたので、『この書類にサインしなさいよ。そしたらお婆ちゃんも、弓子さんもみんなお金持ちになって幸せになるのよ』といったら、すぐにサインしてくれたわ」
そういって、封筒の中から書類を出した。
石島社長はそれを受け取ってゆっくり見た。あらかじめ鉛筆で丸印が囲ってある所には全部、ボールペンで陳勉学というサインが入っていた。
それを女社長は点検し終わると、
「堂常務見て」
といった。堂四郎もゆっくり点検してからまるで本物の重役のように重々しい口調でいった。
「このサインはどこにも異常がありません」
「それではご主人……」
と女社長はいった。
「このトランクを引き渡ししますから、こちらへ来て、もう一度中をお改めください」
「すみませんねー。では山にいる勉さんに代わって、一時預からせていただきますよ」
と主人である弓子の父が嬉しそうにトランクの傍に近づいた。弓子とお婆さんが、その主人の嬉しそうな顔をきっと、睨みつけている。家においたままにしていた赤ん坊をまた膝に抱き上げた若い後妻も後ろからトランクを覗いて嬉しそうだった。これで

五千万円という思いもかけない大金が入る。坊やの将来も今や洋々たるものだ。

主人の手がトランクに近より、中の札束を一束摑み上げて、その感触をたしかめようとしたとき、すーっと近よってきた百目鬼の手から出された、銀色の手錠が、目にも止まらぬ早さで鮮やかにはめられた。

「ああ何をするんです」

「営利を目的にした誘拐罪の現行犯だよ。刑法二百二十五条だ。今では改正されて無期まである重罪だよ」

「私がなぜ。勉さんは勝手に山へ入って一人でうろつき回ってるだけですよ」

「勝手に山に入った者がなぜ崖っぷちの鉄格子の入った洞穴の中に閉じこめられているのかね」

「あっ」

と青ざめて口もきけないでいるのに、

「ほらパトカーの音が聞こえないかね。ベンツの中の電話で町の警察に連絡をとって来てもらったんだ。あの連中が山の道を少し探せば洞穴はすぐ見つかってしまうよ」

主人はぐったりしてうなだれた。その後ろにいる後妻に向かって、

「あんたも同罪さ。赤ん坊がいるから手錠はかけないがね」

と百目鬼はいう。すると後妻は赤ん坊を抱いたまま、わーっと泣き出した。パトカーのサイレンが、こんなことの絶えてなかった村の人々をびっくりさせながら近づいてきた。

「何しろ我が社の車は電話も無線もついているんだからな。あんたらも逃れられないよ」

そう堂重役が二人の容疑者に諭すようにいった。

5

堂四郎はテーブルの上に帳簿を拡げてつけている。

第一回・山村誘拐事件決算書。

一、収入の部

成功報酬　十万円。

二、支出の部

①　車のガソリン代、二万円。

②　タキシード、イブニングドレス、モーニング借用料計十万円。

③　見せ金五千万円、丸一日、金融業者からの借用料、三%、百五十万円。

④　他雑費、途中食事代他経費四万円。

合計百六十六万円。

差引き赤字　百五十六万円。

そう書き終わって堂四郎は、

「石島局長、どうにか百五十六万円の赤字になりましたが」

と、その帳簿を見せた。

しばらく、渋い顔をして見ていた若い探偵局長は堂常務をとがめるように見ていった。

「駄目ねー。あれだけ働いて、たった百五十六万円ばっかりの赤字じゃ。一年間いくら、私たちしゃかりきに働いても、とても一億円の合法的赤字は作り出せないわよ。今後はもっと、お金の使い方をよく研究しなくちゃ」

「すみません。せめて今夜は特上ヒレステーキでも喰べて経費落としをしましょうか」

「だめ！　そんなことじゃ千円と違わないじゃない。もっと大きく赤字を出す方法を考えてくれなくちゃ、ステーキどころか、メンチカツ定食だって取ってやらないから……というのは嘘よ」

いきなり堂にとびついて、その頬にキスをすると、彼の体を押し倒すようにして、ベッドへ倒れこんだ。

何しろ椅子を後ろへひっくり返せばそのまま、そこはベッドなのだから、愛し合うのには、はなはだ便利な探偵局であった。

「第一回の仕事の成功のお祝いに、後でレストラン

にヒレステーキを喰べに行きましょう。でも先にお祝いのラブをメイクしてからよ」

そういって、局長は激しく抱きしめる。二人はベッドの上でお互いの衣服をもどかしく、脱がし合うのだった。

〈第三話〉　三十二年目の和解

1

震度三の弱震程度の揺れがあったらもう、ひとたまりもなく倒れてしまいそうに見える、今どき珍しいボロアパートが、周囲のモルタル張りのちょっとしゃれた感じのアパートの間に一軒だけ立っている。戦後の一時期、建築に対する法の規制が最もやかましかったとき、やっと建てた木造アパートだ。

材料は進駐軍のお情けで焼け野原の日本の復興のためのバラック用に緊急輸入した、米松（べいまつ）という最低の木材で、二年もたつと外が真っ黒に変色してしまう。

築後、四十年、戦前にしっかり建てた家屋よりもかえって古色蒼然として、いたんでいる。

その今にも崩れそうな危なっかしい建物の前に、でーんとクリーム色のベンツが停まっている。ほんの数年前、二千万円も出して作った特別仕様の車で、注文を受けたドイツの、ダイムラー・ベンツ本社は、日本のマフィアの首領（ドン）からの特注かと考え違いをして、ピストルの弾丸の通らない外板に防弾ガラスで装備し、そのころはまだ珍しかった、車内の電話まで揃えた。

今年のつい二カ月前、税法上の耐用期限が来て、資産価値をゼロにしなければならなくなったので、プレス工場で、金属の塊りにして廃車にすることにした。それが妙なことで、生き残って、今、ボロアパートの入口をでーんとふさいでいる。かなり通行の邪魔になるが、長屋の住民は誰一人文句をいわない。

何しろこのアパートの持ち主の令嬢の車だ。うっかり文句をいったら、これ幸いとこのボロアパート全体が潰（つぶ）されてしまう恐れがある。今どき、月一万円以下で、この都内で屋根があって住める場所なんて他には見つからない。持ち主としては、潰して駐車場にしてしまったほうが儲かるから本当は潰した

い。住民はよほど注意して応対しなければならない。

ベンツがたくましく生き残ったおかげで、もう一人、人間が生き残った。東大に行って法律を学んだ秀才だ。だから本来はかなり優秀な人間のはずだが、自分からすすんで何か仕事をするのが大嫌いで、いつも家の中にごろごろしている。金がある限りは、寝転がって推理小説を読んで動こうとしないという、世間の目から見れば全くの駄目人間。

ついに一銭も無くなり、食料調達の目安もつかないので仕方なく死のうと覚悟した日に、ベンツの持ち主の娘、学習院大学通学中の、石島祐未子に生命を救われた。

今、二人は、この残暑きびしい季節にかかわらず、一階の右側の三番目の部屋のベッドの中でぴったりと、お互いにパンツ一枚つけていない、裸の体を寄せ合っている。もうとっくに朝が明けて、カーテンの隙間から、明るい日がこぼれかけているのに二人とも、相手の肩に手を回して熟睡している。

昨夜よっぽど、お互いに激しく求め合ったらしいが、それも無理はない。この男、堂四郎はもう三十六歳になるが、十年前、大学卒業時にもらった女房に、二週間で逃げられて以来ずっとセックスというものをしていない。

そして今はこの男の主人でもある、『気まぐれ令嬢・移動探偵局』の局長、石島祐未子十九歳も同じだ。これまでかなりハードなペッティング程度の経験はあっても、本式のセックスを、味わったことはなかったのだ。だから覚えたばかりの楽しさというか、昨夜も自然に抱き合って、延々と夜おそくまで若さに任せて励んでしまった。

朝になって気温がみるみる上がり抱き合った裸身がお互いの汗でびっしょりになっても、まだ二人は軽い寝息をたてて寝ている。

しかしいつまでも、二人を甘い快い眠りの中にほうっておくほど、世間は甘くない。十時を少しすぎたころ、突然、ベッドのすぐ横の机の電話がベルの

音をたてた。
何しろもとは六畳一間の狭い部屋を事務所に改造して机を二つおき、その横にベッドをおいた職住同一の場所だからひどく狭い。ベッドから裸の手をのばすと、鳴ってる電話が手にとれる。祐未子が寝たまま取って答えた。
「はい。こちら、気まぐれ探偵局です」
「あのう、私、肥後エリカですが」
向こうは当然、自分のことを知ってるだろうという言い方をした。
何だか聞いたことがあるような気がするが、石島探偵局長は、あまり芸能界や、タレントたちのことには詳しくはない。
「はあー、それで何かご用件が」
とただ答えたきりだ。
「私、歌手をしているんです」
そういえば、そんな名の歌手がテレビに出ていたような気もする。肥後といえば熊本県だ。市内の名所水前寺公園に名を借りた水前寺清子、西南の役の激戦地八代市出身の八代亜紀と、二人の大歌手がいる。そこまで考えて、演歌と民謡を合わせたような特徴のある節回しで、この五、六年俄かにのし上がってきた歌手がいたことを思い出した。
いつも相当な厚化粧なのは、三十すぎてやっとデビューできただけに、素顔はとっても見せられないからだという噂を聞いたことがある。長い雌伏時代をともかくはねのけるようにしてデビューを果たしただけに、その歌には、人生の哀歓がこもっていて、一度聞いたとき、妙に感心したことも思い出した。
「分かりましたわ。あの演歌の肥後エリカさんですね。いつもテレビで見させていただきます」
いつもではないが、それでもそうお世辞をいっておいた。このときもし電話でお互いの姿が見える時代だったら、相手はびっくりしてしまっただろう。祐未子は何一つ身につけていない真っ裸でベッドから床に下りたのだ。

同時に局員の堂四郎も真っ裸のまま立ち上がると、洗面所兼台所の小さな流し台まで行ってタオルを濡らして絞った。電話を持って立っている、祐未子の所へ戻ってきて背中から腰にかけて、びっしりと玉のように浮かんでいる汗を拭いた。思わず『ヒエーッ』と声が出そうなほど冷たかったのを送話器を掌で蓋をして押えてから、ついでに小声で、

「ベッドの下のトランクから、ショーツとブラジャーだけ出して」

といった。

そしてまた電話を続ける。その間に向こうはしきりに用件をのべていた。

「私、これまでのオペールレコード社をやめて、別なピネオラレコード社に移ったのです。そしたら、まだ各地で残っていた興行上の問題が、突然いろいろと起こってきたのです」

「たとえばどんな問題ですか」

「前のオペールレコード社が、半年先まで私の興行を約束して、日本中であちこち前金を取っていたのです」

「ちょっと待ってください」

すぐそばで、やっとパンツと、Tシャツをつけただけの堂四郎に小声できいてから、すぐ答えた。

「……ああお待たせしました。そんな金は気にすることはないそうです。あくまでそれはオペールレコード側が払うべき問題だそうです」

「そのオペールレコード社は私がやめたとたんに、倒産してしまったのです」

そこでまたちょっと堂にきいてから祐未子は、

「そしたら、それは新しいピネオラレコード社が肩替わりして払って、後でオペールレコード側の人を見つけ出して請求するようにすればいいそうです」

そう電話口で指示しながら、首を大きく曲げて、頬と肩の間に電話機を挟み、両手をあけると、堂局員が探し出してくれた、掌の中に入りそうな薄い小さなショーツをす早く身につけた。ブラジャーを胸

にあて、両手を後ろに回してホックをかける。
そしてまた電話機をしっかり持つ。
向こうはやや涙声で訴えてくる。
「ところが、故郷の熊本の小さな町で興行を請け負ったある人が、このことですっかり怒ってしまったのです。これは金の問題ではない。肥後人には、肥後モッコスという、絶対後へはひかないという頑固な魂がある。当人、つまり私ですが、私が歌を唄いにやって来ないのだったら、『身柄を誘拐してきて唄わせるか、それがいやなら、自分も死ぬ覚悟で、あんたの歌手生命を目茶苦茶にこわしてやる』というのです」
最後の言葉は半分泣きそうな声であった。聞いていて気の毒になったが、途中ではっと気がついた。
「それでなぜ、私のところへ電話をかけてきたのですか」
この歌手とはこれまで何のつながりもないのだ。突然、電話をかけてきた理由が分からない。人生相談係や法律相談所ではないのだ。
すると彼女もやっと少し気分が落ち着いて自分の行動がかなり一方的であったことにも気がついたらしい。
「すみません。いきなり、何も説明しないで相談をもちこんだりして」
と改めて事情を話しだした。Tシャツの下にズボンだけはいた堂が、クーラーのスイッチを入れ、狭い部屋だから、すぐ効いてきて、室内がみる間に涼しくなってきた。電話の向こうの肥後エリカは涙を拭って、昂奮が治まったらしく、泣き声を押えて話しだした。
「私、埼京線が通じたのを機会に、板橋駅のそばに、マンションを買って引っ越したのです。これだと新宿へ出るにも、都心へ出るにも大変に便利だからです。それでこの事件が起こったとき、どうにも困って近くの警察へ相談に行ったのです。そしたらそこに、百目鬼さんという鬼のような顔をした刑事さん

がいまして、『それは、現実に誘拐か殺人が行なわれるまでは、単にお互いどうしの争いの民事事件だし、警察には民事不介入の大原則があって、口を挟むわけにはいかない』と、あっさり断わられてしまったのです」

「そうですか」

気の毒だが、今はそう答えないわけにはいかない。警察も役所だから、原則を変えるわけにはいかないのだ。

「それであんまりひどいので、文句をいってやったんです。『あなた方は、東京都民の身体の安全が危険に瀕しているのをそのまま見逃すつもりですか』って。そしたら『そういうことは、きっと民間の私立探偵局がうまく解決してくれるよ。一人、いい探偵を紹介してあげましょう』ということで、そちらのお名前を教えてくださったのです」

「まあー、そうですか」

これで突然かけてきた理由が分かった。

「これからすぐ、そちらへ伺います。どうかそこで待っていてください。十五分もあれば着くと思います」

2

電話が切れるとすぐに、祐未子は、

「堂局員、とりあえず朝飯は延期よ。お客さんが来るからすぐ、部屋を片付けなくては」

とまだ何かというと、すぐ、飯を喰べたがる欠食児童のような、やせた東大出のソクラテスの機先を制するようにいった。

「まずベッドの上よ」

ベッド自体は片付けてしまうわけにはいかない。部屋の左半分をでーんと占領している。ただその上のシーツや、薄い夏掛け布団が、どんなに昨夜からの乱戦が、凄まじかったかを物語っている。

やってくる客が先日の等々力弓子のようなまだ十

六歳の純情な少女なら、ただ寝相の悪い人だなあーという程度ですむが、相手はもう三十歳を半ば越えた女で、歌手になる前の経歴は、頑として口を閉じて言わないが、どうもホステスか、もっと質の悪い水商売の経験もあるようだと秘かに噂されている。ベッドを見て部屋の中にかすかに残っている匂いをかげば昨夜ここで何が行なわれたかは、いっぺんに嗅ぎつけてしまうだろう。

二人はすぐ、ベッドの皺をのばし、祐未子は、ホットパンツにTシャツだったが、その上に薄い夏用ジャンパーを着けてから、いったん窓をあけ、空気を入れ替え、部屋の掃除を始めた。

狭い部屋だから、あまり時間がなくても、何とか片付いた。外に車が止まる音がして、子供の声がした。

「また外車が来たぞ」「ベンツかな」「いや今度のは、BMWだよ。新しくできた三二〇という型の車だ」

子供たちの中に、結構詳しいのがいて、みなに説明している。おかみさん連中も亭主を職場に追い出してしまって、暇な時間になったころだ。そう珍しいことなんか、これまでなかったボロアパートに、突然、探偵局ができ上がったことだけでも、かなり日常の話題が豊富になったところへ、またまた外車がやってきたというのでカーッと昂奮していた。

もちろん、『気まぐれ探偵局』へのお客さんに決まっている。別に誰が号令をかけたわけではないのに、みなぞろぞろと首を出してスリッパで玄関へ出て行く。

車の中からは、薄いノースリーブのブラウスに、太腿のパンツの下のふちが覗くほど短いスカートをつけた、大胆なドレスの女が出てきた。髪はアップでまとめ上げているが、その下は芸能人特有の濃い化粧で、目ばりをばっちり入れて、悩ましく瞳がまばたいている。もう少しで、びっくりパンダになるところを、高い鼻が辛うじて救っている。

玄関の敷台に立っていた、おかみさんたちの一人

があっと声を上げ、
「肥後エリカだわ」
と叫んだとたん、みながスリッパや、はだしのまま外の道へ飛び出しかけた。だがすぐ中から屈強そうな男の付人が二人出てきた。ぴたりと両脇を固めると、
「申し訳ありません。先生は今日は、こちらの探偵局に伺う用があってきたので、芸能活動ではありません。だから、サインや、握手はご遠慮ください」
と、おかみさんや子供たちを近づけないようにした。
探偵局の客とみなも、一瞬足をすくめた。ここの大家さんのご令嬢の客だ。もしご機嫌を損じては後が怖い。あわてて両側に分けて道をあける。中でおせっかいのは廊下を駆け出していって、三番目のそこだけ白く塗ってある扉をノックし、すっかり昂奮して叫ぶ。
「お客さんです。探偵局長さん。歌手の肥後エリカさんですよ」
中から扉があいて、堂が顔を出した。狭い廊下に、おかみさん連中が全員どころか、近所のアパートのおかみさんまで、いつのまにか飛び入りで仲間に加わって、びっしり張りつくようにして立っているのには、びっくりしていた。
「まあー、きれい」「すてき」「こっち向いて」「にこっと笑って」
そんな声が両側からかかる。まともに見たら本当にきれいかどうかは分からないが、スターはいつでも人に褒められるためにある。常にそういうことを期待して、ポーズを作っているような人間でなくては、まあースターになれないともいえる。
にこやかに手を振り、左右に満遍なく微笑みを返しながら、無事玄関から三番目の扉まで来た。
ひょろ長い、堂四郎が、
「いらっしゃい、どうぞ」
と迎える。彼女一人が中へ入り、屈強な付人二人

は、しめられた扉の前で、あたりを見回すように、警備に立った。

多分、楽屋でも、劇場のトイレに行くときも、こうしてスターの張り番をすることが、彼らの第二の天性になっているのだろう。

しかしそれでよかった。二つの机とベッドだけで、もう全く余裕のない、狭い探偵局に、三人も一緒にお客さんが入ったら、彼らのいる所はなくなってしまう。机の下かベッドの下へもぐりこんで、膝をかかえ、身をこごめて、話を聞いていなければならないところだった。

入ってすぐ肥後エリカはいった。

「先ほど、この道を曲がるところにお寿司屋がありましたので、上寿司を五人前ほど頼んでおきました。いつもお腹をすかしている局員さんがいるので、手土産のお菓子や果物よりは、食事の差し入れが、一番だと、その百目鬼さんという刑事さんに教えられましたので。失礼ではございませんでしたでしょうか」

「失礼どころか、大歓迎ですよ」

堂四郎は、感情を押えたり、飾ったりはできない男だ。満面に今にもこぼれそうな笑いをたたえていった。そして急にこのスターの依頼に乗り気な様子を見せた。

3

机に向かい合って、石島局長と、堂局員がそれぞれの椅子に坐ると、この厚化粧の、強い香水の匂いのする女は、シーツがぴーんとのべられているベッドに腰を下ろすしかない。

彼女はそこへ大きいお尻を下ろすと、一気に語りだした。

それは、彼女のぐち話といってよかった。

これまで、どれほどオペールレコードに尽くして、その売り上げに協力してきたか。社の利益のほとん

どは、彼女のヒット曲によっている。
それなのに、最初決めた契約金に、年々少し色をつけただけの金しか支払わない。
その儲けは何に使うのかときくと、『次の新人を育てるため使っている』という。だが彼女としては、いずれ自分の存在を脅かすような新人を養成するため、自分の働いた金を使われるのは面白くない。
それに本当の所は、その金は社の幹部たちが銀座の高級クラブで遊ぶ、莫大な支払いに浪費されている。それで思いきって、二カ月前、退社を申し出た。そして新しく、ピネオラレコードに入ったことが業界に洩れると、これまで社長以下幹部の浪費がひどく負債が多くても、いっぺんも請求しなかった店や企業からどっとまとめて請求がきた。
肥後エリカがいなくては、もうこれ以上金を貸しても取れないと判断したからだ。そして忽ちに倒産した。
「それで今度の問題が起きたのです」
そう言ってから、今度の問題についての詳細を語りだした。
来月三日。熊本市の中央公民館で、地元の商店会主催で『初秋、爽やか歌謡祭』というショウが開かれる。
これは入場券はそのままでは売らない。熊本中央通り商店連合会の加盟店で、一万円以上の買い物をしたお客さんに限って、一枚、入場券がもらえることになっている。
二千円の買い物から補助券が出るので、まあーどんな家庭でも、加盟店で買い物さえすれば一、二枚の券は入る。今や、熊本の市内では、この地元出身の三番目の大歌手の舞台を見ようということで、ふだんは夏枯れの商店の売り上げがかつてないほど活気づいている。
そこまではやや得意そうに語ってきたエリカが突然顔をおおうようにしてわーっと泣き出した。
しばらくは激情にかられるままに泣いているのを、

じっと見守っている。やっと納まった後は、マスカラやアイシャドウが流れてほんとにびっくりパンダみたいな顔になった。もとの目玉は、本来、人々が見ている目の半分もないのがよく分かって、石島局長も、堂局員も驚いている。

当人もさすがに気がついて、

「いやーだ。ごめんなさい」

とすぐ後ろを向いて、コンパクトで、あわてて化粧を直しだした。

そこは専門家だ。作業は早い。その作業はあっという間に終わり、振り向いたときは、もう、元の美しいお目々ぱっちりの悩ましい、肥後エリカに戻っていた。

こんなに美しく、そして前売り切符もたくさん売れて、一体、当人に何の不満があって、こんな小さい、何の役にたつか分からないような探偵局に訪ねてきたのだろう。……一瞬、そう思うほどだ。

彼女はいよいよ用件に入ったらしく、真剣な表情になってきた。

「熊本市から自動車でほんの三十分ばかり行った所に、南白川町という、地図に名ものってないような小さな町があります。市内を流れる白川という川が海に向かって注ぐ途中にある、何の特徴もない平凡な町であります。同じ熊本の生まれである私も、ただの一回も行ったことのない町で、今度のことがあって初めて知った町なのです」

話に夢中になると体温が高くなり、体臭も強く発散されるのか。一度窓をあけて、大きく空気を入れ替えなくては、化粧品や香水の匂いでむせそうになった。

だが夏で冷房をきかせてあるために、わざわざ窓をあけにくい。堂はやせていて、慢性の栄養失調状態で、長い人生を、生きてきたので、こういう濃厚な空気の中での、抵抗力が弱くかなり精神にこたえてきた。

本当は窓を思いきってあけたいのだが、外に面し

た、くもりガラスの窓は大スターの素顔を一目見たいという人々でいっぱいであけられなかった。多分、扉の所も、中の話を少しでも聞きたいと寄ってくる人で一杯なのだろう、押し返している付き添いの男の声がする。その人の気配が動いて、扉があけられた。

「こんにちは寿司屋です」

上寿司を五人前持ってきたので、そのうちの二人前を外の見張りに分けて、三人前を中に入れた。

そのひとときを利用して、冷房をフル回転にしながら、窓をいっぱいにあけた。ついでに窓辺にしがみついて中を覗きこもうとしている男の子を、堂は、

「こら、覗いちゃいかん」

と拳固で軽くごつんとやって離れさせ、扉を、何度かバタバタとさせ、中の甘ったるい匂いを外に押し出した。

空気が入れ替わり頭を痛くするような濃密な匂いもかなり薄くなった。上寿司が配られた。

これまでずっと食事に不自由のない生活をしてきた人は、体に肉や脂がついているから食事が一回や二回抜けても別に体にこたえないが、大学卒業以来十年、まともな職につかず、ろくな物を喰べてこなかった彼は、ガリガリにやせていて、体力に余裕がない。一回でも抜けたりしたらもちろん、少し時間がおくれても、がくんとこたえて、頭のほうがもうろうとして、ついでに人生、もうどうでもいいから死んじまいたくなる危険な徴候が出るのだ。

上寿司一人前、ようやくこれで一人前の落ち着いた思考力が戻ってくる。

実は大スターのエリカのほうも空腹だったらしい。

「一緒にいただきましょう」

とすすめながら、自分も早速、口紅が真っ赤に塗られた、舞台用の顔の口を大きくあけて喰べた。そうしてまた全員の気持ちが、清新活発に蘇ったとき、エリカは話を続けた。

「実はもう半月ほど前に、この南白川町の、南白川

演芸館という所から、内容証明便が届いているのです。私はそのとき知りませんでしたが、マネージャーが受けとって、今の会社の、ピネオラレコードの、営業部へ持って行ったり、倒産したオペールレコードの昔の幹部の間を駆けずり回ったりしていたらしいのですが、どうにも解決がつかなくて、私の所へ結局その内容証明が届けられたのが、五日前のことです」

「どんな内容だったのです」

「すでにオペールレコードと、興行の契約がすみ、料金も支払いずみなので、当日の興行はレコード会社移籍の事実の有無にかかわらず実行してもらいたい……という内容でした」

「しかし……」

と、石島祐未子はちょっと困ったようにいった。

「そういうことなら、弁護士さんの仕事でして、私たち民間の私立探偵局の仕事ではないような気がするのです」

「いえ、まあー、聞いてください。私たちも最初は弁護士を通じて金で解決できることなら、金で解決したいと、盛んに接触したのです。ところが、南白川町の人々は、郷土が生んだ大歌手肥後エリカの実物をぜひ、見たいといって、もう後へはひかないのです。正面きっての交渉は、そこで物別れで終わったのです。せめて熊本市の公演と一日でも違っているとか、午前と午後にでも分かれていたら、何とかなるのですが、同じ日の夕方で重なっていてはどうにもならないのです」

「南白川町のほうは、すっぽかせないのですか。急病のためとかいって」

「向こうも、それを知っていて、恐ろしいことをしかけてきたのです」

それから艶然と微笑むようにしていった。

「私、幾つに見えます」

二人とも考えてしまった。ようやく堂が、

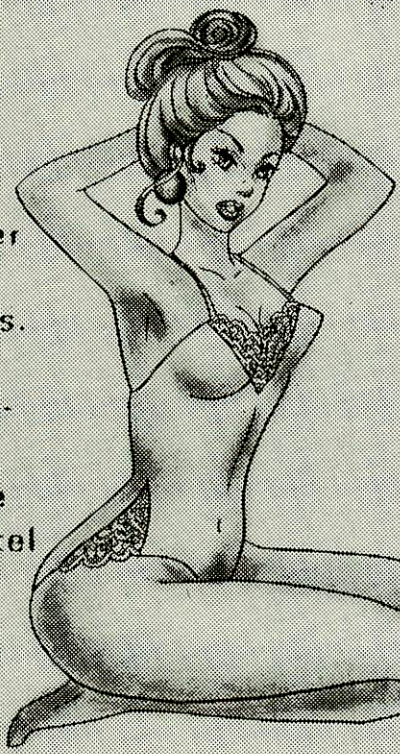
「三十五か六じゃないですか」

way of life.
Manhattan Only
(212) KU 0-8642
Gina

YOUR
RE
ty

Laurie.
together
ill your
fantasies.
g,
ce, Sub-
& TV's.
ast Side
reet hotel

77



「世間に発表している年齢は、三十二歳です。決して誰にもいわないと約束してくれますね。実は……」

と他に誰もいないのに、何度も回りを見回してから小声で、

「五十歳なのです。そしてこれが私の最も弱点になっているのです」

といった。四十歳ぐらいのことをいうと思っていた二人は、

「えっ！」

とのけぞりそうになるほどびっくりした。

しかしその二人がもっとびっくりするようなことを、彼女は続けていった。

「実は三十二歳の子供がいるのです」

「えっ！」

もう一度、声もなく見つめている。あまりのことにしばらくはお互いに黙って見つめ合っている。

やっとまた激情を押えるようにしていった。

「十七歳の年に家出して東京に出て、そこでホステス勤めをしていたときに強姦同様にして女にされ生まされたのです。戦後の何もないときでしたのでそうするよりほか仕方がなかったのです。その男とは別れましたが、男が一人で子供を育てていて、今度の南白川町の興行に出ないならF、Fの両誌に、そのもう三十二歳になる子を肥後エリカの隠し子であるといって連れて行って写真を撮らせるというのです。それで私の芸能人としての生命は終わります」

4

クリーム色のベンツは、板橋に置いておいては、やや場違いな感じもするが、ビルの間を走って行くと水を得た魚のように形が決まってくる。オートクチュールのドレスの女性に一流ホテルのロビーがよく似合うようなものだ。板橋から出て、水道橋駅の所まで来るとぴったり風景に溶けこんだ。左折して四谷へ向かう。運転の祐未子は、白いTシャツにブ

ルゾン、腰の形から、薄いたった一枚のショーツの線まではっきり見えるぴっちりしたジーンズをはいた、スポーティな服装できめている。

隣りには相変わらずやせてひょろりとした、堂四郎が、一体、このおれに局長はどうしろというのだというような全く無関心な顔で坐っている。これは大学を卒業して親もとを離れて以来十年間、常に慢性空腹の中にいて、表情や感情を動かすこと自体、エネルギーの消耗と気づいてから、自然に身についた彼の生活の智恵だ。

運転している石島局長のほうがだんだん心配になってきく。

「本当に、テレビ旭日(きょくじつ)に同級生がいるのね。いなかったら、今度引き受けた仕事は失敗に終わるかもしれないわよ」

「ああ、五年前に銀座をぼんやり歩いていたら、ぽんと肩を叩いてから、夕食をご馳走してくれ、ついでに、きれいな女の子がいるバーにつれていってくれた。本当にまるで、天使のようなきれいな女の子ばかりで、女ってこんなきれいなものだとは……」

車がちょうど交叉点の赤信号で止まり、ハンドルから離れた祐未子の右手が思いきり顔の前にのびて頬をひっぱたいた。

「言葉を慎みなさい。誰のおかげで毎日、三食たっぷり喰べているのよ。そして毎晩楽しいセックスもできるのよ」

まだ何で怒られたのか分からないでびっくりしている彼に、青信号で車を急発進させながら、

「あんたは、私以外の女の人のことを考えたり、きれいだといったりしちゃいけないの。少なくとも今後もちゃんと三食ご飯をたくさん喰べて、楽しく生きていきたいと思うならね。あんたは生活無能力者なんですからね。いくら東大を出ていたって、それが何よ」

ブレーキを踏むための左足をついでに左へのばして、どーんと足を踏みつけた。

「ごもっともです。ぼくはあなたがいなくては生きていけません」

事実がそのとおりなのだから仕方がない。堂はあっさり謝った。本当はそれでもなぜ怒られたのかはさっぱり分からなかったのだが……。

ようやく局長の機嫌は少し直った。

「それならいいの。二度と同じ間違いは許しませんよ」

そういってから改めて、

「でもさっきはびっくりしたわねー」

といった。

「ええ、そして子供のことと二段ショックでしたねー」

市谷見附のお堀端の道を走って行く。

「そうね。まず、本当は五十歳といわれて、腰が抜けそうになったわ。芸能人がいくら化けるといっても、化けすぎよねー。それに比べて、私は正真正銘の十九よ。有難さ分かった」

「よく分かりました」

「分かっているのならいいの。じゃー、しっかり働いてねー」

四谷駅を通り越すとすぐ赤坂だ。いよいよ都心が近づくと、車はますますあたりの風光にぴったりしてきて、エンジン自体も快調になってきたようだった。

溜池で右折して上がって行くと、左側に大きなホテルが見えてきた。できたばかりらしく、どこもかしこもぴかぴかで真新しい感じがする。そこの航空会社系のホテルの地下に大きな駐車場があり、道路に向かって入口があいている。

そこへ入れてから、二人は外へ出た。

ホテルのロビーから裏側へ出ると、珍しく、外が小公園のようになっている。

下はコンクリートだが、あちこちに芝生や植込みがあり、階段で何段階もの平らな岡になっている。回りのビルの人々の共同の憩いの場所になっている

らしく、オフィスの事務員が、ベンチに腰かけ、鳥の声を聞いたりしている。

「新しい都心の名所よ」

局長は毎日の新聞をよく見、テレビも見ているから、こういう新しいことに関してはよく知っているが、堂は推理小説を読むこと以外は興味がないから、このアークヒルズと称する新空間については何も知らなかった。

二人はコンクリートの公園を歩いて行く。

テレビ旭日の本社へ電話して問い合わせたら、今は制作関係は六本木を引き上げて、大部分はアークヒルズの奥にある建物に引っ越したと教えてくれた。

初めてのコンクリートの広場を歩きながら、二人はこの都心の小さな広場に、都会の持つ非情さを感じさせられていた。それがまた肥後エリカがこの東京で経験した非情な運命を思い出させるのだ。

あのとき肥後エリカは泣きじゃくりながら訴えていた。

「男のアパートで子供を生んだ二日目には、私は身一つでそこを逃げ出し申し訳ないことに思っていました。しかしそのとき、まだ十八歳。歌手を目ざしながら、仕方なく安キャバレーでホステスをしていた私には、他にどうしようもなかったのです。その子が、もう三十二年たった今、突然、自分で名のり出てきたのです。ただ当人が私にそっと会いに来るのなら、まだお金をやって、黙っているようにと頼んだりできますが、どこにいるかも、どんな生活をしているかも仕掛人は教えないのです。南白川演芸館に興行を契約したオペールレコード社員の名の手紙で『もし興行の契約を実行しないなら、東京にいる娘さんを、すぐ、F、F誌の所へ行かせ、真相を告白させます』と書いてあるのです」

そう泣いて訴えた。

「どうか、娘を探し出して事前に会わせてください。会って話さえすれば何とか、この問題は解決できると思うのです。そうでなければ、世間には私が生ま

れたばかりの子供を捨てた極悪な母だと思われてしまいます。それに五十歳と分かれば、私のお色気に魅せられてついてきたファンの方々も私の所から離れてしまいます。長い下積み生活の後で、やっと獲得したスター生命も、これで終わってしまいます」

エリカは最後は、大声で泣き出してしまい、二人はまるで自分たちがこのスターをいじめたように、扉の外に立っている人に思われるのではないかと狼狽したほどだった。

スターが帰った後、二人は早速相談した。

「ともかく、その女の子を探すことだ」

手がかりは、何らかの形でその子か仕掛人が南白川演芸館の社長と結びついていること、もう一つはその子が母親にそっくりだということしかない。

実際、手紙と一緒に送ってきた写真を見ても、まるで当人の写真かと思うほどよく似ていた。

その子に駆けこまれたら、フォーカル誌もフライダル誌も、すぐいっぺんに信用して、大々的な記事にすることは間違いない。

熊本の興行の、中央公民館の『初秋、爽やか歌謡祭』の日まではあと半月も残っていない。それまでに、その娘の居所を探さねばならない。

二人は頭が痛くなるほど考えた。そして突然、堂がいったのだった。

「テレビ局へ行こう」

「どうして」

「テレビ局で、そっくりショウの番組をやってもらうのだよ。肥後エリカの特集番組として。そうすれば、きっとそれだけ似ていれば当人が出てくるよ。賞金さえたっぷり出せば。会社でその金を引き受ける」

「それはいいアイデアだわ」

そうして二人は残暑の陽光が、コンクリートの上に照りつける日に、アークヒルズという新しい小公園を横切って、そこに建ったばかりの、テレビ旭日の新しいスタジオにやってきたのである。

二人は受付へ向かった。
タレントでもない、見学者でもない妙な二人連れに、受付の女の子は、びっくりしたように見ている。
二人は名刺を出した。
『気まぐれ探偵局局長
石島祐未子』
『気まぐれ探偵局局員
堂四郎』
不思議そうな顔をしている。
テレビドラマの中でこそ、明智小五郎や、金田一耕助などたくさんの探偵を見てきたが、現実に探偵という名刺を出した人物を見たことなどは初めてであろう。
「それで探偵さんが何の用事でしょうか」
「吉田君はいるかね」
「吉田と申しましても、各課におりますが」
「どの課か知らんが、ぼくぐらいの年だ。もっとも、ぼくほどはやせていないがね」
「ああそれなら、吉田制作部長さんですね。たしか吉田新二といいませんでしたか」
「おおそうだ、新二君といったようだ」
「吉田新二部長ならおります。すぐお呼びします」
受付で待たされている間に電話が通じ、しばらくすると二階から、
「おう堂君か。珍しいな。どうしたんだ」
と、もう中年肥りの貫禄を見せた部長が下りてきた。応接室で三人きりになると、
「こちらの美しいお嬢さんとは」
とまずそれが気になるらしくきいた。三日ばかり何も喰わなくて死にそうになっていたのを救われたという事情を堂が話すと、吉田部長は律儀に頭を下げた。
「どうもすみません。私たち同級生はお互いに仕事がある身でどうにもならないでいたのです。本当は東大の法科出身者は卒業時に、一つの誓約をするのです。将来、同級生に一人でも、失業したり、喰う

に困ったりする者があったら、仲間で助け合おうと。それでいつもこいつのことはみなで心配していたんですが、何しろ暇があれば畳に寝転がって推理小説を読むことだけが好きで、働くことだけが大嫌いというのでは、どうしようもなかったのです。それをわざわざ、貴女のような若い方に拾っていただいて感謝に堪えません」

「いえ、こちらこそ、堂さんのおかげで助かっておりますわ」

祐未子がにこやかに微笑むと、急に部長はいった。

「あなたこそ、探偵局長なんて金にもならない仕事をやめて、うちでタレントとして働きませんか。ちょうどあなたみたいな、現代の令嬢像をそのまま一身に体に表わしたタレントを私どもは、今、盛んに探しているのです。自称令嬢は多くいても本物の令嬢というのは、なかなかいないのでしてね」

堂はあわてていった。

「やめてくれよ。吉田君。それじゃぼくが飯の喰い上げになる。ぼくたちは、そんなことで来たんじゃないよ。探偵の仕事があって、それで来たんだよ」

祐未子もいった。

「はい、私も父の税金対策で、この一年ばかりは、少し頑張って働かなくてはなりませんから、この探偵の仕事をやめるわけにはいかないのです」

その仕事が税務署が納得する形で、合法的に、一億円の赤字を出すことだとまでは言わなかった。

「そうですか。それでは探偵のほうのお仕事で一体どんなことをこの私にお求めなのですか」

ときいた。普通なら、大至急、特集番組を一つ作って放送してくれなんて、とても言えないところだが、そこは同級生どうしの気安さだ。堂は、少しも悪びれずに堂々という。

「なるほどな」

と、聞き終わると一応は感心したように部長はいった。

「……たしかに、テレビのそっくりショウ利用とい

うのは、まあー、堂君にしては、よく思いついたアイデアだ。素人なら、それで合格点だ。町の探偵ぐらいなら勤まる。だがね……今はもっと世の中きびしいよ」

「えっ」

二人はこの部長を見た。

「もし、それだけ有名タレントに似ている女がいたら、世間は決してほうっておかない。きっとこれまで、自選、他選、さまざまな形で、テレビに出ているよ。だから今新しくやるより、その過去のそっくりショウの番組に出演した応募者の名前を探して担当ディレクターの所に行って住所をきいて回ったほうが早いよ」

「なるほどそうだねー」

「もっと早い方法があるよ」

またまた二人は驚いたようにして見た。

「本当に似ている人なら、声も似ている。これは声の質は顔の形で決まるという学説があるからだ。それできっと喉も自慢で、タレントになりたがっているはずだ。ただしあんまり有名スターに似ているので、かえってなりにくい。そこで、むしろ開き直って、そっくりショウのニセ物を承知のタレントで売り出して、地方の興行を回っているグループの事務所がある。そこへ行ったらどうかね」

「有難う。それならちょうどよい。ぜひ行ってみよう」

「もしかすると、そこのスターが何か考えて一芝居打ったのかもしれないよ」

「それだったら、かえってやりやすいわ」

俄然、石島局長は張りきった。

5

新宿の歌舞伎町のキャバレーや、怪しげなクラブが乱立する中に、三十台ばかり入る駐車場がある。駐車料はばか高いが、経費として領収証が出て落ち

る場合は、高ければ高いほどいい。ベンツを置くと、出てすぐ前にある、トンカツ屋に二人は入った。

もう堂四郎のお腹は大分すいてきているようだ。すぐに特大ロースカツを一つと、祐未子は自分用の一口ヒレカツを注文してから、改めて、カツを揚げている店の親父を見て『なるほど』とうなった。若山富三郎そっくりであった。

「いらっしゃい」

客に向かっていう声までドスがきいて、本物がいったのではないかと思うほどだった。

ゆっくり堂四郎が喰べ終わるのを待ってから、祐未子は初めてきいた。

「あのう、マスター、私たちちょっと興行関係の用で来たのですけど」

「ああそうですか。ただのお客さんじゃないと思いましたよ。いつでも私は店をほうり出して出かけますよ、それでどこですか」

ねじり鉢巻をしめ直して店の親父は張りきり出した。

「悪いわねー。今度の興行に要るのは若山富三郎じゃないの、肥後エリカなの」

少しがっかりしたようだが、すぐ気を取り直していった。

「ああ、エリカちゃんね。エリカちゃんなら当人以上に当人に似ているっていうのがいてね、このごろ、あちこちでわりとお座敷があって人気が出てきたよ。ここらでどんと本物を喰って大きくなるような秘策を考えていると当人もいっていたがね」

そういいながらちらと時計を見ると、

「ああ、もうじき来ますよ。うちの二階、そっくりショウのタレントの事務所になってるんですよ。名前は『あすなろ会』といってね、階段を上がったら看板が出ているからすぐ分かりますよ。みな明日は本物のスター以上のスターになりたいと思って頑張ってますよ。千鶴(ちづる)ちゃんといってください。いわなくてもあんまり似ているから分かりますよ」

「どうも有難う」
勘定を払って、いったん外へ出てから、店の横の階段を昇って二階へ上がった。
あすなろ会事務所の看板がかかっている。
入ると、四、五人の男女が振り向いた。それぞれに誰かに似ている。かなり似ている者もいれば、そういわれればそう見える程度の者もいる。
「すみません。千鶴さんて方いますか」
祐未子がきくと、
「あ……もうじき来ますよ。そこで待っていなさい」
と気軽にソファをすすめてくれた。
ほんの五分もすると、当の千鶴と呼ばれる女性が入ってきた。サングラスをかけ、一見、すぐには顔が分からないようにしているのも、自分でもあまり似すぎていて、道ばたで声をかけられたり、サインを求められたりするときにわずらわしいからだろう。サングラスを取ったときは、もう誰の目にも、それは本物の肥後エリカに見えた。
「千鶴さんですね」
「ええ、そうですが」
「興行のお願いに来たのです」
「来月の三日なのですが」
「ちょっと待って、このごろ少し仕事がこんでるから」
椅子に坐りスケジュール表を出してめくっている。
他のそっくりタレントたちの羨ましそうな目を充分に意識しているのは、ここでは彼女は一番の売れっ子だからであろう。
なるほど吉田制作部長のいったことは本当である。これだけ似ていては、世間がほうっておかない。
すぐに、来月三日のスケジュールが分かったらしくいった。
「あら、この日はふさがっているわ。残念だわ。熊本へ行くの」
局長も堂もさっと緊張した。

「何か出演があるんですか」
「そうじゃないの。フォーカル誌と、フライダル誌の二つの雑誌の人が、私の写真を撮るのですって。本物の楽屋へ行って、並んで記念撮影するんですって。私、本物に会うのは初めてよ。もう胸がわくわくしているの」
「その話は、その話として、あなたは、いつまでもそっくりさんでいるのではいやでしょう。私たちは責任をもって売り出してあげますから、ここで本物の肥後エリカと芸比べをして、堂々と一人の何とか千鶴で勝負してみませんか。一日でギャラ百万出しましょう」
「そりゃー、そのほうがいいけど、その前に私の父に会ってくださいませんか。これは父が決めたことなのです。私は理由が分かりませんが、父はなぜか、ひどく肥後エリカさんを憎んでいるのです」
「お父さんはどこにいますか」
「つい、そこの向こうの路地に、流しの音楽師たちの集まる事務所があります。そこでこのごろは流しの仕事がないので、仲間の人と花札をやってます」
「ともかく話してみるわ。一緒に行ってくださる」
　すると案外すなおに答えた。
「ええいいわ。父は私がちゃんとしたタレントになるのを、たった一つの楽しみとして、私を男手一つで育てて生きてきた人なの。だから、もし私が浮かび上がることなら、大喜びで聞いてくれると思うわ」
　三人は表へ出た。横に細い路地がある。そろそろ夕方の気配がしてくる路地を、くぐるようにして行くと、ファッションヘルスという名の新手の怪しげな店が並ぶ一画に来た。昔でいえばまあー赤線地帯だ。
　その一つに、すでに廃業して何の飾りもなくなったバーがあり、そこは扉をあけると、すぐ地下室に入る階段になっていた。
　暗い細い階段を下りると、下に小さな部屋がある。中身のパンヤやスプリングがはみ出している長椅

子が一つと、足がこわれてガタビシしているテーブルがあり、焼酎の瓶が置いてあって、四人ほどの中年から初老にかけての男がコップで冷や酒を飲みながら、花札をやっていた。

入ってきた妙な三人に振り向いた男たちに千鶴は声をかけた。

「お父さん、私を九州の興行に買いに来たんですって、日建て百万円ですって」

一人の男がうなずいた。やせて貧相でいかにも一生、貧乏がつきまとっているような感じだった。彼は妙な二人を見て、やや怯えたように立ち上がった。

祐未子は名刺を出した。堂も名刺を出した。

それを見て彼はいっそう怯えたふうに後じさった。

「私は、探偵に調べられるようなことは何もしてない。私は……」

と後は物もいえない。

しかし祐未子はおだやかにいった。

「私たちは今日は探偵の用でやって来たのではありません。お嬢さんをあくまで、陽なたの道を歩く、まともなタレントにしたいと思って、そのデビューの道を一緒にご相談しようと思ったのです」

「私はこの子に、生命を賭けて来ました。だから今度の方法を取ったのです……それを今さら」

と怯えながらも、刃向かって来る様子を見せた。

祐未子はす早く答えた。

「私はまだ何も申してません。今度のことといっても見当もつきませんわ。ただ、興行の話を持ってきただけです。日建て百万円をお支払いする。ともかくここではゆっくりお話もできませんから、外へ出ませんか」

「ええまあ、いいですけど」

結局ついてきた父親と娘を連れて駐車場まで行くと、置いてあったベンツに乗った。

6

ベンツは、再び、あのアークヒルズのある赤坂溜池に戻った。

今日は朝から忙しかった。しかしその仕事も、もう少しで終わる。ここで疲れを忘れ、気持ちをひきしめてこの難しい依頼をラストコースまで持って行って、無事成功させなければならない。

溜池側から登って行って、さっき車を入れたホテルの駐車場にまた乗りこんだ。

地下からエレベーターでそのまま十二階に登る。ここは航空会社経営のホテルだけあって、中のレストランや、喫茶店、料理屋のすべてに、空に関係のある名前がついている。

十一階の日本料理屋は、『雲上人』という名であった。

しゃれた座敷にはすでに一人の女が待っていた。六畳ぐらいの座敷で、真ん中の黒い座卓には六人分の食事が用意されていた。

堂四郎が嬉しそうにいった。

「こりゃー凄い。久しぶりの日本料理だな」

部屋へ入ったとたん、流しの事務所から来た老人は、

「あっ、おまえ」

といって立ちすくんだ。正面に坐っていた女は、にっこりと微笑み返した。

「やはりあなただったのね。まあー、立っていては話ができないから、おかけなさいな」

女は貫禄十分に言い返した。

むしろ、びっくりしたのは千鶴だった。

「肥後先生と、お父さんは知り合いだったの」

正面のエリカはゆっくりその娘のほうに振り返って答えた。

「あなたお幾つになった」

「本当は三十二歳になります。世間では、二十四歳で通してますが」

「お子さんは」

「いえ子供どころか、まだ結婚もしていません」

「どうして」
「好きになったり、向こうから好きになってくれたりした人は大勢いたのですが、私は歌手になりたくて、それだけに夢を賭けてきたのです。せめて肥後先生のように、自分の名のレコードが世間に出回るようになったら、ちゃんと結婚しよう。それまではスターにとっては、結婚歴は、人気に傷がつくと思って、結婚も子供を生むのも諦めてきたのです。でも、私、あまり先生に似すぎていて、かえってどこのレコード会社でも、テレビ局でも敬遠して使ってくれなかったのです。それであんまり似すぎた自分の顔を恨みましたわ。ついでに先生も」
全員が席に着いた。祐未子がいった。
「さあー、気楽に喰べてください。私が設定した席ですから。この次の興行でうんと儲けさせていただきますから」
堂が隣りの貧相な男に酒を酌ぐ。酒がひととおり行きわたったところで、エリカがいった。
「やはりあなただったのね。どうして自分の子に本当のことをいわなかったのよ」
「私はおまえに逃げられた。乳飲み子を抱えて路頭に迷い、ミルクを貰って歩きながらもいつか、この仇をとってやると思った。おまえが念願かなって、その人気が絶頂のときにいっぺんに地面に叩き落としてやろうと思ってね」
千鶴がびっくりしたようにいった。
「じゃー、やっぱり、私は本当に肥後エリカ先生の子供なの。私が二十歳前後のころは肥後先生はまだあまり世の中に出ていなかったから、私もよく分からずに、レコード会社にオーディションを受けに行くと、必ず、『あんたより少し年上で、やたらうまい歌手がいるけど、お姉さんか、いとこがいないか』とよくきかれて不思議に思っていたの。そのうちに私の本当の年の二十代の半ばごろ、急に肥後先生が華々しくデビューして、どこの誰か知らないながら、自分とそっくりの女の人に先にデビューされて口惜

しかったわ。せっかく若いときから、歌手になりたくて、一生懸命勉強してきたのに、何だかその道を急に目の前でふさがれてしまったような気がして……でも、もしかして、どこかに父が作った姉か、私の知らない、いとこかとも思っていたけど、先生がお母さんだなんて……」

呆れたように見つめている。

「ご免なさいね。でも考えてね。熊本の田舎から歌手になりたくて上京したまだ十七歳の私を、そこにいるお父さんは、暗いキャバレーの楽屋で、無理やり手ごめにしてしまったの。あなたがこの世に生まれたのも、ほとんど私の責任じゃないの。中絶するのにもお金がないし、そこにいる人のボロアパートで、産婆さんにとりあげてもらったけど、その産婆さんに払うお金もないと分かると、まだ産後の包帯だらけの体で、二日目にはそっと起き出して、一人で黙ってアパートを出たのよ。私はどうしても歌手にならなくてはならない。それには、もう男に負けては駄目だ。二度と男には抱かれない。これがいい薬だ。痛むお腹をさすって押えながら、女性の寄宿舎のある、キャバレーに、その夜から働き口を探したのよ。そして今日まで、男なしで頑張ってきたのよ」

父、娘、母、それぞれ三人が、それぞれの恨みをこめての対決になった。

このままだったら、いつまでもお互いの話が終わらない。

石島祐未子はいった。

「今度の、興行の問題は、本来はこの三人で解決していただく問題で、これ以上は、当探偵局としては、関与すべき問題ではないかもしれませんが、さっきちょっとテレビ旭日にいる吉田制作部長に電話で相談したら、何かとてもいい方法があるといっておりました。それで、ここへ呼んで聞いてみましょう」

そういって石島局長が手を叩いて、女中を呼び何か耳打ちする。二、三分して、

「やあー」
と、吉田部長が入ってきた。
「ああ部長さん」
と、顔見知りのエリカがあわてて、座布団を下りて、坐り直そうとするのを、
「いや、そのまま、そのまま」
と止めてから二人を見ていった。
「本当に二人ともよく似ている。前から、テレビのプロデューサーの間に、正真正銘のそっくりさんがいるということを聞いたことがあるが、本当だったんだなあー」
しみじみ感心した。
それから堂に向かっていった。
「君が、ぼくの所にこの話を持ちこんできてよかった。そちらのそっくりのお嬢さんはいくら若くみても、二十三以下は無理だ。そこでもし、この人のお嬢さんとしてデビューするなら、自然、お母さんの年は若くても四十すぎになってしまう。これでは、もう演歌歌手は無理だ」
男が末座でぼそりといった。
「私は三十二年間ただひたすら、この日を狙っていたのです」
エリカがきく。
「フォーカルや、フライダルの、カメラメンを九月三日の熊本の興行に乗りこませて、並んで立たせて写真を撮らせて、一挙に私をスターの地位から転げ落とそうとしたのですね」
「もちろんだよ」
祐未子が悟すようにいった。
「たしかに、自分を捨てた妻が憎いのは分かりますが、それでは、これまで三十二年間せっかく育てた娘さんの才能も潰れてしまいますよ」
そういわれて、その貧相な流しのギター弾きの男はしょんぼりとうなずいた。
部長がいった。
「さっき私のテレビ局のディレクターから熊本テレ

ビのディレクターに電話して、南白川演芸館の館主に会ってきてもらった。契約書を見せてもらい、それをファクシミリで、当方に送ってもらった。うちの専門家が調べてみると、契約者のオペールレコードの社員の名はでたらめで、印鑑もまたニセ物だと分かった。すでに五十万円の前金も受け取っているので、この段階で、その契約した男を詐欺の疑いで告訴できるといっていた。しかも南白川の町の人々は正直に天下の大スター肥後エリカが、やって来るというので、全戸ほとんど二千円もする切符を買って、大騒ぎで準備をしている」

男はまたいっそう小さくなってしまった。部長はやや声を荒げていう。

「興行は道義上どうしてもやらなくてはならない。素朴な町の人をだまくらかすわけにはいかない。詐欺とか、告訴とかは町の人とは関係ないことだ」

男はますます困ったようにしてうつ向いてしまった。そこを吉田制作部長は、いかにもテレビ局の現役らしく、バリバリと指摘する。

「どうしてもエリカちゃんには南白川演芸館には出てもらわなくてはならない。もちろん熊本公民館のほうも絶対休めない。F、F両誌の始末もある。それで、南白川を五時開場、熊本を六時開場で一時間ずらして始める。始めエリカちゃんには、南白川に行って三十分間出てもらう。そして三十分目に、歌が変わるときにちょっと舞台の袖へひっこむ。一瞬おいて代わりに、同じ衣裳、同じ化粧でそちらのお嬢さんに出てもらう」

「千鶴と申します」

「千鶴ちゃんか。そしてエリカちゃんは大急ぎで裏口へ出て衣裳はそのまま、BMWへ乗り、熊本へ吹っ飛んで行く。熊本で六時ちょうどに舞台へ出る、南白川町は知らん顔で千鶴ちゃんが唄い続ける。ほとんどの人は気がつかないだろうし、気がつかれてもかまわない。最初の三十分、本物が出ていれば興行法令によると、合法的だ」

エリカも千鶴も、この問題をしかけた父親も、やっとほっとした表情を見せた。

「ここで堂君の探偵局には、ちょっと力を借りたい。やりかけた仕事だから、協力してもらいたい。君らが乗っているベンツも、九州までフェリーで運んでおいて、当日、南白川に置いておく。一時間早く始まったのだから、当然一時間早く終わる。そこで町の有力者に見送られて乗るのには、ハイヤーやタクシーではスターらしくない。千鶴ちゃんは探偵局のベンツに悠々と乗りこむ。ベンツはただちに熊本に向かい終了前に中央公民館の楽屋に入る。そしていよいよ、二人並んで、F、F両誌との記者会見に入る」

さすがにみな緊張した。

「記者たちが、いろいろ質問する。もちろんもし少しでも、お父さんのほうから情報が洩れていたら、現実に親子ではないか、親子としたら、幾つの年にどこで生まれたのかなどと追及してくる。そこで、探偵局の登場になる。私の名を出していい。テレビ旭日局より、事実関係の調査を命ぜられたことにして、局長が書類を見ながら説明する。エリカちゃんが生まれて十年たって母が生んだ子で、当時四十すぎの子は恥かきっ子としてしばらく籍に入れない風習があった。エリカが十六歳になったときに、あわててエリカの子として籍に入れてしまったという結果を発表する。そうすれば今は千鶴さんは二十歳といっているが本当は二十六歳、お姉さんのエリカは実は三十六歳で常識的な線で解決する。そして来週、うちの旭日では年ごろお色気姉妹、歌の競艶というタイトルで特集番組を組む。この線ならば、五月みどり、小松みどり姉妹を凌駕する人気艶歌姉妹が新しくでき上がる」

それを聞くと母も子も突然立ち上がって、抱き合い、わーっと泣き出した。

「よかった」

泣きじゃくる二人を男たち三人もそれぞれ安心し

たように見ていた。

翌月五日。

九州から帰った祐未子は、さまざまの領収証を集めて、しきりに計算していた。

ベンツのガソリン代。南白川町の楽団や興行の手配一切、ホテルの料亭雲上人、トンカツ屋の経費、往復のフェリーボート代などでどうやら今度は二百三十万円ばかりは使ったようであった。

スターのほうから経費支払いの申し出はあったが、それは謹んで辞退し、収入は吉田部長からもらったテレビ旭日の、特集番組企画料二万一千八百円のみにして、何とか年間一億円の赤字作成に向かって、今回も少しばかりは役にたったようだ。

〈第四話〉　局長大いに怒る

1

夜中だった。

九月に入っても、あちこちにフェーン現象が起き、東京では寝苦しい夜が続く。暑さをてっとり早く解決するのには、着ている物を脱ぐのが手軽で有効だ。

自分の実家の広々とした庭に囲まれた離室にでも寝ているなら、祐未子も虫除けの網戸をたてただけで、ほとんどショーツ一枚の裸で大の字になっても寝ていられる。

だが周囲が、木造モルタル塗りのアパートで隙間なく建てこんでいる真ん中の木造ボロアパートの一階では、すっかり覗きこまれてしまうから、窓はぴったり閉め切っておかなくてはならない。代わりに一晩中クーラーはつけっ放しにしておく。ここは実は個人の住宅であって、個人の住宅ではない。まだ十九歳のお嬢様石島祐未子が経営する、『気まぐれ探偵局』の事務所である。しかもこの探偵局の目的は、税務署が一言の文句なくきちんと認める素姓の良い領収証が出る経費をうんと使って、年間一億円以上の赤字をどうしても出すことにある。

光熱費なんてのは経費としては最も筋がいい。だから夜中じゅうクーラーをつけっ放しでいくら電気代がかかろうとかまわない。それは大きくいえば、平安時代の先祖以来江戸板橋の土地に伝えてきた石島家の億の下に0が三つつく巨大な財産を守るために必要なことなのだ。

祐未子は、部下であり、同時に唯一の協力者でもある、堂四郎と、先ほどなめらかに睡眠に入るためのハードな運動をベッドでしたばかりであるから、ちょうどまるで深淵に吸いこまれるような勢いで、深く眠りこんでいた。

そんなときに枕もとの電話が鳴ったのだ。いくら耳もとで鳴り響こうと、若く健康で快い疲労の眠りがさめるわけはない。

壁際に押しつけられるようにして眠っていた局員の堂四郎のほうが、もう中年だけに目をさましてしまった。

最初は電話に近いほうの祐末子局長が目をさましてくれると思って、ずるをきめこんでいたが、てんで目をさまさない。すっかり裸になっている体の上に、クーラーの冷たさでお腹でも冷やしてはいけないと思ってか、バスタオルだけのせてある。それを彼もパンツなしの体でまたぐようにして、やっと机の上の電話に手をのばした。

「はい、こちら気まぐれ探偵局ですが」

「ああよかった。起きていたんだね」

誰かこちらのことを知っている人がかけたらしいが、夜中にかけて、起きていてよかったもないもんだ。温厚な堂も少しむくれた。

「こんな時間、起きてなんかいませんよ。何時だと思ってるんです。部屋が狭いから、電話が鳴るとどうしても起きてしまうんです。あんた誰なんですか」

「まあ、そう怒るなよ。これでも君の探偵局に、仕事を頼もうと思って電話したお客さんなんだよ。テレビ旭日(きょくじつ)の吉田だよ」

「なんだ吉田君か。それならそうと最初からいってくれればいいのに」

堂四郎とは東大の法学部の同級生だ。今は赤坂の溜池のそばにあるアークヒルズの横の本社で制作部長をやっている。先日は移籍問題で揺れる歌手の事件で厄介になった。堂は急に丁寧な言葉遣いになって、

「先日は大変お世話になりまして、ありがとうございました」

と礼をいった。本を読むことだけが好きで、生活に対しては全く無能力者の堂もこれぐらいの生活の智恵はある。吉田部長はせきこむように、

「いや、今はそんなことはどうでもいい。この前は君たちから協力を頼まれた。今度はぜひとも君たち

の力を借りたい。これは実は警察にも、マスコミにも、絶対知られてはならない事件なのだ。ぜひ君たち探偵局に助けてもらいたい」

といった。

「しかし大体、どんな事件だか聞いておかないと、何ともお返事のしようがありませんが」

「同じ東大の卒業生ではないか。そんな冷たいことをいうなよ。同期生だったら、おれたちは片方が検事、片方が被告という究極の状況になっても、必ず無罪にするというぐらいの固い結びつきだったのじゃないかね……東大の卒業生は」

それだからこそ、この間は番組の編成で忙しい時間の最中でも、吉田部長は会ってくれたのだ。

「……すぐ探偵局長の可愛いお嬢さんと一緒にベンツで出て来てくれないかね。渋谷のパルサ・マンションの十二階の、一二〇四室だ。駐車はちゃんと、地下の駐車場の相原こずえの所をあけておく」

「相原こずえ？」

聞いたような名だと思ったが、その方面はあまり詳しくない堂が聞き返すと、電話の中の声で外に洩れる恐れは全くないのに、

「しっ、声に出すな。マスコミに洩れたら大変だ。絶対秘密だ。すぐ局長と一緒に来てくれ。じゃー頼んだぞ」

と注意するとあわただしく勝手に切ってしまった。電話をおいて、半分のしかかったままの体ですぐ下の局長を見ると、形の良い乳房をゆっくり上下させて、安らかな寝息をたてて眠っている。

よほど深い眠りに入っているのだろう。しかしここまで切羽詰まった声で頼まれては仕方がない。

「もし、もし、局長」

しきりにゆすぶったが、よほど熟睡しているらしくなかなか起きない。仕方ない。やりたくはなかったが、最後の手段として、両方の形よくふくらんでいる、乳房の尖端の丸い紅い小さい突起を、思いきり強くつまんでひねった。さすがにこれには、

「あっ！　何をするのよ」
と瞬間に目をさまして半身を起こして、堂を睨みつけた。
「何てエッチなことをするの、あんたがほしがるときは、いつでもちゃんとこれまでいうことを聞いてあげたじゃないの。もしまだほしいなら、優しく口づけするなりして女心をその気にさせるムードに持ってきて、ゆっくりと抱けばいいじゃないの。私はどこにも逃げて行きはしないわよ」
堂はすっかり困った顔でおどおどと弁解した。
「ぼくは……ちっとも淫りがましい気持ちで……そんなことをしたのでは……」
「じゃー何よ。なぜこんなエッチしたのよ」
「実は今、急な仕事の依頼があって、それがどうしても行かなければならない状況になってしまったのに、なかなか、局長殿が起きてくださらないので、まことに止むを得ずそういう手段を講じたわけでして」
「それだって、頬をゆすぶるとか、半身を立てるとか、もっといやらしくないやり方だってあったでしょう。ともかくどんなことがあったのかいってごらんなさい」
「はい」
祐未子の岸本加代子のような大きい目に睨みつけられて小さくなってうなだれながら事情を説明しだした。途中で、局長の祐未子は、
「えっ、相原こずえ」
そういってあわててベッドから飛び下りた。たった一枚の下着さえも脱いでいたが、台所兼用の洗面所に行って、タオルで大急ぎで全身の汗を拭きながら男に命令した。
「あんたもすぐ出発よ。彼女のことならきっと大事件に違いないわ」
「なぜ彼女のことなら大事件なんですか」
「理由は車に乗ってからゆっくり話すわ。ともかく今、日本で一番人気のあるタレントなのよ。あんた

も大急ぎで仕度して」

裸の体を拭き終わって、腰の所と胸の所との双つの下着をまずつけ出した祐未子に代わって、長身の堂が台所で身をかがめるようにして体を拭きながらきいた。

「タレントというと、またこの前みたいに素顔も分からないほど厚化粧している女ですか。あんなに元の顔と違ってしまうなら、彼女たちが探偵をやったほうが早い」

「こずえちゃんはそんなことはないわ。年は多分、まだ私と同じ十九よ。セーラーズのTシャツか何か着ちゃって、健康な素肌でステージいっぱい翔んで唄うの。びっくりするぐらい可愛い子よ」

そうたしなめた。

2

小さなアパートの前を大きなベンツはでーんとふさいでいる。元は二千万円もしたが今は金をつけても他人に貰ってもらいたい、税法上の厄介物だ。そのベンツのエンジンが動き出した。さすがにドイツの名車だ。税法上の耐用期間はすぎていても、その性能には一つの狂いもない。

二人が乗るとなめらかに動き出した。

もともと堂は暇があれば寝転がって本を読むことだけが生活の一切で、免許証を取るなんて、手数のかかることは、考えたこともない。最初から運転は女の局長に任せて悠々と、その隣りの席に乗りこんでいる。

夜の町は、昼間と比べると車は少ない。

板橋の、それもかなり荒川に近いほうからだが、都心に近い渋谷のパルサ・マンションの駐車場には、二十五分で入れた。

ビルの地下のそこには、相原こずえ専用という名札がかかった区画が三つあった。プロダクションや、テレビ局の打ち合わせ用に、それだけ確保してある

のだ。これも個人所得の多いタレントなどが、一時的に必要経費をふやして、自分の所得額全体を低くしようとしている努力の一つかと、このごろは父の苦しみがよく分かってきた祐未子にはすぐ理解できたが、まあーいちいち、何事も税金に結びつけて考えると、どうも精神構造が全体的にミミッチクなってしまう。

せめて探偵業務に入ったときは、最後の決算のときまで、なるべくそういうことは考えまいと思ったりした。

二人はエレベーターで十二階まで直行した。

一二〇四はすぐ分かった。ベルを押す。おそるおそる扉が少しあいて、二人と分かると、さっと中へ招じ入れられた。

吉田部長と、ほかに中年の女と、若い女の二人がいた。中年の女は、所属プロダクションのマネージャー、若い女は、スタジオから宿舎までいつもずっと女優につきそっているいわゆる付人であると、吉田は紹介した。

当の女優の相原こずえの姿は見えない。奥の寝室にまだぐっすり寝込んでいるのか、何かの手当てを受けているのか、部長は詳しくは語らなかった。どうも二人が来る直前まで、女史は若い付人をきびしく叱りつけていたらしい感じがする。

石島局長が紹介されて頭を下げて、この同年輩の女性をちらと見ると、目玉の部分が、さんざん泣いて溢れた涙をあわてて拭ってみたが、また溢れてきた感じで、じっとりと濡れていた。三人とも気まずい雰囲気だ。

「深夜、無理に叩き起こすようにして来ていただいて、まことに申し訳なかった」

そう吉田は深々と頭を下げた。つい先日の、テレビ旭日の全番組が彼を中心にして回っているような元気さは無かった。

石島祐未子は局長らしく答えた。

「仕事ですから、どんなご要求にも応じますが、ま

ず夜中なのに、私たち二人がここへ呼び出された理由を説明いただけませんか」

「幸いその子が……」

と、また目玉に涙がいっぱいたまってきた若い付人を示して、吉田部長は、

「……発見が早かったから生命を取りとめたからよかった。実は……」

急に声をひそめてあたりを見回し、

「……相原こずえさんが、さっき睡眠薬自殺を計ったのです」

といった。彼としてはこれは多分、絶対に他人、特にマスコミに知られてはならないことだったのだろう。局長と堂は黙ってうなずいた。幸いまだマスコミに洩れていないことだけは確実だ。もし分かっていたら、今ごろはこのマンションの回りはマスコミの車、テレビの中継車、FとFとEの三つのカメラマンが、人垣を作り、ライトは皓々と照り、近所の人は何事かと思って山のようになって遠巻きにしているはずだ。

ふと先日のテレビで、外国人妻と離婚するという噂が出た中年の演歌歌手が、報道陣の人垣をかき分けながら、回りにまつわりつく記者やカメラマンに本気になって、

「うるせえ！　おれはマスコミのおもちゃじゃねえんだ」

と、どなりつけていたのを思い出した。あらゆる事象に敏感に触手をのばして、ほんのちょっとでも事件が起これば、わーっと大群を動員して押しかけてくるマスコミ陣が、これだけの大事件を知っていて、ほうっておくはずはない。

「なぜですか。もちろん、これから探偵の仕事をお引き受けする私たちには、それを聞かせてくれるんでしょう」

石島局長はこういうときはとても十九歳だとは思えない、しっかりした態度をとる。一応、学生の身ではあるが、同時に一つの探偵社の経営責任者でも

あるからだ。

「ええお話ししますよ」

「私たちは業務上知り得た秘密は厳重に守ります」

「それは信じております。実は彼女は今日の昼まで何でもなく明るい表情で、テレビの連ドラの撮影をやっていたのです。帰りがけ、この付人の子に、三十分だけ自由にさせてくれといって、どこかへふらっと行ってしまったのです。こういうことは許しちゃいかんのです。……スターの体というものは、スター個人の物であって、スター個人の物じゃないですからね」

といいながら、吉田部長は何となく付人を睨む。目に険がある。仕事となると鬼のようにきびしい部長なのだろう。とたんにまた、手で顔をおおって付人は泣き出した。掌の指の間から、涙がこぼれて、外側まで濡れてくるほどだ。それを冷たく見ながら叱る。

「今さら泣いたって仕方がないよ。明日の朝は九時から撮影だ。スタジオ入りが、五分おくれても、顔色が少し青くても、マスコミのゴマの蠅は、何か理由をつけてわーっと騒ぎ出すんだ。結局最後に泣くのはこずえ先生のほうだよ」

それから改めてきびしい顔で向き直り、石島局長にいった。

「その間の三十分間に何があったかは知らない。しかし結果が今、こうなってしまった。それについては不問に付す。あなた方にも、そのことを調べにここへ来てもらったんではない。彼女は三十分後にともかくちゃんと帰ってきた。しょんぼりした暗い顔をしていたそうだが、ときどきそういうことがあるので、その二人も気にしなかったそうだ。『疲れたから少し眠るわ』そういって、この奥にある、自分の寝室に入って行った。それで付人のその子も安心して、こちらのソファベッドで、一休みしたらしい。大体付人の身分で、先生と同じに眠ろうという心掛けがいかんのだよ」

石島局長にとっては、同じ年ごろで、同じような顔をした少女どうしでありながら、一人がベッドで、一人がソファに眠るのさえひどい差別だと思うのに、その眠ることさえいけないといわれては、少し可哀そうになってきて、文句を言ってやりたくなった。だがこれは自分の仕事の権限外だ。胸をさする。芸能界のスターと付人というのは、多分こんなものだろう。同じ年輩でも一人は先生、一人はただのその子呼ばわりだ。

付人のほうはやがてスターになる日を夢みて入ってきて、どんな辛いことでも耐えているのだろうから、なまじ口を出して、彼女の職場を奪うようなことがあっては気の毒だ。

吉田部長はなおも少女を批難してやまない。

「気がついたら隣室でいびきが聞こえるというのだ。慌ててとびこんだ。いつもすやすやとお行儀よく眠って、決していびきをかくような子ではない。びっくりしてゆすぶってみると、どうにも目をさまさない。枕もとを見ると、睡眠薬の箱が転がっている。中の瓶はほとんどカラだ。そこで慌ててプロダクション事務所へ電話を入れ、女史も仰天して、すぐいつもプロダクションのタレントのいろいろの病気を内密で処理してくれる医者を呼んできた。ただちに胃の中の洗滌を徹底的にやり、全部吐かして、ようやく危機を脱した。そうだなあ」

再び泣き出しながらも、付人は掌でおおった顔で大きくうなずいた。

ただこのとき、少し局長には不審に思えたことがあった。普通ならタレントの病気や、休場は、テレビ局も困るが、プロダクションにとってはもっと困る大事件だ。

だから吉田部長が付人をきびしく睨む以上にもっと、怖い目でマネージャーが付人を叱りつけるはずだ。ましてマネージャーは中年女だ。いかに、度量が広くみせかけても、女は女だ。人気スターの自殺未遂などあったらあることないこと書きたてられて、

ほぼそのスター生命を潰してしまう。これまで何千万円、何億円とかけてきて、今や人気絶頂、これからやっと何十億円、何百億円と稼いでもらえる金の卵を失ってしまうことだ。

本来ならマネージャー自身も狂気に近い取り乱し方を見せるはずなのに、かなりシラけた顔で、女史は吉田部長と付人を見ている。このへんがどうも少しひっかかるが、まだ何も自殺への理由が分かっていないのだから、先入観を持たないようにしようと思った。

どうも人間は同じ場合に同じことを考える傾向がある。部長にはこのマネージャーの落ち着いた態度も不満であったらしい。

「まあ、プロダクションのマネージャーも、少し常識を疑うよ。女史よ」

どうもこれがマネージャーの通称らしい。

「……女史だって、もうこの業界に二十年もいるんだろう。それでよく、シラジラと、一日か二日休ませていただけませんかなどといえるもんだね。生きている限りは、いや死んだって幽霊になって出演してもらわなくてはならないのが芸能界だ。この前の田丘君みたいに、ビルから飛び下りて、頭が半分割れて、顔が使い物にならなくなったわけじゃない。胃の中の物を、水や薬液を注入して全部出してしまっただけだ。若いんだから朝になったら元に戻る。戻らなくても、顔があって体があったら、明日、テレビの撮影に出てもらう」

二人とも部長の勢いの激しさには、黙りこんでしまっている。

「私は、その三十分間にこずえさんが何をしたかなんてことは詮索するつもりはない。またそのために、今、東京では最も優秀といわれている、この私立探偵に来てもらったわけではない」

褒めすぎに、二人は首をすくめた。

「これからこの二人には、ここで一緒に泊まってもらう。ともかく連ドラが終了するまで、あと五日間

ある。その間は、ずっとこことスタジオを往復してもらって、ぴったり密着し、たとえ三十分でもこずえに勝手に歩かせてはいけない。それは君も田丘雪江のことでもうこりているだろうから、私の心配が分かるだろう。相原君はまだ若いから純粋だ。一度死のうと思った子は、必ず二度も三度も死のうと思って目的を達するまでくり返す。田丘君だって、一度死に損なったのを、女史が懇々と意見をして、それを聞いて納得した。そこで君が安心して目を放した。とたんに屋上に駆け上がった。ともかく君のところは一度失敗してるんだからね」

付人とプロダクションのマネージャーの二人は、何か言いたそうにしたが、すぐまた黙ってうつむいた。正面切って、局のプロデューサーには、文句を言えない立場なのだろう。さらにそれをもう一度印象づけるようにいった。

「ともかく君んところは、あの田丘君で一度局に大損害をかけているんだからね」

そう言われるともう言う言葉はないらしい。

「堂君、そういうわけだ。私立探偵として、この五日間、とにかく番組が終わるまで相原こずえにぴったり密着して、無事撮影を終えさせてくれないか。頼む。ぼくもサラリーマン、弱い立場なんだ。この番組は、ポスト田丘雪江の人気もあって、今のところ、視聴率二十四%。これは全日本人の四分の一が見ているという勘定になる。一般民放では到底考えられない高い視聴率なのだ」

そういって、これまで強引で時には無礼であった、吉田制作部長は、堂四郎と、石島祐未子に向かって、深く頭を下げた。局長は『こんなことは本来の探偵局の仕事じゃありません。一つも推理力を必要としない仕事なんか興醒めしてやる気はしませんわよ』といって、よっぽど断わろうかと思ったが、ふと、あることが閃いたのと、この部長の真剣な頼みにほだされて、

「分かりました。ともかく五日間は、一秒も目を放

さずに、出演させることをお約束します」
　ときっぱり引き受けた。
「ありがとう。それじゃ、くれぐれもお願いしますよ。ぼくは今からすぐ、アークヒルズのスタジオに戻って、明日のセットや、楽団の準備をしておかなくてはならないからね」
　堂がびっくりしてきいた。
「テレビ局では、部長さん自身がそんな細かいことまでするのですか」
「ああ、すべてチェックしておかないとね。放送というのは、どんな小さなあやまちでも許されない仕事だからね。いやー頼むよ」
　友人の堂と石島局長を残しておいたら、もうすべては安心と思ったのか、そのまま飛び出すように出て行ってしまった。

3

　後には気まずい沈黙が残った。
　マネージャーの女史としては、ともかく放送が終わるまでは、吉田部長の指示に背くわけにはいかない。しかし、スターとはいえ、まだ十九歳の少女の一人住居用に借りているマンションだ。そこにこれまで全く見も知らぬ他人であった男女が、同居するとなったら、えらい迷惑だ。
　明らかに困った顔をしていた。ベッドなどはもちろんないが、ソファだって、長椅子に付人が寝て、もし今夜女史が泊まるなら、二つある肘掛け椅子を向かい合わせにくっつけて、女史がそこに体を丸めて寝る。
　到底、他の男女の客まで泊める余裕はないようだ。
　女史が、
「ご愛想もなくて、あんたすぐコーヒーでもわかして」
　と付人にうながす。少女がキッチンに立って行く。
　そのとき石島局長はいった。

「ちょっとこずえさんの寝室を見せていただけませんか。実際に今、そこに当人がいるのをたしかめてからでないと、これからずっと五日間の長い間、監視するにも、真剣味が出ませんから」

といった。マネージャー女史は、ちょっと困ったように堂のほうを見た。若い少女スターの部屋だ。いかに制作部長の勅命でも男性を入れるのは好ましくない気分なのだろう。局長はすぐそれを察して、

「いえ、私一人でいいのです。無事寝ているところを見せていただければいいのです」

といった。

「ではお嬢さんだけ、どうぞ」

いくら探偵局長とはいえ、マネージャーの女史にとっては、祐未子は自分の娘ぐらいの年のお嬢さんにしか見えない。そう呼ぶのも仕方ない。

二人はそっと扉をあけて中へ入った。

枕もとに縫いぐるみがたくさんおいてある。ピンクの色調に統一されたベッドには、長い髪の少女がすやすやと寝ていた。少し青ざめているのは、胃洗滌というかなり激しい医学的処置をしたからだろう。普通の女の子だったら自分だけの力ではこんなマンションで暮らすことはできない。その代わり、スターであるからこそ、明日の朝九時にはどんな辛い病気でももうスタジオには出なくてはならない。

きれいに生まれついたために、人間扱いされないのだ。可哀そうになってきた。田丘雪江が飛び下り自殺したのも、きっとこのような事態に何か関係があるのだろうかとふと思った。

このスターがいつも使うらしい、香水の匂いがしている。ヘリオトロープ系の清楚な感じで、いかにも少女っぽい。

全体が少女劇画の世界の中にいるようで、もし芸能界に憧れていたり、少女劇画の甘いロマンチシズムの世界に憧れていたりする少女たちがこの部屋に入ったら、

「うわーっすてきー」

ととび上がるところだろうが、局長はそんなはしたないまねはしない。もともとこの自殺未遂騒ぎに、何かそのまま表面だけで考えていては割りきれないものがあると早くも、感づいていた。

……それに局長は現在板橋区内でも、最も古くて汚ないアパートといってよい、オンボロの六畳一間きりのアパートに住んでいるが、自分が好きで住んでいるのであって、近くに千坪を越す大邸宅があるし、億に0が三つつく資産家の一人娘だから、住もうと思えばこのぐらいのマンションに住むことなど何でもない。

だから冷静な目で見ることができた。

まず第一におかしく感じたことがあった。比較的扉や壁の部分の造りがいい。さっき付人の少女が、いびきの声で目がさめてあわてて医者を呼んだという。

いびきはある種の睡眠薬ののみすぎと、もう一つ老齢の人の脳充血の失神のときの特徴だが、たとえ睡眠薬中毒としても、この扉や壁を通して隣室まで聞こえるかどうかということになると疑わしい。まあ一何かあって、たまたま気になって、扉でもあけたとき聞いたのかもしれないから、それだけで一概に怪しいとは言い切れないが、この供述はマークしておかなければいけない。

吉田部長は、ただ残った五日間分の撮影さえできればいいので、自殺未遂の原因もそのときの身体の状況もさっき聞こうとはしなかった。しかし女史と付人の間には、絶対何かがある。マスコミどころか、テレビ局の担当の係にも知られたくないものがある。

「ここで胃の中のものをすべて吐いたのですね」

探偵らしく職業的な調子できいた。相手は海千山千の中年女マネージャーだ。おとなしい調子で聞いたらうやむやにされてしまう。大体芸能界というところは、まさに狐と狸の化かし合いだ。少しでもハッタリをきかせたほうが勝ちだ。

「ええ、ここで何度も何度も吐かせましたわ。最後

には出る物がなくなって、黄色い液まで吐いて、その間に……」

と少し声を低めて、

「おかんちょうまでして」

といった。初めは咄嗟に意味が分からなかったがすぐに納得した。若い女性の身としてはかなり恥ずかしい姿態であったろう。しかし女性は、初夜で夫を迎えるときも、やがて愛の結晶が月満ちて生まれるときも、月々の生理の手当てにも、この恥ずかしい姿態から一生無縁でいることはできない。

かなり濃い目にまかれている香水の匂いから、吐瀉物や、排泄物の匂いがかすかにでもしないかと、黙ってはいるが、祐未子はしきりに鼻に神経を集中した。匂いをかぐことについては自信がある。体中から吐き出し、腸からも抜きとっていたのなら、その匂いが残っているはずだ。

医師がいたり、医学的処置が終わった後に必ずするクレゾール石鹸水の匂いは残っている。これははっきり分かる。

しかし次に感じたのは血の匂いだった。どこかに残っている。

始めは、女性特有の月々の出血の匂いかと思った。しかしあの血は普通の血の匂いと違って特有の厭な匂いを持っている。それとは違う単純な匂いだ。

もし危険であるが推論をすすめるなら、それはここで吐瀉でなくて出血があったと考えられる。もう一度、ベッドを見た。

今はすやすやと寝ている。たしかに、今年のシンデレラといわれてテレビで騒がれるだけのことはあった。瞳を閉じていても瞼の上に長いまつ毛がかぶさる。鼻筋も唇も端正に整い、フランス人形のようだ。もしファンなら、たとえ女の子どうしでも、ここでまた思わず、『かわゆいーっ』と叫んで頬ずりしたくなってしまうかもしれない。ディズニー映画の眠り姫をそのまま見ているようだ。

祐未子は一生一度の芝居をした。



WAR
My nam
is really
can see
body, b
tant I ha
persona
call me
perienc
tion of
gulfing
and wh
it anym
lease in
body ar
can sta
enjoy e
me a ca
more th
imagine
(212
Mon. t
11 a.m.

可愛くて仕方がないというように、ベッドのそばにひざまずいた。マネージャーは、女の子なら、まあー誰でもそうだろう、たとえ女刑事でも女探偵でも、これは当たり前だ、それぐらいうちの先生（たとえチビッコでも、タレントに対してはそう呼ぶ）は魅力があるんだというような顔で大きくうなずいた。実は、そのとき自分の背中や体をかげにして、祐未子はす早くさまざまのことを、一瞬にしてしまっていた。

4

もとの隣りの部屋へ二人は戻った。

何となく困った顔をしているマネージャーに、安心させるようにいった。

「これだけの部屋に、四人が一緒に寝るのは困難でしょう」

向こうもほっとしたような声でいった。

「ええ、先ほどから、私たちも、それを一番心配していたのです。この狭い場所でお二人に泊まっていただくのは無理なので、どうしようかと」

「別にそのご心配はいりません。私たちは、吉田部長の部下でも何でもないので、すべてがすべて彼のいうことを聞く必要まではないわけです。要は明日までこずえさんがどこへも出ず、撮影開始の九時にアークヒルズのスタジオへ入れるようにしてください！　その間、絶対外へ出さないということと、その一時間前に、マンションの玄関で私たちと会って、一緒の車でスタジオに行ってくださると約束してください」

「約束します。どんなお約束でも必ずお守りします。こずえ先生は田丘雪江が突然死んでしまって以来、有力なタレントがいなくなってしまった、うちのプロダクションにとってはもう最後の切札です。そのためにも、この五日間の連ドラに休場してしまって、人気が崩れたら、もううちのプロそのものが、この

業界ではやって行けなくなります」

それは多分本音だろう。

「じゃー、くれぐれも約束だけは頼みますよ。私たちは今日はいったん事務室へ帰り、明日は、八時より十五分前には、このマンションの入口に車で迎えに参ります。私のベンツは特注品で座席もゆったりしていますし、車から日本中どこへでも無線で電話をかけられるようになっています。それにこれはよけいなことですが、たとえ外から他のプロダクションがギャングを雇ってピストルの弾丸を射ちこむことがあっても、どのガラスもピストルの弾丸ぐらいなら簡単にはね返してしまいますから」

「まあー、特注のベンツを」

と半分は驚き、半分は信じ難いような顔をして女史は祐未子を見ている。祐未子はケロッとして答えた。

「ええ、父がちょっと、組関係のトップの役員を務めていますから」

芸能興行のマネージャー業はどうしても、地方巡業で組関係との接触が多くなる。現在の日本では、どういうふうに近代的に合理化しようと、組との関係は避けられないから、そのうるささや、実力はよく知っている。少し態度を改めたようだ。

充分に薬は効いた。二人はそこでこのマンションを辞去する気になった。

「では明日八時前に会いましょう。堂さん狭くてお気の毒だから私たちは引き上げましょう。ちゃんと、朝の七時四十五分には、マンション入口に、こずえさんを連れて出て来てください」

堂はまだ心配そうにいった。

「大丈夫でしょうか。ぼく一人で扉の外で張り番してましょうか」

「そんなことしたら、かえって他のマンションの住民たちに気味悪がられて、ご迷惑がかかるわよ。充分信用しましょうよ。それに今ごろはもう、父の組の者が、回りを厳重に見張っていてくれるから」

と最後は少し脅しをきかせて外へ出た。二人はすぐエレベーターに乗った。

「たしかすぐその道の向こうに大きなラブホテルがあったわよ。そこへ大急ぎで入るの」

地下の駐車場へ入ると車を出して道玄坂へ向かった。日本では有数のラブホテル地帯だ。その中でも駐車場のある一番大きいエリザベータというホテルに入った。

明らかにラブホテル特有の、ケバケバしい装飾で、玄関のタイルや、黒い大理石など、普通の美的感覚を持ってる人では辟易してしまうが、恋する男女や、中年男と若い娘との不倫コンビなどには、かえって刺激があっていいのだろうか。

二人は入口でよっぽど、板橋の木造の小アパートのあのベッドへ帰りたくなったが、そこは仕事と我慢して入った。入口には小さな窓口があって申し込むようになっている。

「一番高い階にある部屋があいていますか」

ときいた。向こうもそんなふうの注文は初めてらしい。不思議そうな顔で返事した。

「お値段のほうも高くなりますが」

「領収証さえいただければ、高ければ高いほどいいんですが」

「ほんとに領収証出していいんですか。ロマンスホテルという字が入りますよ」

「ええ、どんな字が入ってもいいわよ。うちは、税務署に通るんだから」

「そうですか。では先払いでお願いします」

といって、泊まり分の金と引き換えに、ちゃんと領収証を切ってくれた。しかしこんなホテルへ来て領収証を要求して行った人は他にいないだろうし、それも若い女のほうが、堂々と申し込んで受け取ったというケースは、全ラブホテル業界でも初めてのことだろう。これはラブホテル業界で、会員親睦のために発行している、『ロマンスと観光』という業界誌の随筆欄にのせてやろうかと、窓口にいた主人

は考えたほどだった。
二人は六階の部屋に入っていった。スイッチをひねると全体がピンクの照明に輝き、正面奥の壁は一面が鏡張りになっている。その前に円型のベッドがある。多分枕もとのスイッチを入れるとゆるやかに回転し、腰にあたる部分は上下動するようになっているのだろう。しかしそういうものに刺激を感じるのは、お互いの体に少しあきかけてきた仲の男女で、今はまだ、セックスを知ったばかりで珍しくて仕方がない二人にはこういうよけいなものはいらない。
部屋へ入ったとたん、一応キスしたが、その相手を押しのけるようにして局長は、
「なぜ、私がこの一番上の階を選んだか分かる」
と、堂局員にきいた。
「さあー」
「あの部屋のタレントのベッドの下に盗聴機をしかけてきたのよ。マネージャーに背中向けて、あの子の美しさに感心して、ひざまずくふりをして。どうも、あの付人やマネージャーと、相原こずえとの間や、テレビ局との間にも、私たちにも隠している何かがあると思えるの。人間が自殺しようというのには、よほどの重大な理由があると思うのに、あの二人はちっともそれに触れようとしなかったでしょう」
「ええそうですね」
「今すぐそれが分かるわ。もっとも私にはそれが、もう大体分かっているけれど。ともかくどんないい盗聴機でも、音をしっかり取ろうと思ったら、できるだけ間に障害物を入れないようにして聞くのがいいのよ。向こうは十二階だから、こちらも六階なら、間にビルが入らないでそのまま音が聞こえるはずよ」
窓際へ行き、少しガラスをあけ、そこへ小型ラジオのような専用受信機を置いた。
スイッチボタンを押すと、すぐに音が入ってきた。
「みっちゃん、みっちゃんたら」

ヒステリックに呼ぶ声がする。付人の名なのだろう、扉があけられ、
「何ですか、先生」
と答えて、付人の少女が入ってきた。
「私どうしたの。一体どうしてここで寝ているの」
少しタレントの少女の言葉が変だ。堂は、なぜそうこずえ嬢がいうのか、理解できないかのように首をかしげた。女史や付人から説明を受けた状況によれば、彼女自身がいきなり大量の睡眠剤をのんで自殺を計った。それを隣室の付人の少女がいびきで気がつき、ただちにプロダクションのかかりつけの医師がやって来て、完全に胃洗滌をして、最後にはおかんちょうまで施して、体の中からすべての物を排出した。やっと一命を取り止めたけれどその疲労で立ち上がれないから、明日一日は、撮影を休むのを許してくれということだった。
もしこずえが、本当に、あの枕もとにわざとらしく転がっている睡眠薬を自分でのんで、自殺未遂を計ったのなら、今の言葉はおかしい。それに『どうして生きてるの』とか、『なぜ助かったの』という疑問や、あるいは『ごめいわくをかけてすみません』などという詫びの言葉も入るはずだ。
しかし次の言葉はもっと意外であった。
「これどうしたの。こんな包帯や、ばんそう膏、なぜここへはってあるの。あんたたち、私が眠っている間に何をしたの」
鋭く、付人と、女史を批難する声が聞こえる。
堂がまるで分からずに、祐未子に何か聞きたそうにしていたが、それに対して祐未子は今の言葉で充分中の状況が分かったらしくいった。
「彼女、何気なく下腹に手がのびて、パンティの上に触れてびっくりしたんだわ。きっとお手洗いにでも行きたくなったんだわ」
「それでどうしたのです」
「私には今のことですべて分かったわ。背中でマネージャーの女史に見えないようにしながら、す早

く夏がけ毛布の下に手を入れて、パンティの上に触ってしまったの。彼女それも知らずに眠っていたけど」

「それで何があったのですか」

そう堂が、単なる好奇心だけでなく、探偵としての業務上の必要もあってきいた。だがそれに対しては、意外にきびしい声で、石島局長はいった。

「だめ。それは女どうしの秘密だから教えられないわ。あなたはこのことについてはもう考えてはいけないわ。私はとても自殺とは考えられないけど、もし自殺しようとしたと仮定しても、すべて今のことに理由があるの」

専用受信機からは、

「あなたたち、一体何をしたのよ。勝手にひどいじゃない」

とわあわあー、手放しで泣く声がする。それに対して、二人の女が、

「タレント生命を守るためにはこうするよりほか仕方がなかったのです」

「先生、会社の全員が生きて行くためには、今は恋などしていられないのです。堪忍してください」

と口々に必死に慰める声が聞こえてきた。

石島祐未子はそれに対して、

「いずれにしても、事はあのタレントさんの下半身の周辺にあるのよ。だけどあなたがそんなことを考えるのは私には許せないの。あなたが他の女性の肉体のことなどについて考えるのは私に対して冒瀆以外の何物でもないわ。私には一切分かったから、あなたがあのタレントに対して、よけいな妄想をいだかないようにこれから先は、私一人がイヤホーンをつけてきくわ。あなたは久しぶりにゆっくりお風呂で一時間かけても、二時間かけてもいいから体をきれいに洗っていらっしゃい。それが終わったら、私がシャワーをあびるから」

といって、風呂へ追いたててしまった。

冷房をきかせて、ベッドの上へ、ドレスを脱いだ。

二枚の下着をつけただけの姿で寝転がり、耳にイヤホーンをつけたまま、じっと女どうしの争いを聞いている。

ときどき一人言をつぶやく。

「大体思ったとおりだわ」「やっぱりそうだったのね」「どうも最初からおかしいと思っていたけど、やっぱり」

次々と自分の推理が当たっているのに、一人で満足したようにうなずいていた。

だが途中で、相手は機械なのに、思わず我を忘れて、

「えっ、何、それはほんと、まあー」

と半身を起こした。

受信機のスイッチを切ると、それをほうり投げ、掌を顔にあてて突然、

「わあーっ！」

と声を上げて泣き出した。びっくりした、堂四郎があわてて、すっ裸のまま飛び出してきた。

「どうしたんです。急に泣き出したりして」

と裸の体で抱きしめようとするのを、

「ほっといて」

とじゃけんに突きとばした。初めてのことに、堂は、全くどうしたらいいか分からない。

彼女は立ち上がっていった。目にはいっぱい涙が出ている。

「あんたが悪いんじゃないけれど、急に男なんか大嫌いになってしまったの。あんた悪いけど、ここの掛布団一枚持って行って、長椅子のほうで寝て。私一人でこれからゆっくりシャワーをあびながら思いきり声を出して泣いたら、このベッドで眠るから、絶対近づいて肩に触ったり、中へ入ってきて体をくっつけたりしては駄目よ。そんなことをしたら、もう探偵局は解散で、どこかへ出て行ってもらうわ。そしたらあんたなんか、五日もしないうちにご飯を喰べられないで、飢え死にしてしまうんだから」

「はい、そうです」

「だったら、おとなしくそこで一人で眠るのよ」
「はいそうします」
堂四郎はたとえ十七歳年上で、しかも東大法科出の輝かしき学歴があっても、今のところ彼女に見捨てられたら、一食も食事を口にすることができない。人間、三日以上の絶食は無理だ。
「承知しました」
おとなしく、ソファのほうへ行って横になった。
一人でシャワールームへ入った祐未子は、そこで思いきり、声を出して泣いてから、まだ泣きじゃくりながら、ベッドへもぐりこんだ。
「可哀そう。田丘雪江ちゃん可哀そう。あんな浮気男に。そうだったの。ああ女なんて、何て哀れなのだろう」
一人で悲しげに呟く。よほど盗聴機で聞いたことが、ショックであったようだ。
そのうち、ベッドからいきなり大声でいった。
「こら、堂局員！」
びっくりして堂が目をさます。
「あのう、何でしょうか」
「なぜここへ来て私を抱かないんだよ」
「それはさっき局長が、厳重に禁止されましたことで、私は単なる雇人の身でありますから」
「さっきはさっき、今は今。私がこんなに悲しがっているのにほっておくなんて、何ておまえは、気がきかないんだよ。早くこい」
あわてて彼がベッドへ入って局長を抱きしめると、
「いいかい。堂四郎局員。おまえが私を捨てるか、捨てなくても知らん顔で並行して他の女の子をこのようにして、抱いたらどうなるか分かってるかい。生かしちゃおかないからね」
そう恐ろしいことを言いながら、しっとりと甘えるように体をこすりつけてきた。
さっきのイヤホーンの盗聴以来、どうもこの気まぐれ令嬢は、全く精神のバランスを失ってしまったらしい。

狂おしいほどの勢いで堂の体にすがりついた。

5

午前七時四十五分ちょうど。パルサ・マンションの前の車寄せに、局長が運転するベンツがすーっと入ってきた。やはり三人は待っていた。ただし本当にベンツに乗ってくるかどうか半々と思っていたらしい。女史は改めて、驚いたように見ていた。

堂が扉をあけた。

「どうぞ」

運転席の局長は、一晩中泣いた後らしく、少し瞼だけは腫れぼったかったが、思いきり泣いて、そのうえ情熱のほうもいつもの二倍も三倍も激しく燃焼させたので、表情はわりと晴れ晴れとしていた。ちゃんと推理も整い方針ももう決まっていた。

それに比べて、後ろの席の真ん中に坐っていたタレントの相原こずえは、顔色は青く冴えない感じだった。まだこの前の席にいる二人については何も知らない。少し警戒するような声できいた。

「この人たちだーれ。いつものハイヤーの運転手さんたちと、違うようだけど」

女史がす早く答えた。

「これからの五日間は、連続ドラマの撮影が終わるまでは相原先生のタレント生命にとっても、またテレビ旭日の今年度の営業実績を確保するためにも、大変な重大な時期なのです。それで、一日でも先生がお仕事をお休みにならないように、テレビ旭日から、毎日この二人がお迎えに来ることになったのです」

「そう、何だか囚人みたい。まるで私のこと信用ないのね」

彼女はごく投げやりにいった。もうどうでもいいような感じであった。

その気持ちは祐未子には分かっていた。

しかし今は何もいうべきときではない。それに、

現在の立場は、単なる、スタジオへの運転手だ。
黙々として、ハンドルを握っている。そろそろ車が混んでくる。
「いつもの道と違うかもしれませんが、すいた道を選んで行きますから」
そういって、一度、新宿のほうへ出て、市谷のほうから、赤坂へ出るお堀端へ出た。少しだけ遠回りだ。途中で大きなビルの前へ出た。
ふっと後ろの三人が黙りこんだ。
そのビルは八階建てだが六階に、今、相原こずえが所属する芸能プロの事務所がある。そこはぴったりと窓がとざされ、看板だけがいたずらに賑々しくかかっている廃墟のような感じさえあった。運転しながら局長はそのときチラとバックミラーを見た。
真ん中のこずえは、下をうつむいている。
ほんの一瞬見ただけではっきりは分からなかったが、胸の前で、ぴったり両手を組んで、目をつぶり一瞬何かを祈っている。
たしかに反応はあった。
女史は横を向いて、にがりきっている顔をしている。堂は何も知らないから、
「おや、ビルの前の芝生に、線香がたってますよ。女の子が三人ぐらいでしゃがんで祈ってますよ。前がカステラ屋だけど、あんな所で線香たてられたら、カステラに匂いが入って売れなくなるんじゃないかな」
とのんびりした声でいう。突然、後ろのタレントがわーっと声を上げて泣き出した。
祐未子は左足でクラッチを踏む代わりに、どーんと、堂の足を踏みつけた。
堂はは っとして気がついて、言わなければいいのに、またよけいなおしゃべりをした。
「ああそうか。どうもこの景色どこかで見たことあると思っていたら、週刊誌で見たんだ。あの田丘何とかというお嬢さんタレントが飛び下り自殺したビルだ。うんたしかにそうだ」

たまりかねて、局長が注意した。
「堂局員、よけいなおしゃべりはつつしみなさい。相原先生は、その人と仲好かったのよ。ショックを受けて泣いてるじゃないの」
堂もやっと気がついて黙りこんだ。
赤坂の通りへ出て外堀沿いに、溜池へ回り、かなり遠回りだったが、結果的には時間は早く、アークヒルズの、全航空ホテルの駐車場に入った。五人はそのまま地下のエレベーターからテレビ旭日のスタジオに入った。
それまで心配してスタジオの入口で落ち着きなく待っていた、吉田部長はほっとした顔で近よってきて、友人の堂四郎を抱きしめ「堂君、ありがとう。さすがに東大の同級生だ、よくやってくれた」と、くり返し、くり返し、感謝の言葉をのべていた。堂にとってはこの事件は全く事態を知らされないままに、進行して行き、実のところ彼は何一つ役にたっていない。やたらにオーバーに感謝の言葉をのべる昔の同級生に、一体何といって返事していいか分からずに立ちすくんでいた。
スタジオ係のフロア・ディレクターが、台本を持って、相原こずえを迎えに来た。
付人とマネージャーが一緒についてスタジオに行こうとした。
石島局長はいった。
「台本のスペアあったら、一部ここへおいて行って。ああそれから、ちょっとご相談があるから、部長とマネージャーさんは、私に三十分ばかりつきあってくださいませんか」
フロア・ディレクターはポケットにつっこんであった台本を一冊若い祐未子に渡し、
「代わりは、スタジオに行けばいくらでもありますから」
といって、それよりも一刻も早くタレントを化粧室へ連れて行くことのほうが大切なのか、付人と一緒に両脇から囲むようにして案内して行った。吉田

部長がたずねた。
「それは急な用なのかね」
「至急の用です」
「そこの待合室か、コーヒーショップではどうかね」
「できれば誰にも聞かれたくないのですが」
何となく不安そうな顔をしだした女史にかまわず、きびしい口調でいう。
「じゃー、第二本読室を、午後から別なドラマで使うつもりで押えてあるからそこに行こう。三十分だけでいいんだね」
と部長は念を押して、先に立って廊下の奥のまるで迷路のような道を歩き出した。
本読室はテーブルがあって、十人ぐらいがそれを囲んで台本を読んで、セリフの練習ができるようになっていた。スタジオ同様の厚い扉がしめられると、絶対に外に声が洩れない。
局長と堂局員が並んで坐り反対側に吉田部長とプロダクションのマネージャー女史が並んだ。
まず石島局長はいった。
「大急ぎで四人で台本を検討しましょう」
部長が少しムッとしていった。
「台本はもう充分に検討している。あなた方探偵局に、番組の内容や、演出面までのことを頼んだ覚えはない」
「そうなれば……」
といきなり石島探偵局長は、岸本加代子のような大きい目をギョロリとむいて、二人を睨みつけた。
「……あなた方お二人は、もしかすると殺人罪か、少なくともその幇助罪を構成します。堂局員、その罪は」
堂が即座に刑法の条文を答えようとしたが、部長がそれを遮った。にがりきった顔でいう。
「言われなくても分かっておる。私も堂君とは同じ法科の出身だ、三年以上の懲役だ。それで台本の検討と、殺人罪とは何の関係があるのだね」

「ともかく、あの番組には、必ずこずえさんは高校生として運動用のブルマーで、体操したり、バレーボールをして、床にひっくり返ったりする場面が出てきます。それを全部今からカットしてください」
「なぜだね。その場面は、この番組の中で最も人気があるハイライト部分になっている。睡眠薬ののみすぎで胃を洗滌したぐらいで、人間は死にやせん。今日もぜひやってもらうつもりだ」
怒りを満面にたたえた口調で吉田部長はいった。祐未子も、真っ赤に激して、大きい目で睨みつけるようにいった。
「じゃー、部長は本当に何も知らないで、ただ、あの子が睡眠薬で自殺を計り、いびきで付人が気がついて、早目に処置して体内のものを吐き出したので助かった、と思っているのですか」
「それはそうさ。そう報告されたら、そう思うより仕方ないじゃないか。ただ私だって何も知らないわけじゃない。相原が（この場合は呼びつけにして）なぜ自殺しようとしたか分からないわけじゃない。ばかな奴だ。××になんか惚れよって」
と、これはもう石島局長が考えもしなかった男性タレントの名をいった。局長がもし、この探偵という仕事についていなかったら正直に、あの人がーと大声をたててしまうところだったが、そこは局長らしく、表情にも出さずに納めた。
「部長さん。ともかくその場面の撮影はこれからの五日間は全くカットして、もしどうしても必要なら、過去のビデオを再構成してはめて使ってください」
そう答えながらも今きいた男の名前の意外さのショックから立ち直るのに、かなりの自制力を要していた。昨日、二人が同じ男が原因で事件を起こしたという事実を知り、まだ男の名前まで分からなかったのに、あんなに男に対する憎しみが湧き起こり、泣けてきて仕方がなかった。あのときもし今の男の名を同時に聞いていたら、泣くどころでなく怒りのあまり、すぐ飛び起きてその男の家に爆弾をほ

うり投げるか、自動車ごと体当たりして、一緒に炎上してしまうかもしれなかった。

その男はつい最近、日本でトップの可愛子ちゃんタレントの愛を獲得して、盛大な結婚式をあげ、今、全日本のファンから、祝福され羨ましがられている、幸せの真っ最中の男だったからだ。やっと声が落ち着くといった。

「部長、いくら睡眠薬ののみすぎのいびきが大きくても、あのマンションの扉では、隣りの部屋には聞こえませんよ」

「うん、言われてみるとそれもそうだなあ」

「もし、今日、ブルマー一つで飛んだり跳ねたりの撮影を強行したら、確実に下半身を血に染めて、ひっくり返りますよ」

いきなり部長は、マネージャーに聞いた。

「それは一体どうしたことなんだ。もう相原は妊娠しているのか」

女史は必死にいった。

「私は、何も知りません。ただがっかりしたような顔で帰ってきて、疲れたといって、早目にベッドへもぐりこみ、気がついたら睡眠薬をのんでいたのです」

その女史のほうを冷たく鋭い目で見ながら、祐未子はいった。

「堂局員。刑法の二百十五条をいってごらん」

堂はすぐ答える。

「はい。『第二百十五条　婦女ノ嘱託ヲ受ケ又ハ其承諾ヲ得スシテ堕胎セシメタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ処ス』です」

部長は立ち上がって、マネージャーの胸元を摑んだ。

「何ということをしたのだ。昨日マンションで勝手にやったのか。それでは、金の卵を、オムレツ喰べたさに潰してしまうようなものじゃないか」

マネージャーは黙っていない。

「でも仕方がなかったのです。あの子は昼間一人で

医者に行きこの事実を知ると、あくまで強気で、新婚の家庭にのりこんで、相手を奪いとってやるとか、あるいはFかもう一つのFか、Eの雑誌のカメラマンを呼んで事実をすべて打ち明けて決着をつけると言い出したのです。それよりはまず既成事実を無くして諦めさせて、あの子の逆上を喰い止めるのが先だと思ったのです。もしこの五回のドラマの放映前に、そんなスキャンダルが洩れたらうちも困るけれど、テレビ局のほうも大変なことになるでしょう。私としては双方のために最善の方法を取ったのです」

そうマネージャーは逆襲に転じてきた。まさに窮鼠かえって猫を噛むの勢いがあった。

「そうか。ともかく、ブルマーではね回る場面は中止だ。すぐ伝えてくる」

部長は飛び出して行った。

そこで、祐未子は残った女史をきめつけた。

「あなただって女でしょう。少しは女の子の体のことは考えてあげてよ」

「それは分かってるんですが」

「これで出血多量で死んだら、殺人罪は間違いないわよ。病院でやったんじゃないから言い逃れはきかないわよ、誰が中絶したかすぐ調べられる。いくら、プロダクションのお抱え医者だって、いざとなると、医師免許を取り上げられるのが怖いから、何でもしゃべってしまうわよ。マンションに呼ばれていったら、すでに睡眠薬を飲まされて深く眠っていた少女がいたので、念のため、腰椎にだけ麻酔を打って、当人にきかずに勝手に中絶してしまったって」

「何でそこまで、分かっているのですか」

不思議そうに見るマネージャーに、盗聴機に組みこんであったカセットテープを取り出して渡した。

「これを裁判のときに持ち出せば、いつでもあんたたちを有罪に持ちこめるのだけど、私は刑事でも、検察官でも何でもないから、人を罪にするつもりはないわ。これから、タレントの生命や体を大事にす

ると約束するならこれを差し上げるわ。もうこんなことしないで、あと残り四日間は体に差し支えないように働かせるのよ」
「必ずそうします」
「ではあたしたち、もう部長さんに会う必要もないから、これで帰りましょう」
そういって、二人は部長には改めて挨拶もせずにテレビ旭日のビルを出た。

6

板橋への道を走りながら、堂は運転している局長に話しかけた。
「一見華やかに見えるけど、芸能界って、ひどい所ですね」
「まあ、あれで普通なのよ。それより私としては絶対に許せないのは、××よ」
と例の男のタレントの名をいった。
「つい最近幸せな結婚をしたばかりなのに、続けて二人も若い女の子に手を出して、一人は自殺、一人はもう少しで死にそうな目にあわせて、そこらを歩いていたらこの車でひき殺してやりたいわー」
といった。また涙で双眼がくもってきたのを拭きながら、元気を取り直すようにしていった。
「今回の事件はあまり赤字が出なかったら、取りあえず、飛び下りた子に百万円、今日の子に百万円ずつのお香奠とお見舞金を送っておきましょう。今回の事件のことをちゃんと税務署に話せば彼らも人の子、必ず、必要経費として欠損に入れることを認めてくれるわ」
最後はやっと、局長も十九の娘の明るい笑顔に戻っていた。

〈第五話〉　殺人証明書売ります

1

もともと六畳一間に、小さな台所兼用洗面所を置いて、押入れをつけただけの、木造アパートだ。かつては、戦争が終わった直後の焼け出されて家のない人から見れば、まるで御殿を仰ぎ見るような、すばらしい住居だったかもしれないが、そのままほうりっ放しで四十年、今では、東京中で一番のオンボロアパートと、アパートの住民も見回りに来る消防署の視察員も区役所の住宅課の役人も挙って認める存在になっていた。

もちろん広い東京だから、もっと古い戦争前からのアパートもある。しかし、それは材料がましだからまだしっかりしている。終戦後の何もない時代に粗悪な材料をよせ集めて作った物だけに、今となっては、戦前の建物よりも破損や老朽化がひどいのである。

それでも十月に入ると、ルームクーラーをストップすることができて、一階の右側の並び部屋の住民たちはほっとした。

一階でも右側の三番目の部屋だけが、黒ずんだ木材の上に白いペンキを塗られて、一応洋室風にベッドと机が入れられ、扉に『気まぐれ令嬢・移動探偵局』の看板が下げられている。その部屋に探偵局が入った初夏のころから、つい先月の終わりまで続いたきびしい残暑が終わるまで、窓に取りつけられたクーラーは、彼ら二人が部屋にいる間動きっ放しであったからだ。そしてその間中、右側の並びの五つの部屋の住民は、機械の震動で、根太や柱が分解して、今にもアパート全体が崩壊してしまうんではないかという恐怖から逃れられなかった。

しかし文句は言えない。その部屋の、住人は、アパートの持ち主の令嬢であったし、持ち主のほうは、こんなボロアパートはさっさと取りこわして、一刻も早く駐車場にでもしたいと思っているからである。

彼らに出て行かれたら、アパートは無くなってしまう。

朝の十時には、さすがに、若い二人もベッドから起きて、新聞や、ラジオで、その日のニュースを収集し整理をしている。

局長はまだ十九歳の石島祐未子。局員はもう三十歳も後半にかかるまで万年失業者だった、堂四郎一人だけだ。

三大紙の三行広告欄の、二わく分の六行を取り、太い罫線で囲い、

『どんな困難な事件でも喜んで引き受けます。調査は入念、解決は迅速、ただし費用は格安、平凡な事件はお断わり』

それに電話番号と住所を書いてある。

毎日のように、さまざまな依頼があるが、夫の素行調査、結婚の相手の調査、手形取引上の財産や企業の信用状態の調査などはすべて断わってしまう。そこが気まぐれ探偵局の気まぐれのところである。

「私の所は、そういう調査は営業品目に加えておりません。どうかよそにもっと上手な所がありますから、そちらへ」

もっともこの探偵局は、お金を儲けるのが目的ではない。彼女の父親の巨大な財産を税務署から守るために、ベテランの税務署の係が、帳簿を見て納得できる形の赤字を年間一億円出すのが設立の目的である。そのためだから面白そうな事件で赤字の出そうな仕事しかやらない。

起きてから入ってきた電話を二つばかりやんわりと断わり、新聞を全部読み終えて、早い昼飯代わりに、近くの寿司屋から、上ちらし丼でも取ろうかと考えたとき、ふと、扉についている郵便受けに手紙がほうり投げられる気配に気がついたのである。

堂四郎がすぐに取りに行って、郵便を持ってきた。業界加入の誘い、新型電話機のカタログ、小型無線機の性能の説明書、そんな印刷物に交じって、一通の封書があった。まるで小学生が書いたような稚拙

な文字で、

『気まぐれれいじょう　たんてい局長様』

と宛名が書いてあった。興味にかられてあけてみた。本当に小学生が書いたものだった。

「私は、いばらぎ県の山の中の、さくらだ村にいる、小学六年生の女子です。私には、父と母と、二人の弟がおり、私が一番のお姉さんです。ところが父が今年のお正月に、東京の地下鉄工事に出稼ぎに行くといったまま家を出ました。父の名は吉村三太と言います。

これは毎年のことですので、あまり気にしていません。三月の終わりに、たくさんのお土産を持って帰ってくるからです。でも今年は帰ってきません。

四月に入ってやっと帰ってきたのですが、そのときは箱に入って、白い布に包まれた、『おこつ』になっていました。母には知らせと共に、少しお金が入りました。

その当座泣いてばかりいましたが、すぐに母はとても元気になって、夜になると、新しく買った洋服を着て、白粉を塗り、香水をつけ、自転車で町まで出て、スナックで働いてます。

ときどき男の人が泊まって行きます。先日もその男の人と隣りの部屋でくすくす笑ったり、いやらしいまねをしたりしました。それは、私ももう生理がありますから何か分かりますし、私にとってはどうでもいいことなのですが、先日とても変なことを聞いてしまったのです。毎夜来る人は違うのですが、その夜来た男の人が、お母さんをくすぐって泣かせたり、意地悪していじめて怒らせたりした後で、

『おめえ口惜しくないのかよ。あんな中田なんてケチな野郎に亭主を殺されてよ。それとも保険金の中から、千万円も分けてもらってちゃんとスナックを出させてもらったから、別に恨みも何もないのかい』

『そんなことないわよ。でも山の中で伐採中に突然倒れてきた木の下敷きになった事故死だっていうも

ん、仕方がないじゃないの。それにお互いに掛けっこしていた保険金の中から千万円も分けてくれる人は今どきいないわよ』

そう言ってました。どうかたんてい局長様、父がもし殺されたのなら犯人を捕まえてください」

よほど頭がいい子なのだろう。

しっかりした文章で書いてある。

すぐその手紙を堂四郎に見せ、

「この事件を引き受けるかどうか貴方が考えなさい」

といった。

堂は読んでいたが、

「やりましょう。これは殺人事件です。それでいて警察などは、絶対に取り上げない事件です。もう保険金も半年ぐらい前に下りてしまっているし、証拠となるものが女の子の夜の寝間の盗み聞きだけとしたら、寝呆けたといっても通用してしまう。このまま闇から闇へ葬り去られようとしているということが、我が社の探偵心をかきたてます」

「うん、そうね」

「もう一つ、この女の子では、恐らく金は、全くといってよいほど持っていないでしょう。これがいい。他の所に頼めない。それでうちの局を頼ってきた。最初から赤字は仕方がない。しかしその赤字は、税務署も納得できる、堂々たる赤字だ。そこがいいです」

「じゃ、やりましょうか。その茨城県のさくらだ村というのが、どのへんにあるか調べて」

堂はすぐ、大型の道路地図を取り出して調べ出した。

「ああ、水戸からもっと奥へ入った山間部です。福島県境に近い」

「何時間ぐらいで行ける」

「道の混みようによるけど、四時間も見れば充分じゃないですか」

「じゃ、お昼は途中の埼玉県あたりのドライブイン

でとることにして、今すぐその桜田村という所へ行ってみましょう。そしてその子に会って、もっと詳しく事情を聞くことにするわ」

二人は早速仕度にかかった。

こういうときは局長と局員と二人だけの小さな局だ。話が簡単だ。

局長は外出用のやや短か目の皮のスカートに薄い羊皮のジャンパー、堂はつい先だって新調したばかりの秋用のすかっとしたスポーティな仕立ての背広で、外に出た。ベンツが、でーんと玄関口をふさいでいる。この車に乗って二人に出ていってもらったほうが、アパートの出入りに便利だから住民は歓迎する。子供たちが三、四人、手を振って見送る中を、五年前に二千万円で購入したベンツは、すぐに滑らかに動き出した。

2

途中の国道四号のドライブインで、二人は、カツ丼と、別にお刺身や生卵を注文して、がっちり腹に入れると、すぐにまた水戸へ向かって走り、そこから福島県境の山間部へ向かった。

山間へ入っても、都市化の波の勢いの凄まじさを語るかのように、小さな町はビルが建ち、道路が舗装され、プレハブや、モルタルではあるが、近代的デザインの家が並んでいた。その一つ八祭町をすぎてさらに入った所に、桜田村があった。

初め、八祭町で、道行く人に、桜田村の子供たちは、小学校の勉強にここまで来るのかと、訪ねた。立派なベンツがいきなりこんな山の間の町まで入ってきたのにびっくりしている町の人は、初めは祐未子のいう意味がよく分からず、二、三度聞き返した後で答えた。

「ああ、桜田村の人ですか。小学校六年までは、みな村の分校で勉強します。中学生になってから、町へ出て来て勉強します」

と答えた。

それでそのまま、また二人は町の中の北へ向かう街道をとって、山間部へ入って行く。

途中は谷間があったり、森林が続いたり、かやぶきの農家も残っていたりで、昔風の山村の趣きがあった。

しかしその奥のやや平地に開けた山間部の村へ入ったら、それが急になくなってしまった。すべてが奇妙にけばけばしい色の新建材の新しい家ばかりだ。屋根のスレート瓦も、赤や紫、中には黄金色なんて、およそ色彩感覚のバランスでは考えられないような色もあった。全体にこの村の家が示しているのは、この村には一度札束が舞った過去があるということだ。

「きっと上流にダムでもできて、村の人の仕事がそれで駄目になった。政治力のある議員がこのあたりの出身者にいて、大臣か何かになったとき、故郷の選挙民への手土産代わりに大量の補償金をばらまいたので、村が大いにうるおった。ついでに金の有難みも覚えた村人の気風まですっかり変わってしまった。補償金が無くなった後では、贅沢に馴れた村人はみな出稼ぎに出るようになったという筋書きが目の前に見えるような村のあり方だわね」

そう石島局長はいった。これまで親の庇護の下で、単なるお嬢さんとして暮らしていたときは、それほど世間の人の考えや、欲望に直接ぶつかることはなかった。しかし探偵局という、ささやかながらも一つの企業として、世間の人々に接すると人間が僅かの金のため、どれだけ激しく憎悪を燃やし、醜く相争うかがよく分かってきた。

堂は隣りの席で、村の様子を眺めながらいった。

「人間いったん、生活の基準を上げてしまうと、下げるわけにはいきません。ところが貰った金は、一日一日稼いでいく金と違い、使っているうちにすぐ無くなってしまいます。今は村の人は慢性の欲求不満になっていると見ますね」

このごろは食事もたっぷりとり、相応の月給も入ってきて、住居と女性はきちんとついていて、ずっと人間なみの生活をしているから、かつてのやせたひょろ長いルンペンのような面影は全くない。一度しゃべると、さすがに東大出の教養は口調の中に自然ににじみ出ていかにももっともに聞こえる。説得力というのは、やはり風貌や服装、体格なども、影響があるとよく分かる。いい大学を出て、コンピューターのような頭脳を持っていても、体が栄養失調で服装が貧弱では、その論説は何の力も持たない。

車は小学校の前に止まった。

ちょうど、授業が終わりかけて、大勢の生徒がどーっと校舎から出てくる。車から下りた祐未子はそのうちの一人を手招きして、す早くポケットから、チョコレートを出して手の中に握らせてからきいた。

「吉村令子ちゃんという子を知っている」

「うん」

その少女はうなずく。

「ここへ呼んできてくれる」

「いいわよ。でももう一枚チョコレートほしいなあー」

とちゃっかりいう。すでに都会の人から、何かにつけて物を貰う習慣も身についている。ここへ何かの利権を求めて、一時期かなり大勢の都会人が出入りした証拠でもある。

黙ってもう一枚渡しながら、村中を襲っている精神的荒廃はかなり深いものと思わないわけにはいかなくなった。

さっきの友達につれてこられた吉村令子は車を見て、すぐ感じたらしく、

「気まぐれれいじょうたんてい局さんですか」

ときいた。

「ええ、そうよ」

「新聞を見たら、どんな大事件でも安く解決してくれると書いてあったので、お頼みの手紙を出したの

です。私あんまりお金ないので」
と、まるで中学生か高校生かがいうようなはっきりした言い方でいった。
「どのくらいお金を持ってるの」
別に料金を取るつもりはないが、この少女の気持ちを試すためきいてみた。
「二千三百円持ってます。去年と今年のお正月のお年玉を貯めたのです。それ全部出しますから、お父さんを殺した犯人を見つけ出してください」
「お金は後で犯人が見つかってからでいいわ。大事なお金だから、それまでちゃんとしまっておきなさい」
「うん、枕もとの瀬戸物の狸の貯金箱に入ってるわ。今まで誰にも教えたことはないわ」
「じゃー、それは大事にしまっておいてね。おうちはどこ……」
「ここから山の中へ二十分ばかり歩いて行くのよ」
「じゃー乗せて行ってあげましょう。途中、いろいろとお話聞かせてね」
「うん、それじゃ乗せてね」
堂が後ろの席に坐り、その少女は嬉しそうに運転席の横にちょこんと坐った。
車は山の中の道に向かって走り続ける。石島局長が早速に質問する。
「あなたがなぜ、お父さんは事故で死んだのではなくて殺されたのだと考えたか、その理由を教えて」
「うん。お父ちゃんはお正月に出稼ぎに出るときに『今度は東京のビルの工事だから、安全のほうもしっかりしているから、けがすることもないだろう。しっかり働いて、四月には元気で帰ってきて、こちらの山仕事をやるからね』と、そういって出たのよ。だから、私、四月に戻るものと思っていたし、死んだと聞いて、お母さんがあわてて死体を見に行ってお骨を取りに行ったときも、東京へ行ったとばかり思っていたの。そしたら、お母さんが行ったのは津軽という所だって」

「津軽といったら、青森県だわ。東京とはまるで反対の方向だわ」

車は山あいの道が大きく曲がった所に来た。

「ちょっと車を止めて」

とその少女がいった。それから、

「そこの横道へひっこめておいて。今、お母さんが、自転車に乗って出かけるところだわ。この探偵のこと、私、お母さんに内緒にしているの。お母さんは下の二人の弟のお母さんだけど私には本当のお母さんじゃないもの。知られたくないの」

それで少女が、自分の貯金全部はたいても父親の死の秘密を探ろうとする熱意が分かった。母の言葉を信用していないのだ。

車を止めてじっとしていると、若作りの派手な衣裳をつけた母親が大きな日除け帽をかぶり、自転車に乗って前を通りすぎていった。

令子という少女と、局長の祐未子、局員の堂の三人は、少女の家へ着いた。やはり今はやりのプレハブに新建材でできた、なかなかの家であった。大分前に補償金が入って建てたか、出稼ぎでせっせと金を送ってきたのに違いない。そしてそのように生活の規模をあげた結果、今度は出稼ぎに出ない限りは、その生活を維持できなくなった。繁栄の中の悲しい姿が分かる。

玄関のふちや、鴨居などは、緑色、軒下の線は、黄金色のペンキがけばけばしく塗ってある、全体が玩具のような感じの家に入っていった。

小学六年生の令子が鍵をあけた。半年もたっても家にはまだお骨が置いてあるらしい。線香の匂いがする。令子が案内で、堂と局長は家の中へ入りこんだ。

たとえ令子の案内でも、何となく他人の家屋に無断で侵入している気分になる。つい心配になるが令子がそれを悟っていった。

「大丈夫よ。お母さんは夜中まで帰ってこないわ。帰ってきたときは、ベロンベロンに酔っ払っている

か、男の人と一緒かどちらかよ」
　少女は平気でいう。そして骨壺だけおいてある白布の台の前に、きちんと坐ると、手を合わせて拝み、
「お父さんの仇は必ず取ってやるから安心していてね」
　といった。まだ少女ながら、おそろしくしっかりしていて、それが無気味であった。
　ついでに局長も堂もこの見知らぬ男の遺骨に向かって手を合わせてから早速、いろいろと調べてみることにした。
「お父さんの死んだところがどこか書いてある知らせの手紙か、電報がない」
　と祐未子がきくと、すぐに少女は一枚の葉書を出した。速達の赤い線が引いてある。
「これ、この間お母さんがいったん捨てた物を内緒で拾って隠しておいたのよ。ここから通知が届いたのよ」
　といって見せてくれた。
『旦那だば、昨日、倒木の下敷きになって腰を打って即死しただ。すぐ来てくれ。電話なんどうまくかかる所でないだから、取りあえず葉書で急に知らせておく』
　そして表の宛名の横に、津軽郡北小泊村、木材伐採現場から、と誌してある。
「分かったわ。私たちこれから夜通し走って、その津軽郡の北小泊村の伐採現場へ行ってみるわ。あなたは、私たちが戻ってくるまで、ここへ来る人や、近所の人へも、誰にも私たちが来たことをしゃべってはだめよ」
「うん、誰にもしゃべりません。その代わり、本当にお父さんを殺した犯人が誰かきっと調べてください。お願いします」
　丁寧に両手をついて頼む。あまりにしっかりした健気なふるまいに、涙もろい石島局長など、ついほろりとしてしまったほどだ。

3

現在まだ東北自動車道は、とぎれとぎれではあるが、一応青森まで通じている。

帰省のラッシュの時期とも外れているので、いったん道路へ上がると走行は楽だ。しかしそうなるとベンツの走行性能の良すぎるのも困った。少しアクセルを踏めば、すぐ、百、百二十と、制限速度をオーバーしてしまう。

パトカーのほうは、ふだんより走行車が少ないから、ゆっくり狙いをつけて追える。本気になって競争すれば、パトカー一台まくのは何でもないが、無線で他のパトカーに連絡されて出入口を封鎖されては、とてもかなわない。それで、アクセルに用心しながら、指定の速度より、せいぜい十キロオーバーぐらいに止めて、とろとろとじれったくてしようがないような走り方を続けた。

途中で一度、公衆電話で事務所の留守番電話に何か入ってないか、調べたが、どこからも電話は入ってない。

石島局長は運転しながら堂にきいた。

「こうして私たちが、もし、あの子のお父さん殺しの真犯人を見つけるとするわね。しかし私たちは、その犯人をどうして警察へ突き出すの。司法権を持つ巡査以外は、逮捕できないのでしょう」

「ええそういやー緊急の現行犯以外は制服を着た一般巡査でも逮捕できないですよ」

と堂は他人事のように答えた。

これは刑事訴訟法で決まっているから仕方がないのだ。司法警察員という指定を受けた、特別の警察官でなくては逮捕はできない。つまりそれが世間でいう刑事で、それ以外の警官は交通や警備はやっても犯罪捜査には当たらないのだ。まして警察官でもない一般民間人の探偵が、犯罪の捜査に当たることは絶対許されないことになっている。

捜査すること自体は、相手に何も影響をあたえないから、秘かにこちらが勝手にやることはできても、その結果として逮捕や、訊問はできない。無理にそんなことしたら、暴力団のやることと同じになってしまう。警察には国家を背景にした力がある。それだけに使うほうも慎重なのだ。

堂がいった。

「つまり、我々が正義だと思っても、それが本当に正義かどうかは、公平な第三者が両方の言い分を聞いてみなくては分からない。そこに警察という存在がいる。依頼人に金で頼まれたほうが正義を振りかざして、相手を勝手に逮捕したり監禁したりしてはいけないからですよ」

「そうよね。まあーこれからゆっくり事件を調べて、やはり伐採所側がいってきたとおり、単に大木が倒潰して、誤って下敷きになっただけの事故なら、これはこのままあの女の子に『やっぱりお父さんは向こうが言ってきたとおりの事故で、どこにも調べ直すところは無かったのよ』といって、諦めさすより他はないわ」

広い東北道はこのへんになると対向車も少ない。しょっちゅうしゃべっていなくては、ふいと眠くなるときがある。

盛岡まで着いたときに、ドライブイン兼、仮眠所へ入って、四時間ばかり休憩することにした。食堂の隣りの大きな座敷に炬燵みたいなものがおいてあり、トラックの運転手が四方から何人も足を突っこみ、枕に頭だけのせて眠っていた。

こんな所は、初めてであった。祐未子と堂は、カツ丼にビールを一本取り、軽く酔った勢いで、そのまま抱き合うようにして眠ってしまった。

みな疲れているのか、このアベックドライバーをからかう者もいない。

明け方になって、洗面を終え、頭もすっきりして、そのドライブインを出ようとしたら、いよいよ出発にかかるトラックの運転手たちが車の回りで、

「ベンツだぞ」「どこの人が乗ってきたんだべ」「こりゃ、安くねえ車だべな」

と五、六人取りまいて噂していた。

それに二人が乗りこみ、しかもまた女のほうがハンドルを取ったのを見て、

「お姉ちゃん、どこさ行くのかね」

と一人がきいた。

「津軽郡北小泊村という所よ」

そう祐未子がいうと、トラックの運転手の中にそこを知ってるのがいた。

「そら、えらい山の中だ。半島の突っ先をずっと行かねばなんねー。途中が林道になって一般の自家用車だば入らねえ。麓の村に林業の出張所があるから、そこで伐採の現場へ入るジープに乗せてもらったらいい。でもついでがねえと、現場まで入りたがらねえがね」

「私たち頼んでみるわ。もし費用がかかるなら、お金を出してもいいの」

「いや、そんなことでなくて入りたがらねえと思うよ。その理由は今はちっと口では言えないがね」

と、その運転手はなぜか口をにごした。

別にここで強いてきいてみても仕方がない。すべては現場に行ってきいてみることだ。どうしても伐採の現場へ入れなくても、あの小学校六年生の女の子の父親が亡くなった真の原因が何か知ることができればいいのだ。

ともかく行ってみよう。

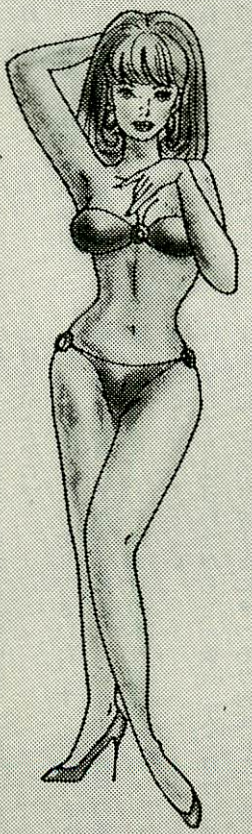
四時間の睡眠ですっかり元気を取り戻した祐未子は再びベンツのハンドルを握った。まだ十九歳。若いのだ。一度眠れば簡単に疲労がとれる。

車は東北自動車道をいったん盛岡の先で下り、一般道を八甲田山の山麓を回るようにして迂回して、秋田の横手側からのびている高速道のインターチェンジに乗り、青森の終点までまた走った。

そこからは左の海岸線へ回るようにして、太宰治の故郷の金木村、十三湖などで知られる、日本

FREE PH

Ge



CALL
LADI
THEM

Ca
1-90
If
1-80

の秘境といわれる津軽半島に入っていった。北小泊村というのは、その半島でもさらに先のほうにある。すべて回りを山に囲まれた全くの秘境、本土でも最尖端の村である。

十一時ごろやっと辿り着いた。

村の中央に、『北小泊村　林業伐採現場事務所』という看板がかかった小さな事務所があった。早速そこへ入った。

「こんちは」

まるで都会をそのまま見本で持ってきたような、皮のミニスカートに、皮のジャンパーの少女が入ってきたので、中にいた三人ばかりの従業員がびっくりして見上げた。

今は都会も地方も、昔ほど服装は違わず、村の女の子も結構、派手な服を着ている。しかし普通のとき、それを着て歩くことはないし、どこかさりげなくというふうに着こなすことはなおさらできない。ふだんのときは、ブラウスに黒いスラックスという姿が多い。それでなくては日常の仕事に不便だ。それに若い娘は大体、都会に出ていってしまって、ほとんど村に残っていない。

びっくりして見ていた三人の中の一人が、

「何でがすかね」

とまぶしそうな目をしてきいた。すぐ後に、きちんと背広を着た堂が入ってきた。いくらか彼らの態度が改まった。どこか東京の本社関係の偉い人でも来たのかと思ったらしい。

しかしそうは言いながらも、彼ら三人の目は、祐未子の短い皮のスカートにきっちり包まれたひきしまった腰や、その短いスカートから、むき出しになっている、やや長目の脚を喰いつくように見ている。こんな上玉の都会の女をこれまで見たことはないし、この林業の仕事をしている間は女房は遠い国元においてあって、彼らはここ何カ月も、女そのものに接していない。いきなり現代の青春を爽やかに表現するような、若いピチピチした女体に目の前に

立たれたら、他のことはもう頭に入らなくなる。

「私たち、北小泊村伐採現場へ行きたいんです」

「何でそんな所へ行くのでがすかね。山の斜面の木を次から次へ伐り倒しているだけで、面白くも何ともねえ所でがすよ。それに山の切りたった所でがすから、平らな地面は一つもありもしねえでがす。いつも斜めの所に立ってるだでー、地下足袋でもはいてなけりゃ、足の踏ん張りようもねえでがす。ふくらはぎがくたびれちまって、五分とたっていられねえべよ」

もう一人がいった。

「お嬢ちゃんも、そこにいる旦那さんも無理だべな。そんな恰好じゃ。すぐ木の枝や草にひっかかって、ボロボロになっちまうし、それにお嬢ちゃんはなおのことといけねえ。スカートが短すぎる。中にはちゃんとパンツか何かははいてるでしょうがね、それでも山の伐採の連中は、もう二カ月も三カ月も女っ子抱かねえでいるだ。そんな少し下へ回れば、パンツが覗けそうなスカートをはいていたら、誰も落ち着けやしねえ。すぐ下へ回って覗き上げようとするだべな」

祐未子はうなずいた。これが探偵局を始める前のただの令嬢だったら、『まあ、男って何ていやらしい』とただ単純に憤慨するだけだったろうが、今では探偵という仕事を通して人間の生きて行く姿をたくさん見てきた。

そしてそれが男のどうにもならない悲しい習性だということはよく分かっている。二つの肢の間にある、貝の身に似た肉塊は女性である限り、誰でもみな等しく持っている。しかしふだんは決して男性の目にふれることのないように、きちんと布でおおっている。どんなに短いスカートをはいていても、真下から覗いても見られないようにしている。それが分かっていながら、恥も外聞も忘れて、喰いつくように覗きこむ。その男の一途な心が哀れだ。

「ここで作業服は借りられませんか」

「余分の作業服はいくらでもありますよ。貸せと言われたら喜んで貸しますだよ。ヘルメットをかぶり、タブダブの作業服で行けば、今ほど山の男の心はそそりたてねえでがしょう。でもやはり駄目だ。あんたらを送って行く途中の作業員が、山の途中の道の、あたりに誰もいねえ所で、急に車を止める。もう警察にふん捕まっても、死刑になってもいいから、一生一度の思い出として、あんたにおっぱめたくなったら、どうします。そちらのひょろひょろ旦那さんでは、とてもその勢いは止められない。何しろ死刑になってもいいからやりてえという気持ちでは、どんな力でもかないっこねえでがすべよ」

しゃべっている男は、自分の気持ちが今まさにそうでもあるかのように、ごくりと唾をのみこんだ。他の二人も両側からまるで飛び出しそうな目で眺めている。

決して脅かしているのでなく、人間の気持ちを正直にのべているだけだ。それだけ女性の問題は、出先の仕事場では、切実な問題になっているのだろう。

4

彼ら自信が自分の気持ちの高ぶりを押えるようにいった。

「ともかく、お茶っこでも一杯飲んで、気持ちを落ち着けて、ゆっくり相談しますべ。私ら東京の人と違って、おせじはなんも言えねえでありのままをしゃべってしまうけんど、どうか気を悪くなさんねえでくだせえ」

「いえ、お気持ちよく分かりましたわ。そんな所へ短いスカートで行くなんて、私自身も迂闊だったんです」

「まあ、長いズボンをはいて、ダブダブの上衣を着ても、女は女です。腰の丸味も、おっぱいのふくらみも自然に分かってしまう」

そう言いながら、茶碗に渋茶をついでくれた。

「まあー、日本は法治国家だから、みんながお互いに法律を守って生きて行くように馴らされている。アメリカやソ連よりも、その点国民は上等だと言われてるべ。多分、もしかすると何もなくて、またこの事務所へ戻ってこれるかもしんねえ。でも山の中の現場の飯場ではそうはいかねえ。きっとその夜は、みな酒を喰らって、大喧嘩が始まる。するとこの間のようなことが起こるだべ」

ふいと一人が口をすべらせてしまった。すぐ祐末子が何気なく聞く。

「この間のことって」

「いや、けが人が少し出たことでこれは外の人には言えないことでがす。どうか忘れてくらせい」

そういって頭をかき、しばらく口の中で東北人らしくもぐもぐ言っていたが急に、

「それであんた方は、なぜ北小泊村へ来なさったのですかね。ここは滅多のことでは、外部の人がやって来る所じゃねえす。まして、この村の奥の四つ滝山の伐採現場は、木こりか猟師(またぎ)でなければ、全く用のない所でがす。それに、まだあんた方が、どんな仕事の方か聞いておりましねえだが」

「いや、これは失礼しました」

すぐ堂が答えた。

「私たちはちょっと、人に頼まれまして、調査事務をやってましてね」

「すると警察とか、探偵とか、それとも保険の査定とかでがすか」

「まあーそんなことに近いと思ってください」

「そうかねー。私ら、みんな田舎者だからね、嘘は上手につけねえ。誰も聞きにこないのなら、自分から何やかやしゃべることはないんけど、何か聞かれたら、正直に答えますだ。あんたらのためにも、ここで何を調べに来たか打ち明けてくだせえ。ここでお答えしたほうが、無理に山に入って、山の男の心を荒だてて、中で変な事件を起こさせるよりはいいんでねえでがすかね」

そこをずばりと切りこむように、祐未子はいった。
「その変な事件というのと、多分今日の私たちが来た調査の目的と関係あると思います。私たちが来たのは、吉村三太さんのことよ」
「やっぱり」
そう言って三人はうなずいた。
「私たちの知ったことをお話しするわね。吉村三太さんがここで亡くなった。そしたら、お友達がお互いにかけていたたくさんの保険金が下りた。それはそれで悪いことではないのよ。ちゃんと事故で死んだ人が掛けただけの保険金をもらったのなら」
その間も、祐未子はじっと三人の表情を見た。一生を伐採の現場で暮らしてきた人々には心の中の思いを押し隠すなんてまねはできない。正直だ。
決して単なる事故ではないのだという気持ちが表情に浮かんでいる。これは攻められると思った。
「お友達の中田さんて人いたでしょう。お互いに保険を掛けあった人」
「ああ啓さんね。ずっと一緒だったが、奴がおっ死ちんですぐ、遺骨を届けるといって山を下りたまま帰ってこねえ」
その三人の反応を一言、一言テストするようにして、祐未子は話を続ける。
「その中田という人と、吉村さんのおかみさんで、吉村さんの住んでいた故郷の桜田村のそばの八祭町という所で、今スナックを出して、二人は仲好くやっているわ」
「やろう、うまくやりやがって」
一人がつい呻くようにいって、隣りの人に『しっ！』と押えられた。
「保険金は、村から……出稼ぎに出る前に、おかみさんと、その中田という男の人が、お互いに四千万円ずつ掛けておいたらしいのよ。しかしこれは、吉村さんも同じだから二人ともお互いに事故が起こったら、一方が受取人になろうということで、まあ！、そのことでは、中田という人間だけを責められない

けど……」

三人の中で、いつも祐未子たちに話しかけていた、主任らしいのが、積極的に話しだした。

「それで、お二人の聞きたいことは、どういうことですか」

「つまり、遺骨が茨城県の桜田村の家に戻ってきたときに、中田という人が夫人と一緒に遺骨を運んできたのです。その前にここへ吉村さんの夫人が夫の死体に会いに来たのでしょう」

「ええ、来ましたよ。警察官立合いのもとで、もう納棺されていた死体に会い、それから火葬場につき合いました。たしかにそれまで中田は、ここへ、吉村さんと一緒にやって来ていつも仲好くしていた。四つ滝山の作業現場へ行くときも、山の上の飯場でも二人は一緒にいた。しかしそう古い仲ではないらしい。私らが聞いたところでは、東京の地下鉄工事現場で働いているとき、故郷が近いということで知り合ったらしいでがすよ」

もう一人がいった。

「北小泊村の伐採へ来るときも、中田が誘ったらしいだべ。東京でてれてれと働いていたところで、労務者では、大した金になんねえ。どうせ体が資本で稼ぐなら、短い間にたくさんの金になる山の伐採現場のほうがいいといって連れてきたらしいだよ。ただし、金になるだけあって、危ないことも多いから、お互いに受取人になって、保険を掛けようと言い出したらしいよ。吉村さんは、女房も子供もいることだし、もしものことがあっては大変だというので、中田のいうことを聞いて保険に入ったらしい」

もう一人がついに堪りかねていった。

「遺骨や、吉村のかあちゃんと一緒に中田が、山を下りて帰ったときから、どうも怪しいという噂が山の中であったでがすよ。かあちゃんは、死ぬ前に自分でも後妻だと言ってたがね、十五も若くてなかなかべっぴんで、夫が死んだ山の現場を見たいといって入ってきたときは、お嬢ちゃんみたいなスカート

でなく、ちゃんと黒いズボンに、男の作業シャツを着て首や頬は手拭いできちんと巻いて入ってきただがね、それでも山の男たちは、久しぶりに嗅いだ女の匂いで気が荒れて、どうにも納まらなくなり、その夜かあちゃんが山を下りた後、斧や棒を持っての喧嘩がおっ始まって収拾がつかなくなり、二日酔いや、けが人で、翌日はまる一日仕事になんなかっただよ」

「結局おらはこの事件も、そのちょっとお色気ある小ぎれいな若いかあちゃんが原因とみるでがすよ。亭主に写真を見せられて、他人の物が急にほしくなったべな」

「事件というと」

さっとまた切りこむようにして、祐未子はきいた。このへんはいつのまにか、刑事のような調査能力を、祐未子は備えてきてしまっている。

「まあ、死に方だな。おらの口からうまく言えねえでがすが、本当はかなり怪しい」

急にその口調は親しみをました、ざっくばらんのものになってきた。さっきの警戒心のまじった態度はかなり薄れている。ここで一気に核心に迫るときだ。

「材木の倒れるとき下敷きになったのではないのですかね」

「それはそうだがね、……たしかにそれに違いないがね……」

そう言いながら三人は顔を見合わす。ややあって主任らしいのが思いきっていった。

「それには違いないがね、本当はかあちゃんが遺骨をとりに来た。だからかあちゃんに骨を渡してしまえば、中田は後、また山の伐採現場へ戻ればいいんで、もしお互いに保険金をかけていて、この際何千万円か入るのならそれはそれで、おとなしく現場で働いていれば、保険会社から支払いの通知が来て、そのとき改めて取りに行けばいい問題でがすよ。それを他人のかあちゃんと一緒に、その亭主の遺骨を

抱いていそいそと山を下りて、それから二度と戻ってこねえ。そこでみんなはどうもあの日はおかしかったと言い出したんでがす」

「それに今きくと……」

もう一人の男が、憤慨の口調で言い出した。

「中田とそのかあちゃんが一緒に、そいつの故郷の村の近くでスナックを出しているという。こうなるとますますおかしい」

祐未子はそこで初めていった。

「私は警察でも何でもないので、皆さんにご迷惑のかかるようなことは決してしません。だから、吉村三太さんがどんなふうに死んだか話してくれませんか」

三人はしばらくお互いに顔を見合わせていたが、やがてうなずき合うと主任らしいのがまた話しだした。

「二人だけで少し離れた所で作業していたんで、本当にちゃんと見た者はいねえだがね、二人で弁当の後、下から買ってきた牛乳を一本ずつ飲んだというだよ。するとどういうわけか、吉村さんだけが、急に腹が痛くなったと言い出してね。しかし山ん中では、救急車を呼ぶわけにもいかねえし、医者もやってこねえ。どうしようもないので、『少しそこへ休んでろ』といって山の斜面の平らな所へ寝かしただよ。雪の間からもう草や笹が顔を出して、少し雪を掘るとすっぽりかくれて外からよく見えねえ、その代わり現場監督が見回りに来ても、見つからねえですむ場所だ。そこで吉村さんを休ませて、中田の奴が一人でチェーンソーを握って大木を切っていたとき、運が悪いことに急に大木が倒れだした。予定より早く倒れたし、その方向も中田が思っていた方向とは全く違った方向だったらしい。ちょうどその幹の中ほどにある部分が、腹を押えて、苦しんで寝転んでいた吉村さんの体の上に倒れかかったんでがす。大声で中田は『そこどけ危ねえ、倒れる！』と叫んだ。その声は、たしかに近くで働いていた、他の作

業員の耳にも届いている。こういうことは山の作業にはよくあることで、この倒木でのけがをとがめだてしていては、仕事にはなんねえ。そこでみながその声を聞いたことで、中田作業員は過失なしということに決めたでがすよ」

「医者や警察は調べに来たんでしょう」

「それは死体を、おらたちで下へ運んでからだ。駐在と、村から来た医者が、山のずっと下の麓で死体を調べたが、その原因はおらたちの言うことを聞く以外はない。そこでふいに倒れかかった木の下敷きになり、足が草にもつれて逃げることができずに死んでしまった、ということで片がついた。しかしおらが今考えるのにはその牛乳が怪しい」

「私もね、そう思った。そしてわざわざそこへ寝ろと、体を横たえて休む場所まで指定したのも何とも怪すい」

てんでに言い出した。祐未子がきく。

「その牛乳瓶はどうしたの」

「彼が山の中へほうってしまったらしく、別に探すつもりもないが、まだ見つかっていない」

「私がもし山へ入って、山の人々が荒れるのなら、私はここの事務所で待ってますわ。いくら頑張っても私が女であることはもうどうしようもないのですから」

それから懐ろから財布を出した。

「別に私は金でみなさまを何とかという気持ちはないのですが、お力をお借りするのには正当な料金をお支払いしたい。今から山へ入ると、何時間で出てこれますか」

「そうだな入るのに二時間、出るのにやはり二時間の四時間だな」

「ここに三十万円あります。牛乳瓶を見つけるのに一時間ほどとして、五時間後にもう一度ここへ戻ってこれますね。その間私たちは村のお医者さんや駐在さんを回って話を聞いてきて、またその時間にここへ来ます。もし牛乳瓶があったら拾ってきてくれ

ませんか。隠し持って行かない限り、木の根っこか、草むらの中へきっと放ってあるはずです」
「分かりました。何こんな事務所、五時間ぐらい閉めておいても何ともないでがすよ。三人できっと牛乳瓶を見つけてきますよ」
「牛乳瓶を見つけてきても、こなくても、労力は同じです。ですからこの三十万円、最初に差し上げます」
と一人に手渡した。
「へえーっ、仕事する前にくれるんですか。もしかするとその前に、これを持って三所カ原の町のほうに、女がいるスナックがあって、そっちへ遊びに行ってしまうだが……いいかな」
「みなさま方がそうしたいのなら、それでも仕方がないと思います。つまりはそれは吉村さんに運がなかったことで……」
「いや、今のは冗談でがすよ。私らだって、やって来て、ほんの一月もたたないうちに、若いきれいなかあちゃんを残して死んでいった、あの人の好い吉村さんという作業員が可哀そうなのは同じですよ。それでは待っていてください」
三人は五時間後の再会を約束すると、事務所を閉め、山用のジープに乗って飛び出して行った。

5

再び夜中の東北自動車道をベンツは走って行く。後ろの席にはビニールの袋に包まれた空の牛乳瓶が二つおいてある。
一つには何も匂いは残っていない。しかし一つの瓶は、三人の作業員の中に、農家出身の男がいて、すぐ匂いを嗅いで、
「底にこびりついている牛乳のカスの中に、農薬の匂いがするな。パラコートだ。こんなもの、農協に頼めばいくらでももらえる薬だんがね。しかしこいつを飲めば、すぐ腹痛を起こし、ひどいときは、三、

四時間で死んでしまうだよ。もっとも死ななくても腹が痛くて起き上がれない」

そういった。半年後でも匂いはちゃんと残っていたのだ。

これで祐未子はすべてを読んだ。ノートを出すと、「誰か、このノートに牛乳瓶は四つ滝山の木材伐採作業場で、吉村三太さんが木の下で死んだ所のすぐそばに捨ててあったのを拾った物であることを書いて、その後に三人で名前を書いてハンコを押してくれませんか」

初めは三人は顔を見合わせていたが、すでに三十万円もらっている弱味がある。それに三人とも別に悪いことをしているわけではない。これがもし殺人事件なら、むしろ犯人発見に協力したことになる。田舎の駐在など、現場で直接刃物で殺し合いでも起こらない限り、わざわざ事故死と決まった者を取調べに改めて山へ入ってくるようなことはしない。三人同時の証言というのは大事なものだ。すぐ書いてくれた。

今、その証明書にも当たる書類は、彼女の皮のジャンパーの内ポケットに入っている。

また盛岡の、炬燵のある大きなドライブインで、四時間ばかり仮眠することにした。

祐未子は毎日体を拭くか、お風呂へ入り、下着をすべて取り換えなくては気持ちが悪いのだが、この際、もう一日我慢することにした。

明日は何としても、中田の罪を暴き、自供に持ちこみたい。たとえ、自分たち探偵局に司法警察職員のような逮捕権は無くても、犯人をぎりぎり追いつめることはできそうだ。

疲れきって早くも背広のまま寝入ってしまった堂の長身の体に、すがりつくようにして祐未子も寝ていた。

こうすると、ときどき入ってきて炬燵に足をつっこみ仮眠しようとする運転手が、やたらにそばへよってこない。

せいぜい、
「何だ男がいるのか。見せつけるない」
といやみの一つも言うぐらいで離れて行く。出発するときは端正だった堂のワイシャツも、いささか形が崩れ、無精ひげものびてきたが、ここはもう一日か二日の我慢だ。
しかし黙って自分について来て協力してくれる堂が急に、全身からいとしくなって、うす暗くしてあるのをいいことに、しっかり抱きしめて、頬ずりした。少しのびた無精ひげが痛い。だが気持ちよい。
堂もふとその身じろぎで目をさまして、やはりしっかりと抱きしめ、誰にも見つからないように唇を押しつけてきた。大きな炬燵の回りには一杯飲んだ後の運転手が酔いがさめるまで、ぐっすりと熟睡している。気がつかれては大変だ。いきなりのキスに『ずるい』と文句を言おうとしたのを黙って押して遠ざけることだけで我慢した。
明け方すっきりと目をさました。
再び桜田村へ戻るまで三時間半の行程だ。
冷たい水で顔を洗い、お手洗いをしっかりすませ、またハンドルを取った。いくら疲れても、堂は運転ができないのだから、代わりにハンドルを握らせるわけにはいかない。
今度帰ったら、伊豆大島の十八日間合宿の運転免許学校に通わせようと思った。
車は快調に走り出した。
後はどうして、その犯人の中田の前に、パラコート入りの牛乳瓶を突き出すかだ。
東北自動車道を快適に飛ばしながら、祐未子は、堂にいった。
「この事件は多分、今日で終わるでしょうけどその最後の幕切れが大事ね。証拠をどうやって犯人に突きつけるかが、腕の見せどころね」
すると堂はいった。
「局長をさしおいて、局員のぼくが意見を申しのべるのは何ですが……」

「何言ってんのよ。二人しかいない探偵局で、いちいちそんなことを言っていては話がすすまないじゃないの。何でも言ってみなさい」

「問題はあの少女から最初にやって来た手紙にあると思うのです。少女の手紙を、ぼくはすべて覚えてますが、母の所へ毎夜やって来る人は違うが、その夜来た人が、『おまえ口惜しくないかい。その中田なんてケチな男に亭主が殺されて』とはっきり言ってます。それに対して、『亭主が事故で死んだんだもの今さらどういったって仕方がないじゃないの。それにお互いに掛けっこした保険金から、千万円も分けてくれるなんて人、今どきいないわよ』と母親が答えたと、まあ、その少女は、一生懸命手紙で書いてきています」

「そうだったわね。私もよく覚えているわ。バッグの中にはまだその手紙が入ってるけれど。それで」

東京へ向かう車はそろそろ増えてくるが、途中のかなり手前で下りるのだから、別にその混雑を心配するほどのこともなく、まだ悠々と運転していられる。

堂が自分の考えをいった。

「つまりそれだけはっきり書かれているということは、少女の頭の中にしっかりしみついているということで、多分それは小学校六年程度の頭の働きでは、いくらしっかりしているようでも、一度や、二度寝呆け眼の中で聞いたぐらいでは定着するはずのことではないと思うのです。つまり、吉村の夫人は、亭主が死ぬとすぐ、町でスナックを始めた。スナックでは、新しい亭主然とした中田がいる。二人は山で伐採した仲間だ。中田が多額の保険金を取った。そのうち千万円を夫人に渡してスナックを開業させた。それで町には噂がぱあっと広まった。それは多分、その中田が殺したんだ。中田と女房とはできていたんだ。そういうことでしょう。それがふだんから、その令子という女の子の耳に入っているから、自然、意識の底にしみついて、いざ手紙に書くとなると、

はっきりそれが、まるで耳もとでちゃんと聞いたことのようにすらすらと書けたのでしょう」

「なるほどそうね。私たちあの子があまりにしっかりしていたのでつい対等のように考えていたけど、やはり小学校六年の女の子だものね。そのことも考えてやらなくちゃーね。でも中田と共謀したのか、あるいは死んでしまって千万円もらって諦めたのかは分からないけど、ともかくスナックでは、中田が亭主然として納まっている。それだとすると、桜田村の家のほうに、夫人が毎夜違った男をひきずりこむということが、私たち女の心理としては、どうしても理解できないのだけど」

堂は世間の実際生活の知識は全くない、一種の生活上の無能力者だ。

ところが代わりにこれまで、何も仕事もせずに、古今の探偵小説、捕物帖を読みあさってきただけに、人間の心理の動き、特に犯罪者の心の動きについては、驚くほどの洞察力を示す。

「ああそれは何でもないことです。つまり、世間に、中田と、夫人とは、できていないということを示すためです。中田は千万円を分けて店を作ってくれた。オーナーでもあり、夫の親友でもある。しかし二人は肉体的には何でもないのだ。だから私は夜ごと違う男を自分の家にひきずりこんで遊ぶ。もちろん、いくらかの金を稼ぐ目的もあるが、それだけでなく、若い身空で夫に死なれて肉体が夜になると淋しくて仕方がないのだ。ただし中田とは一線を画して交わっていないのだ。……とそういう点を強調しているのです。しかし強調しているだけにかえってそれは怪しいともいえます」

「そうね。何でもなければ、わざわざ強調する必要はないんじゃない」

「そうですよ」

白河のインターチェンジが近づいてきた。福島県側から、山を越えて、茨城県の八溝町へ入って行くコースを取るつもりだ。

「つまり少女がそういうぐらいですから、これはひょっとしたら、もう警察の耳に入っているかもしれない。町の駐在へ言ったところで、彼らでは動きようもないかもしれません。私が県警へ直接ゆさぶりをかけてみましょう」

とひょいと堂がまた大きいことをいった。

東大の法科出とはいえ、それだけで県警が動くほどに、日本は甘くない。

「そんなことできるの」

と、不思議そうにきく。

「ずっと音信不通ですが、総理府に入った友人がいるのです。今、国家公安委員会という部局のかなり上のほうにいると聞いたことがあります」

「国家公安委員会って、自動車の免許証出す所でしょう」

「それはそうですが、免許証はほんの仕事の一部です。警察庁という全国の警察を管轄する所のさらにその上司に当たる官庁です」

「そんなにえらい所なの」

探偵局長としては恐ろしく認識不足のことをいった。そして一層心配そうにきいた。

「そんなにえらい所のえらい役人さんなら、電話なんかに出てくれないでしょう」

「いや、我々は同期の卒業生の仲間のことは公私にかかわらず、まず何でも相談に乗るということになっています。当人が机にいて電話に出ないということはありません」

「東大って妙な学校ね」

それは法科の一部の緑会という団体だけの伝統であるが、そこは堂は面倒くさがって、説明を省いている。

緑会へ入るのは法科の中でも特別に成績がよかった、末は大臣か博士かという期待されたエリート学生だけであることを説明するのが面倒くさかったからだ。インターチェンジにかかると急に堂は、

「テレホンカードありますか」

ときいた。
車がインターチェンジを下りて料金を払うと、そのすぐ横のたまりに、カード電話機が並んでいた。そこなら長い話ができる。
「ええあるわ」
車を電話機の所へ寄せると、すぐ歌手の中森明菜の可愛い顔がプリントされたカードを祐未子は財布から出した。堂は下りてカードでかけ出した。五百円分、まるまる使わずに残っていたカードが、ほとんど無くなるまで堂は何か話を続けていたが戻ってくるとき、指先で丸を作った。
そしてまた運転席の横に坐りこむといった。
「地方の各県警への連絡の主任をやってましたよ。ともかく茨城県警へはすぐに電話を入れておくそうです。茨城県警へも、途中で部下が、並行して連絡をとっていて、すでに八祭町のそのスナックは、マークされていて県警でも内偵しているそうですよ。今日は、夕方七時に開店と一緒に刑事を派遣して、客として知らん顔して坐らせておくから、そこで、伐採所の三人が書いた牛乳瓶の取得証明書を出して、牛乳瓶をカウンターの上においてくれとのことです。そのときの中田の顔色や様子を見てただちに二人の刑事が逮捕状を執行するといってましたよ」
「そこまで信用してくれたの」
祐未子には、むしろ国家公安委員会の高級役人が、無条件に堂のいうことを信用してくれたのが不思議であった。
「まあ、ぼくたちは、お互いにエリート意識の固まりでね。つまり一般の人間とは違うんだという強烈な誇りがある。はたから見たらもうどうしようもない鼻持ちならないところでしょうが、それだけに内心は、日本を動かしているのはおれたちだという連帯感があり、お互いの言動には絶対的な信頼をおいてるのです」
「そんなものなの」
改めて堂を全く違う人間を見るような目で見直し

た。ベンツは再び山の中の道を走り、山間にある八祭町という町へ、福島県側から入って行った。

6

八祭町からさらに入った桜田村の小学校がちょうど放課後になるころ、一昨日と同じ場所で、ベンツは待っていた。

授業が終わった。大勢の生徒が校門を出てきた。友人とおしゃべりしながら出て来た令子は、ベンツを見つけると、友人とさよならして、一人で駆けてきた。

息をきらせながら祐未子にとびつくと令子はきいた。

「お父さんを殺した犯人が分かった？」

「ええ分かったわ。でもお母さんは何も今度のことは関係ないのよ。だからこれからはお母さんと仲好くできる」

令子は少し不満そうにいった。

「なーんだ。お母さんは捕まらないの」

「だってお母さんが捕まったら困るでしょう。弟さんだって二人いるし、令子ちゃん一人ではご飯喰べさせたり、洋服買ったりしてあげられないでしょう」

そこでしぶしぶとうなずく。

「令子さんはね、お母さんを助けて、二人の弟さんの面倒を見てあげるの。お母さんは違っても、お父さんは同じなのだからね」

「分かりました」

「これでお父さんの仇は討ってあげたのだから、これからはそのことを忘れて、いい子になり、お勉強をいっぱいするのよ」

「うん」

「じゃーもう忘れてね。犯人は今夜捕まるからね」

そういって、家まで少女を送って別れた。

少し時間を潰して七時になるのを待って、ベンツ

は八祭町の中心に戻った。
町の真ん中のかなりの広い通りに、『マドンナ』というしゃれた名前のスナックがあった。
七時五分をすぎたころ二人は入った。
すでに四、五人の客が入っており、入口の所をふさぐようにして坐っていたのは、明らかに刑事であった。
カウンターにいた、三十五、六の、かなり厚い化粧をした女が、
「いらっしゃーい。本当に今日は初めてのお客さんが多いわ。どうぞそこへ」
と席を示した。客の一人が、
「おかみさんのサービスがいいから、遠くまで評判になってるだっぺよ」
とまぜ返し、客がどっと笑った。すでに客の間には、酒気が行きわたっていた。
「お嬢さん何になさいます」
「水割りをダブルでちょうだい」
「はい、すぐに」
奥に坐っていた白いバーテン服の中年の男が早速作る。年ごろからいっても間違いなくこれが中田だと見当がついた。
おかみは始めて、祐未子のしゃれた皮のジャンパーと、このへんでは見かけられない、都会的な美貌に気がついてきいた。
「お嬢さん、どこからいらっしゃいました」
「東京からよ」
そうあっさり答える。
「ご親戚でもこの山の中にいるの。それともセールスか何か」
「ええまあー商売ね」
みなが珍しそうに聞き耳をたてている。
「どんなご商売」
「いろいろな証明書を売ってるの」
「えっ、証明書っていうと」
「たとえば他人に分からないようにある人を殺した

人がいるとするでしょう。するとその犯人に分からないように現場を調べ、たしかに殺したという証拠とその証明書を揃えて、被害者の人に警察に持って行けるようにして、お売りするの」

みな変な顔をして祐未子を見ている。祐未子はバッグから牛乳瓶をとり出して、証明書を取り出し、「この瓶にはパラコートが入っていて、半年前に一人の男が殺されたの」

いきなりナイフを握ってバーテンが祐未子にとびかかろうとした寸前、その手は二人の刑事によって押えられ、すでにもう手錠が冷たく喰いこんでいた。

〈第六話〉　灯油を買った処女

1

台所でその新聞を見た瞬間、

「きゃーっ、勿体ない」

と、探偵局長の祐未子は妙な悲鳴を挙げた。

そこには砂浜にむしろをたてて囲っている写真が大きく出ている。中が覗けないようになっているが、回りに警官や医師が立っていて、そのむしろ囲いの中が物々しい事態になっていることを示している。記事が凄かった。

『教祖に仕える若き処女七人が後追い自殺』

『灯油をかぶり生きたまま全身黒焦げ。いずれも二十代から三十代までの美貌の処女ばかり』

これまでなら、こういう記事を見ても彼女の口から、

「可哀そう」とか「なぜこんなことをしたのでしょう」

という言葉は出てくるが、勿体ないなんて生々しい言葉が突然出てくるはずはない。何しろまだ十九歳。それも日本で最高の、場合によっては今度は比呂宮のお妃様が同級生から出るかもしれないという学習院大学に学んでいる、本当の意味でのご令嬢だ。

もし税務署が、江戸開府以来の資産家である父の財産をまるで悪事の結果の収益のようにして狙うことがなかったら、まだまだ普通のお嬢さん学生として、世間の荒波にもまれずに楽しい学院生活を送っている身分である。

最近のまるで狂乱ともいってよい土地価格の暴騰によって、帳簿上だけはみるみるふくれ上がった父の不動産の資産から、世間相場並みの地代、家賃を取って行くと予想すると巨大な収益が自然に計上される。

こういう予想収益に対しての税務署員の反感は凄まじいもので、要するに全くの不労所得と見る。それでも、四、五年前までは、まだ多少の遠慮があっ

て、全額の八十%ぐらい持って行けば満足していたのだが、最近は収入が一億を越すと、国税八十%、地方税十六%、次年度の予定納税三十五%で、百三十%取るようになった。祐未子の父の祐太のように全く他の収入のない人間は、資産が自然に収入を挙げることにより、毎年、三千万円という独力ではとても稼ぎ出せない大金を、別に全収入に足して払わなくてはならないことになった。

このままだとジリ貧で先祖から受け継いだ大事な財産を毎年減らして行くことになる。何とか一億円の収入に対して別な仕事で一億円の赤字を作って、収入をゼロにして、税金を減らし財産を守っていかなくてはならない。

まだ学校が残っているのに、彼女は父を助けるために休んで、自ら『気まぐれ令嬢・移動探偵局』という名の探偵局を作り、一年一億の赤字作りに精を出さねばならなくなった。

幸いに東大の法科出の協力者を得た。三十も半ば越しているが、これまで寝転がって探偵小説を読んでいるのだけが大好きで、現実の生活では全くの無能力者のため飢え死にしそうになっていたのを社員とした。ところがこの男は推理を要する場面になるとなかなか役にたつ。

そしてもう一つ役にたつことは、父の持ち物のボロアパートの六畳一間を改造して、探偵局を作り、仕事もそこでやり、夜も事務机の左側をぎりぎりで占領しているシングルベッドで、この男と二人でぴったりと体を寄せ合うようにして寝ているうちに自然に分かってきた。

十年前に大学を出たとき一度結婚したが、二週間で女房に逃げられ、以後男盛りを一度も女体の甘さを味わうことがなかったこの協力者の堂四郎は、これまでの慢性栄養失調状態が回復するとともに、急にそのほうの能力が発揮されてきた。

だからその新聞を見た日の前夜も、ほとんど終夜といってよいほど二人は燃え狂い、十九歳の娘の身

としては、まだまだ数年も早い、女の悦びの絶頂感を、続けて四度も五度も休みなく体験していたのだ。

朝起きてトーストを焼きながら、狭い台所でふと読んだ新聞に、その記事が出ていた。田舎の鉄道の踏切番をしていて、それほど風采の上がらない、ただのおっちゃんの教祖に、七人もの美しい処女が、その清純な肢態が黒焦げに炭化するまで焼いて後を追ったという紙面を見たときは思わず、悲鳴と共に、勿体ない、という言葉が口から出てしまったのも仕方がない。

あんな楽しい思いを知らないでむなしく死んで行く彼女ら自身の生命も惜しいし、多くの男たちをこれから何人も楽しませる体を持ちながら、その義務を果たさないで死んで行く悦びの供給体としての女体も勿体ないと正直に思ったのだ。

「私ならどんなことがあっても、自分で生命を絶つようなことはしないわ」

そしてちらと相棒を見た。やせっぽちで、のっぽで、ずぼらで、年もとっているし、あまりハンサムでもないし、生活能力ゼロでいいとこはちっともないが、毎夜、夜通し何度も可愛がってくれるところだけはいい。

パンツ一枚で起きて、台所兼用になっている、小さな水屋へわりこんできて、顔を洗いだした。

荒川の土堤で拾ってきたときは、やせてガリガリの体をしていたが、このごろは喰い物に不自由しないし、いわゆるテン屋物だけでなく、ときどき祐未子が栄養たっぷりの料理も作るので、肩から背中にかけて、筋肉がついてきた。そうなると、ハードボイルド探偵のマイク・ハンマーとはいかないが、マイク・トンカチぐらいには見えてくる。

紅茶をカップに入れながら、その背中を見て、また抱かれたくなったが、それを押えて我慢した。そんなことで背中にすがりついたら、またベッドへ入ることになり、いつまでも起きられない。

「そうだわ」

その思いを頭の中で振り払うようにしていった。
「今日、あたし久しぶりに学校へ行ってくるわ。このままだと単位が足りなくなって、卒業できなくなるから」
もう秋も半ばすぎて朝晩はかなり冷えこむというのに、パンツ一枚でテーブルに坐ってすぐトーストに手を出した相棒の堂四郎は、急に母親に置いて行かれそうになった幼児のような情けない顔をした。食欲もなくなったらしい。トーストをおいて、
「それでぼく、どうしたらいいのですか。お昼になると、またお腹がすいてきますが」
といった。
「ばかね。電話で上寿司でも天丼でもどんどん取って喰べればいいじゃないの。子供じゃあるまいし。それでも東大法科出でしょう」
そう叱りつけて、久しぶりに通学用のスーツに着換えた。

2

久しぶりの学校であった。もっとも探偵事務所を開いてから、ずっと欠席していたわけではない。
暇な日には午後から出たり、午前中から出て、昼前に戻ったり、あの古い大きなベンツで、週に二度ぐらい出て、何度か辻褄を合わせていた。専攻学科は国文学、それも自分の直系の先祖である清少納言の著作の研究で、論文を書いている。
石島家には、先祖から伝わる古文書が、奥座敷の納戸に何十冊も秘蔵されており、その中にはまだ学界にも知られていない貴重なものがある。それをそのまま原稿用紙に写しただけでも、卒業単位どころか、我が国の国文学界に大変なショックをあたえて、ただちに文学博士にもなれるといわれている。
大学の教授や、名のある国文学者がもうすでに何人も、その何十冊かの古文書を、一目見させてくれ

と訪ねてきたことがあるが、代々の当主は、
「先祖から禁止されていますから」
といって、絶対に見せない、だからやがて学界に名を馳せたいと思う野心的な教授は、いつかその文書を見せてもらおうと思って、祐未子を疎略に扱わない。
学習院ほどの一流大学でも、一部の教授には彼女は宮様や財界の巨頭の娘と同じくらいに、大事に扱われている。
かなり欠席してもわりと気にしないのも、まず卒業には差し支えないと分かっているからだ。
久しぶりに、校門を入ると、
「やあ、お久しぶり」
「探偵やってるんですって」
「うんと赤字が出てるの」
などと事情を知っている友人たちが、しきりに回りから声をかける。男の子と交じって、合気や柔道、しまいには大きな乳房をブラジャーとTシャツ一枚で包んだだけで、ボクシングまで試してみた彼女はお転婆では大変な人気がある。
ちょっとしたクイーンなみだ。回りをとりかこんで話をしようとする友達が多く、校庭から廊下へ入ろうとしたときは十人ぐらいのグループの中心になっていた。
廊下を賑やかに話しながら教室へ入ろうとすると、国文科の担当教授が通りかかって、
「ああ石島さん。会えてよかった、ちょっと私の研究室まで来てくれませんか」
といった。
これはやはり出席日数が足りなくて、ちょっと注意されるのかと、少し緊張してついて行く。
研究室には、助手の先輩学生が二人、書類の分類やコピーをしている。その奥の教授の部屋には大きなデスクがあり、その前に一応三、四人が話し合える応接セットがある。
そこにお互いに腰かけると何か一言、注意される

のかと緊張している祐未子の前で、教授は深々と頭を下げた。
「どうもありがとう」
「あら、何かしら」
お礼を言われるようなことは何もしてない。不思議そうにきいた。
「堂君のことだよ」
「あら先生は堂さんをご存知なのですか」
「この間、久しぶりに銀座でテレビ旭日の吉田という友人に会ったのだよ」
「あああの吉田さんね。よく知っているわ。二度ほどお会いしたことがあります」
「そうだそうですね。向こうもそんなことをいっていた。あいつはいつも、きれいな女の子のタレントを連れて飲んでいるから遠くのほうから見てもすぐ分かる。それで話しかけたら、『君の所の学生の石島君には大分助けてもらった。それにぼくらではどうすることもできなかった堂君の面倒を、まるまる見てもらっている。よろしくお礼をいっておいてくれ』とのことだった」
「そうだったのですか。でも堂さんや吉田さんは法律学部でしょう。先生は国文学でしょう。どうしてお知り合いなのですか」
「学部とは別に、『推理文学同好会』というのがあってね。そこでの友人で親しくしていたんだよ」
「そうですか。でも先生、堂さんは今、私の探偵事務所ではなくてはならない人材です。いろいろと助けていただいているのは私たちです。滅多なことでは私の個人企業のような小さな探偵局では、東大出の法律顧問などは雇えません」
そこへ突然、電話が鳴った。まず助手が取り、すぐ教授に渡す。教授が、
「ああいるよ。よかった。ちょうど、ぼくと話をしているところだった。うん、すぐ代わる！」
そういって受話器を石島局長に渡しながらいった。
「堂君からだよ。大学で勉強している君を、呼び出

すためにはどうしたらいいだろうという相談で、ぼくに電話をかけてきた。今ここにいるといったら喜んでいた」

代わって取った石島局長がきく。

「どうしたのよ。勉強中なのよ」

「それが事件が起きたのです。急に電話で申し込みが来たのです……」

といって、電話の申し込みの内容を大急ぎで伝えた。全部聞き終わると、

「それじゃ仕方がないわね。そちらへ戻る時間がないから……」

とここは少し声を小さくした。

「……整理タンスをあけることを、今日は特に一回だけ認めてあげますから、下着の替えを三組ばかり出してスーツケースに詰め、ドレスも二着とジーンズにブルゾンも持ってきて、大急ぎで三十分後に目白駅の表に立っていて。もちろん、他の道具も忘れては駄目よ」

そういうと電話を切った。

そして教授には形を改めていった。

「というわけで、事件が起こりましたので、今日はせっかく登校したのですが、これで帰ります」

「どんな事件かね」

「やはり事件というのは模倣性を持つのですね。田丘雪江さんが飛び下り自殺した後、三十人以上もの若い男女がまねして飛び下り自殺したように、今度はつい今朝起こった、教祖の後追い自殺の模倣です」

「そうか、あの若い女性が灯油をかぶった事件だね」

「ええ、今度は四人です。まだかぶっていないのですが、山の上にこもって、これから体に火をつけようとしているのです」

「場所はどこだね」

「それが奈良の生駒山だそうです」

「生駒山……どうしてそんな所の人が、わざわざ君

に……」
「教授、私、すぐもう目白駅へ行って、堂さんを、ピックアップして東雲に向かわなくてはならないのですが」
「分かった。ぼくも学校を休んでついて行く」
「え、かまわないのですか」
「今日はただ会議があって出て来たので、講義はない。明日は午後から二講義があるだけだが、生駒山からなら朝の新幹線で戻れば何とか間に合う」
石島祐未子の返事は聞かずに、さっさと机を片付け肩からショルダー一つ下げただけで、
「さあ、行きましょう」
と彼女の腕を抱えるようにして表へ出た。この人も相当気まぐれだ。
ともかく断わるのも面倒くさい。この主任教授のご機嫌を損じると、卒業にも差し障りができてくる。
仕方なく学生用の駐車スペースへ行き、二人で大型ベンツに乗りこんだ。
車は校門を出た。目白駅の前を通ると、板橋の探偵局から、言われたとおりの荷物を持って出てきた堂が、そこに立っていた。背だけがひょろりと高いから目だってすぐ分かる。
車を近よせながら祐未子がいった。
「事件については私もまだよく分からない点もあるので、改めて堂さんから聞きますから」
車が止まると、いつものように前の助手席へ乗りこもうとした堂が、ふと後ろを向いていった。
「あっ、脇坂じゃないか。どうしたんだい」
かまわず、堂を乗せると、車は環六に向かって走り出す。
「うん。さっき事件があって、あんたに彼女を呼び出してくれと頼まれた。そのとき、電話をそばできいていると、二人の間に、生駒山という話が出た。それで急に興味が出てきてついて行きたくなったんだ」
「そうか。脇坂はあっちの出身だったね」

車はすぐ環六へ出た。関西方面へ向かうなら当然そこで左折して、渋谷方面で首都高速へ乗り、用賀で東名高速のインターに入る。

ところが右へ曲がった。

これでは、東北方面へ向かう道になる。

「どうして右へ曲がったのです」

自分でもワーゲンのゴルフを持って運転する教授が不思議そうにきく。堂が後ろを向いて答えた。

「深川に東雲という飛行場があります。東京湾に近い所です。そこにヘリコプターが待っています。自動車でそのまま行くと、いくらスピードを出しても、どうしても夕方近くになってしまいます。といって新幹線でも、名古屋か京都で乗り換えてから先に時間がかかります。それでヘリコプターが深川にある飛行場にもうチャーターされて待っているのです」

「そうですか」

車は環六の流れに入って、江東から東京湾沿いの飛行場に向かって走り出した。

堂は自分が聞いた事件の概要を話し出した。

「どうも事件は、今朝の新聞に影響を受けて起こったらしいのです。大阪と奈良の間の生駒山系の中に、観音・エホバ・アラー教というかなり欲張った名の宗教団体があって、そこで先月教祖が亡くなった。これまではただ、その追善の供養をごくおとなしくしていただけだったらしいのです。ところが今朝の新聞に刺激を受けたらしく、かつて、四聖女神といわれて、教祖の身辺に仕えていた、四人の美しい娘たちが午前中に町のガソリンスタンドから一人一缶ずつ灯油を買ったのです」

「そうなの」

祐未子も運転しながら堂が脇坂教授にする話を聞いている。さっきは電話であわただしく聞いただけだから事件の本質についてはまだよく分からない。ともかく向こうへ着くまでにできるだけのことは知っておきたい。

「教団のある建物の裏は、高い峯になっているそう

です」

　すると脇坂教授が、意外に鋭い推理を展開した。

「ああその教団は、奈良県側を向いている教団だな。あの生駒山というのは、両方の県境になっている山だがね。奈良県側は比較的ゆるやかな山になっているのに比べて、大阪側は崖が多いので、教団の背後に山の峯があるというと、どうしてもそういう形にならざるを得ない」

「そうですか。……それでともかく灯油を担ぎながら峯の頂上まで彼女らが上がったのを、町の人が発見し、声をかけたら『夕方までお祈りして、夕日の沈むとともに、一人一缶ずつ灯油をかぶって、教祖様のみあとを追います』と答えたそうです」

「それで私たちが呼び出されたわけね。地元の人では説得できなかったのかしら……お父さんや、お母さんのいる人もいるのでしょうに」

「町の役場の文化協会の人から、探偵局に電話があったのですが、それらの人々の話では、全く地元の人々では駄目だというのです。

　四人の娘さんのそれぞれの家族は、必ずしも同じ、観音・エホバ・アラー教ではないけれど、みな宗教に、凝りやすいたちの人々で、地元の何らかの他の教団に入っている熱心な信者ばかりだから、たてこもる娘たちに向かって説得するどころか、『ありがたいことです。立派に殉教させてやりたい』と、下で一緒になって祈っているらしいのです」

　車は放射道路の国道四号線に交叉する所で、今度は都心の日本橋方向にまっすぐ向かう。これが東雲（しののめ）飛行場へ向かうのには、一番早い道だ。

　脇坂教授がいった。

「私の先祖の脇坂家も実は江戸幕府時代、その生駒の一隅に飛び地の所領がありまして、代官がしばしば年貢の徴収に見回りに行ったのですが、いつも人々があまりに信心深く、お殿様よりは、神様、仏様のいうことばかり聞くので、ひどく困ったという記録が残っていますよ」

そう言えば脇坂家は戦前は華族で、それ以前はどこか関西のほうの殿様だと聞いたことがある。学習院には、教授にも学生にもそういう人はたくさんいる。

堂が事件の報告を続ける。

「山の下に集まった人の中には信心深い人ばかりでなく、中には真剣に、自殺を思い止まるようにと、拡声機で呼びかけたり、山へ近づいてそばで説得して、実力で女性を捕まえて、ひきずってきてでも下山させようという人もいるのです。彼らはしきりに呼びかけたり、登って行こうとしたらしいのですが、娘たちもまた負けていず、『もしこれ以上、私たちが教祖を思う静かな祈りを妨げたり、山へ登って来ようとするなら、日没まではとても待てないから、今すぐ灯油をかぶります』と脅かしているのだそうです」

運転しながら祐未子がいった。

「それは大変だわ。一度かぶって、何か紙か布につけた火を近づければ終わりよ。一遍に燃え上がって、手がつけられなくなるわ」

「それで町の人も、説得も、峯へ近づくことも一切やめて、みな峯の麓で待つことにしたのです」

また堂がいった。

「何しろ狭い山地に人口が四万一千人。それでいて、新興宗教の教団が四百三十もある特殊の土地なのです。聖天様ほか観光資源や、国宝の美術品もたくさんある」

「古代からの聖地ですから、町の観光協会や、文化協会も、これで変な評判でも立ったら困る。何とか夕昏れまでに解決を計りたいと考え、たまたま新聞広告で、私たち移動探偵局の『気軽に地方出張致します』の広告を見て、藁にでもすがる思いで、電話してきたらしいのです」

車は日本橋を突き抜けて、東京の下町地帯へ入って行く。ちょっと困ったように、

「これでは私たち、探偵局よりは、むしろ悩み事解

決相談所みたいね」
と石橋局長はいった。
やがて海岸沿いに、広々としたゴルフ場が出てきて、その先に隣接して、ヘリコプターが何台も並んでいるヘリ専用の空港があった。

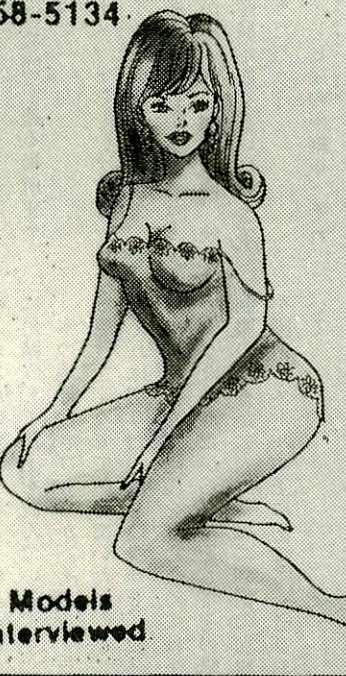
3

空から生駒山系を見ると、たしかに脇坂教授がいったように、手前の奈良県側はゆるやかな登りになっていて、頂上を越えた左側は急な断崖や、坂道になっている所が多い。
ヘリの操縦士も、初めてのチャーターで、目的地がよく分からないらしく、膝の上に地図を拡げて、それを辿りながら飛ばしている。
自分も必死で山系の峯々を眺めていた祐未子が突然、山の頂上を見つけていった。
「あそこだわ。あの峯よ。麓にテレビ局の車や、新聞社の連中が大勢来ているわ」
人々の姿が麓の一画に集中している。
ヘリコプターは、テニスコートぐらいの広さの平らな土地があれば着陸できる。ゲートボールの盛んな土地らしく、峯のすぐ下に、六つばかりゲートボール用の空地が並んでいてその中央に、競技用のゲートや、出発点を無視して直径二十メートルぐらいの丸が、白い粉で描かれていた。
ヘリは上手にその丸の中に着陸した。大勢の人が駆けつけてきた。
三人の中の脇坂教授に向かって、彼らのうちの町の観光協会長と、文化協会長とがまっ先にその名刺を出して、頭を下げた。
「どうか探偵局長様よろしくお願いします」
脇坂は困ったように、
「私は探偵局長ではありません。探偵実務のほうは、そちらのお嬢さんが局長となってやっております」
といった。二人の会長はあわてて、石島局長のほ

うに、
「これは失礼しました」
と名刺をもう一枚出して渡した。
祐未子がそれを受け取り見ると、肩書はそうであるが住所のほうには、それぞれこの町の番地が書いてあり、すぐ横に、一人は、つる屋土産物店。もう一人は、かめ屋土産物店と書いてあった。
どちらもその土産物店の主人が、町に頼まれてやっているのだろう。名刺を受け取ったのが若い娘なので、少し頼りなさそうにして見ている、これらの町の指導者の老人に、局長は連れてきた二人を紹介した。
「こちらの人が私の助手で堂さん。東大の法科出のベテランです。そちらの人は学習院大学国文学科の脇坂教授で、特別に今回の仕事に参加してくださったのです」
するとそこで初めて町の老人たちは、びっくりしてたずねた。
「学習院の教授様ですか。これは失礼しました。そうするとお嬢様は、そんな偉い方を部下としてお使いになっているのですか」
「別に部下として使っているわけではありません。ただちょっとお手伝いいただいているだけです」
「それにしても、ほんま大したものです。どうか、あの娘たちを、探偵局のお力で死ぬのを諦めさせて、自分で山を下りるようにさせてください。あんな所で四人もいっぺんに死なれたら、ここは縁起の悪い山として、もう観光に来る人はいなくなってしまいます」
「どうかお願いします。ここの町の観音堂は、縁結びと、入学試験合格との二つの願いがかなうということで、春と秋の二つのシーズンには、たくさんの人が、関西地方全体から集中してきます。それでこれまでずっと、一年中満遍なく聖天様と同じほど儲けさせていただいてきました。それがパーとなりましたら、どもならんさかい……」

I gave up teaching school to little boys. I'm teaching big boys other things now. If you'd like to learn, call ALLISON or GINNY

212-758-5134



Models Interviewed

STUPENDOUS

四人の娘に死なれて山の上で黒焦げになられたら、つる屋もかめ屋も、一遍に商売が上がったりになってしまう。二人ともにこれは、観光協会や文化協会の次元を超越した、生活上の大問題であったのだろう。

老人に案内されて、三人は教団のある場所まで行った。不思議な教会であった。

観音と、キリストと、マホメットらしいアラビヤ人の顔が、まるで銭湯のタイル絵のような筆致で、教会の表にペンキで描いてある。掘立小屋をちょっと大きくしたような建物だから、知らない人は、映画館か、地方によくある物産展示館ぐらいに思って、見過ごして通りすぎてしまうだろう。

すでに、新聞社の車や、テレビ局の中継車、それに急を聞いて駆けつけた『FFEFT（エフエフイーエフティー）』という、写真週刊誌五誌のカメラマンが、てんでに肩から四、五台のカメラをぶら下げ、やや焦り気味で油断のない目付きでうろうろしている。

無理もない。今、最も競争の激烈な社会は、この五誌のカメラマンたちの所属する世界であろう。特に他の三誌におくれて参入してきた、FとTの二誌のカメラマンなどは、競馬場で出走用の金網ゲイトに入れられた競走馬のように、今にもとび出しそうに足踏みして頂上を睨んでいる。

峯の地形のきびしさが、そのカメラマンたちの抜け駆けを辛うじて防いでいた。

それは切りたった岩の塊りで、教会の裏にある、岩に刻みこんだ階段を登らなくては上がって行けないような地形だからだ。そしてその階段の入口には制服の巡査が二人、昔風に制帽の顎紐をかけ、片手を腰のピストルの上にあてて、きびしい顔で立っている。

もしかして、誰か一人でも抜け駆けして頂上に登ろうとする者がいたら、即座に射殺も辞さないという顔付きだ。

何しろ見物人の半分以上は、この地域一帯の、昔

から根強くしみついている、信心深い体質を受けついでいて、むしろ娘たちの殉教を、浄らかな信仰的行為として祈りながら待っているありさまだし、取り囲むマスコミに至ってはもっと露骨だ。

生きてむざむざ帰るよりは、思いきって体に火をつけ、その美しい生身が炎の中でもだえ狂い、炭化するまでの過程を、ビデオに、カメラに詳細に納めたい。

ベトナム戦争初期、サイゴンの町でよく行なわれた焼身自殺以上の、世界的大ニュースになる。テレビのビデオフィルムは、世界中のテレビ局が争って買うだろう。

ＦＦＥＦＴの五社の売れ行きは、その写真の生々しさ、凄惨さの順で、飛ぶような売れ行きを示すだろう。

焼かれるのは四人。それも町の人の話によると、みな美しい処女たちばかりである。

全員が下でかたずをのんで見守っている。もし火の手が上がったら、もう警官の阻止も発砲も、このいきりたった、餓狼のようなマスコミ陣を止めることはできない。

みなが一斉に峯の上に駆け登り、我勝ちに人間が死に焼けただれて行く場景を撮りまくるだろう。

みな気がたっている。だから町の有力者に連れられてやってきた、三人の男女を見て、

「何できた」

と、きびしい目を向けた。

一社だけ抜け駆けで取材されてはたまらないし、それ以上に……これは誰も口には出せないことだが……彼女らに死ぬのを思い止まらせて、むなしく下山させるようなことがあったら、ニュース価値は、半減どころか、十分の一にも減ってしまう。豊田商事事件の例もある。

入口の前に固まっているマスコミの間をかき分け、巡査の所まで行った三人は、町の有力者の紹介で、巡査に自分たちの身分を紹介した後で、何か相談し

だした。
話しながら、石島局長はちらと時計を見た。まだ二時ちょっと前だ。暗くなるまでには三、四時間ある。
何とか、四人の美しい娘たちの生命を救い出すことができるかもしれない。
あまりあせらず、間違っても女たちが灯油をかぶらないようにして、おだやかに話をすすめて行こう。
ようやく石島祐未子と警官との間に話し合いが成立した。
ともかくほうっておいてもどうにもならない。このままだと日が昏れたら、もう待ったなしで、灯油をかぶって瞬間に火をつけてしまうだろう。その警官の上司らしい私服が、
「では、町の人々が認めたなら、やるだけのことをやってみなさい」
と代わって答え、OKを出してくれた。
近くの警察としても、今どうにも手が出せないでいる。ここは頭の発想が柔らかい、民間人の探偵に任せるより仕方ない、と考えたらしい。
まず祐未子は周辺に集まって、今にも爆発しそうにいきりたっている各誌の取材陣、テレビ局のカメラマンに向かっていった。
「私はどこのマスコミにも所属している者ではありません。だからこの事件を抜け駆けで取材しようとしているのではありません」
「では、おまえは何なのだ」
と取材記者の中から鋭い声がとぶ。みな神経がカリカリしているからつい言葉も荒く激しくなる。石島祐未子は胸を張って答えた。
「私立探偵です」
とたんに、マスコミの連中はわーっと笑い出した。
「なに……ハハハ、私立探偵。笑わしちゃいけないよ」
「これは別に密室の中で殺人事件が起こったり、正体不明の犯人が、女の子を四人誘拐して隠したりし

たわけではないんだよ」

全員が大笑いしている。

警察力が整備されている日本で、一体本物の私立探偵なんているのかと、初めて見るその存在に驚いて、やたらにカメラを向けて面白そうにシャッターを切っている者もいる。

口惜しまぎれにどんと足踏みして、この十九歳の探偵局長はいった。

「笑うなら勝手に笑いなさい。みなさんと違って、私はこの事件を解決して、四人の娘さんの生命を無事助けるため、町の人から頼まれてここへ来たものです。それに岩の上との交渉をすることを、警察からもただいま正式に認められた唯一の存在です」

とたんに海千山千のマスコミ人たちが、みな黙りこんでしまった。その言葉にこの娘若いのに、なかなかやるなという感じも持ったようだ。

「あの娘たちの生命は絶対助けなければなりません。もしあなた方の中に一人でも心の中で火に燃えて、もだえ苦しむ四人の娘の凄惨な死の状況や、黒焦げに炭化した死体を見ることを望む者がいたら、それは殺人幇助罪を構成します」

じろりと睨む。もう半年近くの探偵局長生活で、その睨み方はかなり迫力が出てきた。

「みなさまマスコミは、人民の自由の代弁者であり、人権の看視人であるはずです。決してあの四人が死ぬのを望んでいるわけではないと思いますが……」

「それはそうだ。誰も娘たちの死ぬのを望んでいない。我々にもヒューマニズムがある」

とうとう、その人混みの中の代表がそう言わなくてはならなくなってしまった。本心は無念であったろう。

すかさず、石島局長は鋭く切り返す。

「それはタテマエですか。ホンネですか」

すると別な一人が、かなりにがにがしい顔でいった。

「我々マスコミには、タテマエとホンネの区別はな

い。常に一般大衆のニーズに応じ、正しい報道を信念に従ってやっているだけだ」

「だったら、ぜひ彼女らの救出に協力してください。考えてください。上にいるのはまだ若く美しい娘ばかりです。大事に使えば、これから五十年も六十年も使える生命を、ここで、炭にしてしまうのは勿体ないと思いませんか」

……それが見れそうだからここへ集まってきたとは、どんなに言いたくても、口がさけても言うわけにはいかない。そんなことを言えば、日本中から批難される。石島局長はいった。

「これから彼女らと話し合ってみます。私はカメラも持っていませんし、記事をどこかに売るつもりもありません。もし、何とか撮影や、取材の機会があったら、それはみなさま方のように、それを商売とするお方にお任せして、私は一切しませんから、それだけは安心してください」

彼らが最も恐れるのは他社のことだ。よそが取材したり撮ったりできないなら、自分たちもまた待つつもりはある。

祐未子はこうして、麓にいる警察とマスコミ陣の根回しをすますと、町の観光協会の備品である、ハンドスピーカーを借りて、上に話しかけた。

「四人の娘さんにご相談があります。私もみなさんと同じような十九歳の女性です。まだ学生です。こうしてお話ししかけたのは、決して死ぬのを思い止まらせたり、下へ降りてきてくださいと説得するつもりからではありません。ただみなさまが教祖様の後をお慕いして旅だつ前にまだ何か、この世に思い残し言い残すことがあるのなら、聞いてすべて代わりに実行してあげようと思い、お話を伺いたいと思ったからなのです。決して他の気持ちは持っていません。大勢の人が回りで見ている中で約束するのです。私のいうことを信じてください」

そして一息ついて、上にもう一度呼びかけた。

「もしその気持ちがあったら、何か布を振ってくだ

さい。行くのは私一人だけです」

上では何か相談しているようだ。

やがて一人の女が立ち上がった。五十メートルぐらいの高さの峯だから、下から四人の姿がはっきり分かる。もし炎が燃え上がるときがあって、それでも登頂が許されないなら、何とか望遠レンズででも撮ろうと、一メートルぐらいも長い、まるで砲のようなレンズで狙いをつけていたカメラマンが、一斉にシャッターを切った。

立った女は、白い布を振った。

多分、心の中では振らなければいいなと思ったマスコミが多かったろうが、しかしそれは口に出せない。みな一応はどっと石島局長をほめそやした。

入口をふさいでいる警官に扉をあけてもらい、祐未子は一人で、岩の階段を登っていった。

4

頂上は、三坪ばかりの平らな土地になっていた。トランシーバー一つだけ持って登った。

まだ、二時少しすぎ。

あたりは明るく、四方の峯々が見渡せる。今は峯々にそれぞれ何か小さな神社らしいものもあり、へばりつくようにして、土産物店がある。

今はかなり俗化しているが、しかしここは昔から、神々のいる聖地として人々に崇め奉られた土地であり、実際にたくさんの神が集まってきただろうということが、そのまま信じられる風光でもあった。

四人の娘は岩の上にビニールシートを敷き、静かにお祈りしている。真ん中に、この世の最後の別れの儀式のために用意されたらしい、コーヒーを入れたポットと、クッキーの箱がある。そして彼女らの横には、それぞれ一缶ずつの灯油が無気味に置いてある。

上がってきたのが祐未子一人だったので、四人も安心したようだ。祐未子は、下にも物音が聞こえる

よう、トランシーバーのスイッチを送りに入れっ放しにしておいた。

四人のいる位置から、ちゃんと石の階段が見下ろせる。誰か上がってくるのが分かったらお祈り中でもすぐ、立ち上がって、灯油をかぶれるようになっている。危ないところだった。しかも、四つとも灯油缶の蓋はみな外されている。

死は一瞬のうちだろう。

「そのクッキー一ついただいていい」

そういって、祐未子はみなの間に割りこんで、ビニールのシートに坐り、クッキーを一つつまんだ。

「どうぞ。私たちはこれは神の肉と呼んでいます。コーヒーを神の血と呼んで、毎日一度、コーヒーとクッキーをいただくことで、全身をエホバと同一することに致しております」

このへんは、キリスト教のごく原始的な部分を取り入れている。

「お祈りはどうするのですか」

みな手に数珠を持っていた。

「これを持って、西のほうを毎日七回拝むのです。『エホバ、アラー、観音様を拝み奉る』という言葉を何度も唱えるのです」

「そうですか。うらやましいわ。神様を信じられて、清浄な心で信仰できるなんて。私たちのような雑念でいっぱいの者には、一生、知ることができないことですもの」

四人の中でも一番年長の者がいった。

「そんなことありませんわ。私たちも前はいつも雑念でいっぱいだったのです。でも何年か前に、教祖様を信じ、その教えを受けるようになって、やっとその雑念も取れ、自分自身で何の邪(よこしま)な心もなく、浄らかに生きることができるようになりましたんよ」

できるだけ相手を刺激しないように、石島祐未子はきいた。

「じゃーもう教祖様がいなくても、みな自分の力で浄らかに生きて行けるのでしょう」

すると四人は同時にいった。

「いえ、私たちは教祖様がいなくては駄目なのです。心の支えであり、光だったのです。だからこれから先の長いあの世でも、ずっとおそばにいようと考えたのです。他の美しい娘にそばで囲まれて、私たちが割りこむすきが無くなってしまう前に後を追いかけようと、今朝、新聞を見てみなで決めたのです」

今朝決めたばかりで、まだ決心してからの時間が浅いのなら、この信念をつき崩すのはわりと易しいと、祐未子は咄嗟に感じた。観音様と、エホバと、アラーと、三つから適当に借りてきて、やっとでっち上げた宗教だから、どうせ深い教義があるわけでない。

どうやら彼女らの奥の心を問い質せば、そう、どうにもならないほどの切羽詰まった気持ちで信仰に入ったのではなさそうだ。みな可愛らしい普通の娘だし、本来はディスコで踊ったり、流行のドレスを着て、四条や梅田を歩いたりするほうが、小さな教会で、実年男の教祖に仕えたりするよりずっと似合いそうだ。

そのへんは教祖も考えていて、コーヒーとクッキーがエホバの血と肉だなんて、うまい教義を見つけ出したのだろう。

なかなか面白い発想だし、もし生きてお話をきいたら、それなりに話術も巧みで説得力もあったろう。下にいる堂や、脇坂教授にその心理を学問的に分析させたら『地方教祖の心理と、その説得のテクニック』という、ちょっとした論文なども書けると思ったが、ここでそんなことを面白がっている時間はない。

「それでね。みなが、入信したのには、それぞれに何かの悩みがあったと思うの。私も同じ年だから分かるわ。今、二時半。四時半までは暗くならないから、それまでの間に、みなが入信したとき抱いた悩みを一人三十分ずつで実際に一つずつ解決してみようと思うの」

年長のみなをリードしているらしい、少し気性が勝ったらしい女性が、みなの死への気持ちが弛むのを警戒してきびしい声でいった。

「もういいのです。入信して教祖様にお心をお預けしたときに、私たちは救われ、一切の悩みはそのとき無くなったのです」

「でも……」

と祐未子は負けていなかった。

「……それでも実際にはその悩みはなくなったわけではないのでしょう」

「もう私たちは入信と共に心の世界に入ったから、現実の人間の世界のいろいろな悩みや、望みごとなどはどうでもいいのです」

「そうでしょう。よく分かります。しかし教祖様へこれからお会いする前に、その現実世界の望みや悩みもついでにちゃんと解決してから、身も心もさっぱりして、お会いしたほうが先に行って待っている教祖様もお喜びになるのではないかしら。一人三十分ずつありますし、誰もこの岩の上には、あなた方の許可がない限りは、もう上がってこないから、入信の動機だけは話してくださいませんか」

四人はしばらく考え、それから何かお互いの間で話したそうにした。祐未子はすかさずそれを悟って、立ち上がって、みなの相談が聞こえないように崖のはしにいった。

ようやく話がまとまったらしい。といっても、それは三対一でまとまったらしく、一番年長の女は、まだ少しふくれ面で必ずしも納得したようすはなく、きびしい目でみなを睨んでいる。しかし死を覚悟して一緒についてきた三人の娘が、共同して主張することには逆らえない口惜しさが、表情に出ていた。

若いあどけない感じの娘がまっ先にいった。まるで小鳥がさえずるような可愛い声である。こんな子とおしゃべりしたり、そばで歌ったりしてもらったら、どんなに楽しいだろうと思わせる朗らかな子だった。

「あたし、カラオケが大好きだったのです」
思いがけないことをこの娘は話しだした。
「特に中森明菜ちゃんや、本田美奈子、中山美穂ちゃんの歌が好きで、この生駒山の中にあるスナックのカラオケで歌って、どこでも評判で、ぜひうちへアルバイトで来てくれ、時間給二千円払うから、という誘いさえあったほどです」
全く死ぬことや悩みごとと関係ない話をしだした。
「できれば、プロの道へ入って歌手になりたかったのですが、山の中のスナックで歌っているのでは、その機会は来ません。といっていきなり、東京へ行っても、インチキプロダクションでたくさんのお金を奪われ、不良みたいな男に大事な貞操を奪われることが多いし、悪くするとトルコへ売り飛ばされると聞いたので、怖くて行けなかったのです」
少女が使う言葉がすべて古い。今どき不良も、貞操も、トルコさえもう死語になっている。山の中の閉鎖社会にいるからだろうが、またそこがいかにも古風な純情な娘らしく面白かった。だがそんなことで面白がってもいられない。
「そうよ。東京は悪い人が多いから気をつけなくちゃーね。それであんたは入信したの」
「ううん違うわ。この下の天理町に、NHKののど自慢がやって来たの。それも審査員が男が郷田ひろみ、女が、憧れの本田美奈子ちゃんだったの。それで私、早速申し込んだの。ところがあののど自慢というのは、全員が出られるわけでなくて、申込者が二百人以上もいて、当日の出場者が二十五人と決まっているわけ。それで前日から予選があって、ただうまいだけでは本番に出られないの。うまい人だけ選んだら、今の若い人の水準では、二十五人がみな、鐘を三つ鳴らしてしまうらしいの。それで五人だけうまい人をまぜたら、後は画面にして面白そうな人だけ残すらしいの」
「そんなの、そんなものなの。ちっとも知らなかったわ」

そう祐未子はいかにも感心したようにいった。実はとっくに知ってることだ。

「それであっさり予選で落ちて、のど自慢に出られず、私が日本中に認められて、大歌手になる道はとざされてしまったの。すっかり世の中に矛盾を感じて、いっそ死んでしまおうかと思ったのだけれど、そのとき、この観音・エホバ・アラー教のことを知り、入信して毎日七回お祈りすれば、絶望から救われるときいたので入信したの」

「本当にいいお話をきかせていただいたわ」

そう心から同情したようにいった。しかし内心では、何と単純な発想だろうと、呆れていた。民間の土俗信仰なんてのは、多かれ少なかれ、この程度の悩みを解決して信者を獲得して行ったのだろう。しかし世の中には、ほかにそういう悩みをまともに聞いてくれる機関はないのだから、仕方がない。

彼女らにとってはこれは本当に心の救いだったのだ。もっとも教祖様がそれに対してどういう答えをしたのか分からないが、いずれ架空の抽象論で適宜に説得して、現実には、この女の夢を諦めさせてしまっただけのことだろう。

「分かったわ。ちょっと待って」

石島局長はトランシーバーを取り上げた。

「堂さん、脇坂さんいる」

「ええ、待機しています」

「すぐにテレビ旭日の吉田制作部長さんに電話で連絡をとってくれる」

「ええ、いいです」

「次の『スターデビューお目出とう』はいつか聞いて、すばらしい歌の上手な子がいるから必ず出すように頼んでみて」

「畏まりました。今、東京のテレビ旭日へ電話をかけますからしばらく待っていてください」

それでいったんトランシーバーが切れた。その娘がとび上がるようにしていった。

「私、テレビに出れるのですか」

「多分ね。それにその人はテレビ局の一番の有力者だから、そのままあなたが、スターになれるかもしれないわ。ただしもう時間がないわね。いくらテレビに出ると決まっても、東京へ行って出演して、今日の六時までにここに戻ってくるということは不可能ね」

さすがにその可愛い子は考えてしまった。テレビには出たい。そこで歌いたい。だがみなで死ぬことを約束してしまって今さらこの固い約束から一人で抜け出せない。

「ここでちゃんとみなに、必ずテレビに出てスターになったら、約束どおり、すぐ後を追って教祖様のおそばへ行くと約束して、一時的に下へ降りることはできないの」

年長の女の目がきらりと鋭く警戒して光った。しかしあと二人の女の目はむしろ、羨ましそうにその少女を見つめていた。

いったん死ぬと決めたが、それはみなが一緒に死ぬと決めたから、その勢いで、まるで酔ったようにして、一緒に死にとびこめるのだが、できれば本当は怖くて死にたくないし、年長の女もまた一人だけでは死ねないだろう。ここでも、下と同じというか、狙いは反対というか、ホンネとタテマエの心の戦いがくり拡げられている。

下のほうから送話の合図があった。

「上ですか。堂局員です。吉田部長からすぐ返事がありました。その子、本田美奈子より可愛いですか。もし可愛かったら、すぐ明日の昼のテレビに出演してくださいとのことです。顔さえ可愛ければ、少し短いパンツをはいて、お臍を出して、思いきり飛んだり眺ねたりすれば、もうすぐ売れっ子になるそうです」

ちらっと祐未子がその少女を見ると、じっと胸の前で手を合わせて拝んでいる。彼女の一言ですべてが決まるのだ。大きくうなずくといった。

「今は同じくらいだけど、もし少しお化粧したら、

本田美奈子ちゃんなど、比べものにならないぐらい可愛くなるわよ」

「それでは、すぐ降りてきてください。ただ自分の分の灯油は、崖から大阪側に中身を投げ捨てて、カラ缶だけ持ってきてください。

これはマスコミと警察の要望です。そうしないと、みなを騒がせた罪で一晩留置して取り調べなくてはならないそうで、明日の東京行きに間に合わないのです」

祐未子はまっすぐその少女を見つめていった。

「死ぬのはいつでも死ねるのよ。スターになってからでも。みんなを裏切らない決心さえしたら、かえって、今すぐ灯油を捨てられるんじゃない」

日本語はまことに便利にできている。可愛いから殴るのだとか、心頭を滅却すれば火もまた涼しとか。喜んでお国のために生命を捧げるとか。

心とは裏腹のことをいうのにこれ以上、適当な言葉は世界中にない。少女は、

「はい。私の心に裏切りのないことをこれで証明します。すぐみなさんのお後を追います証拠に、今堂々と灯油を捨てられます」

ともはや全く死ぬ気の失せた少女は喜びの微笑を浮かべて、崖の上から、缶の中の灯油を大阪側に捨てた。そして黙って見送る三人を置いて空の缶を担いで一人で下りて行った。

下のほうではこれもまた、タテマエとホンネが反対のマスコミ陣が、表面は生還を歓迎し、心では、美しい生身の女性が、炎にもだえ狂い炭化する世紀のスクープの量的価値の減少に、やけくその拍手をしていた。

5

さてと、あと三人残っている。

腕時計をちらと見てから、祐未子はいった。

「ちょうど三十分たったわ。今三時よ。まだ一時間

半あるわ。次の方、入信の動機を聞かせてね」

すると、坐っているうちはよく分からなかったが、膝のあたりのちりを払うためいったん立ち上がったときに、意外に背が高いのが分かった娘が、また坐り直していった。

「私、スタイルに自信があったのです。それで、この前カドヤマ映画で、『人間の帽子』という映画の主演者を一般から募集したとき、願書を出したのです。ところがそのときに、テストを受ける前に書類審査で、落選したという返事がきたのです」

「身長とか容貌で審査基準に満たなかったのですか」

「いえ、それは全部合格していたのです。少なくとも書類にはちゃんとそう書いてあったのです。『まことに残念ですが、次のような理由で、審査を受けていただくわけには参りませんでした』と断わり書きした上で、条件が書いてあったのです。それによると、『東京都内、もしくは一時間以内に通勤できる範囲に、両親のご住所があるか、しっかりした身もと保証人がいて、そこから通える人』

ということになっていたのです。うち、東京などには、誰も親戚も知り合いもおらへんし、どもならん。それですっかり人生に絶望を感じて信仰の道に入ったんです」

東京の六本木や原宿を歩いていて女の子に向かって石を投げれば、全部タレント志望者に当たるといわれるが、今や東京だけでなく、日本中どこでも女の子に向かって石を投げれば、タレント志望者に当たる時代になった。

「そのときの『人間の帽子』に合格してスターになった新人は誰ですか」

「原田桃江です」

今や若手スターのトップの座を独走している。さすがにそれをいうときは、この死を覚悟した信仰深き女も、口惜しそうに唇を噛んだ。そこをさらに衝っ

く。
「もう映画に出たくありませんか」
「それはできたら今でも私、カドヤマ映画に出てスターになりたいのです。でもスターになれなくてもいいから、撮影所に行って、カドヤマ社長や、監督さんに、私だってこんなにスタイルが良いんだというのを見せてやりたいのです。それだけでいいのです」
「分かりました。でもそれだと今日の六時までには間に合いませんが、その望みが終わったら必ずみなを裏切らずに後を追うということを約束できますか」
「うちは決して裏切りませんわ。テストさえすんだら必ずみなの後を追って、教祖様の所へすぐ参ります」
いったん山を下りてしまえば、後はどうなろうと、知ったことではない。生きる希望ができたことで、急に言葉は威勢よくなってきた。
「それでは下へ連絡してみます」
またトランシーバーが下へ向けられた。
「カドヤマ映画の次のスター公募はいつか聞いてみて。ついでに生駒山の人でもテストを受けられるかって」
「分かりました。すぐ東京へ電話をかけてみますよ。ぼくや脇坂の共通の友人に、重役をやっているのがいますから」
今度は五分ぐらいで話がついた。
「脇坂です。石島局長、その重役が、自分が身もと引受人になって自宅からテストに行かせるし、もし素質があったら、東京にタレントのために確保してある、マンションが幾つかあいているから、そこを提供してもいいといってるよ」
今すぐ死ななければならない立場を忘れたように、その背の高い女はとび上がった。
「わあー。テスト受けられるの。私絶対にスターになって主演を取って見せるわ。それから……」

と今度はわざとらしく強調した。

「……スターになったら、すぐここへ戻って改めて灯油を買って、立派に死んでみせます」

もうその言葉のむなしさに気がついているのか、年長の女は横を向いて返事もしなかった。しかし、そのリーダーの女も、自分でいきなり灯油をかぶって死ぬほどの勇気は消えてしまったらしい。黙って坐ったままだ。背の高い女は、

「私、ここで絶対死ぬわ。今こそ死が、すがすがしく自分を迎えているように考えられたときはないわ。これも、教祖様が強く立派な信仰心をあたえてくださったおかげだわ。死ぬのが初めて喜びになったわ」

そう言いながら灯油の缶から中身を崖に捨て、空の缶を持って階段を下りて行った。

下では、また二人目の生還者に対してやけっぱちの心での拍手が続いて、タテマエとホンネの世界が火花を散らしていた。

また、世の中なんてこんなものだろう。

あと二人だ。これも何とかなりそうだ。四人の仲間の二人までも途中で脱落したら、どんなに意志が固い女でも、もう心がぐらつく。時の勢いで死へ踏み切り、灯油の火をつけられるのだ。その勢いのもとが無くなってしまっている。

三人目の女に向かって聞いた。

「あなたの入信の動機は」

その子は一番平凡な容貌をしていた。

可愛いが目だつ子ではない。その代わり格別な野心は無さそうだ。

「私……私……」

それだけいって、突然わーっと泣き出してしまった。

「どうしたの。ちゃんと言わなくては分からないじゃないの」

そう祐未子にいわれ、涙を拭いた。

「私……健ちゃんと愛し合っていたんです。でも健

ちゃんこのごろ冷たくなって、玲子が好きになったらしいので、もう駄目だと思って入信したのです。だから私、戻るところないんです。他の人がみな山を下りても、私一人はここへ残って夕昏れになったら油をかぶって死にます」

こういう平凡な女が決心したら一番危ない。何をするか分からない。泣きじゃくりながら続ける。

「私、きれいでもないし、チャーミングでもないし、背も高くないし、健ちゃんに捨てられたら、もう希望も何もないのです」

「ちょっと待って……」

と、さすがに祐未子はあわてていった。

「あんた、それで健ちゃんて人に、とことんまでの気持ちはきいたの」

「そんなこととても恥ずかしくてきけません」

「じゃー私たちがきいてあげるわ。そしてもし駄目なら、私が他の人に代わって、あんたに油をかけてあげるわ。だから少し待って」

そう言いながらもどきどきした。もしおかしな返事が戻ってきたらどうしよう。これで、一か八かの大ばくちを張ってしまった。

「それで健ちゃんという人はどこにいるの」

「町の役場で働いています」

すぐトランシーバーを下に向けて、

「そこで役場の健ちゃんという人を呼んで本当の気持ちをきいて」

するといきなり返事が戻ってきた。どうもその下の人の集まりの中に、当の健ちゃんていう人が交じっていて、これまで上の様子をはらはらして見守っていたようだった。

「千代子。健太郎だ。聞こえるか」

「はい」

千代子という少女はあわてて立ち上がると、横から祐未子のトランシーバーを奪うようにして答えた。

「これまで冷たくして悪かった。おまえが好きだよ。他の誰も愛したことはなかったよ。早く下りてこい。

すぐ結婚しよう」

下でどっと拍手が起こった。今度はもうその女はみなの後を追いかけて死ぬとか、岩の上に戻ってくるとか、そらぞらしいことは一言も言わず、ただきびしい顔をしたリーダーの女に、

「お姉さんすみません。私、もう信仰捨てます。だってあの六十のお爺ちゃんの教祖様より、ずっと健ちゃんのほうが好きなんだもの。田中健よりも、清水健一郎よりも、ずっと私の健太郎のほうがハンサムですてきやもん」

そう言ってさっさと灯油を捨てて、空缶を担いで下りて行ってしまった。

そこで祐未子は改めて坐り直して、その年長の女に向かっていった。

「とうとう、あんた一人になってしまったわ。せめてあんた一人でも、教祖様のみあとを慕ってやらなくては可哀そうじゃない。油をかけてあげましょうか」

するとその女は、美しい顔を正面から向けて思いもかけないことをいった。

「うち、あのスケベ爺いを慕ってなんかおらんよ。ほんま恨んで恨んで恨み抜いているんよ」

「えっ」

リーダーの女の大きな目から、涙がぽろぽろとこぼれている。

「うち、あの爺いにお祈りの最中あちこち触られているうちに、女の純潔を失のうてしまったんよ」

「まあー」

「もうお嫁に行けなくなってしもうた。やけくそになって、爺いのいう、神へのご奉仕をしているうちに妊娠してもうて、二度中絶したんよ。それでも今お腹にいる三人目の子が可愛くて、三カ月まで黙っていたんよ。お腹を大きゅうして生んでやり、笑いもんになってもいい、教団潰れてもええさかい、自分で育てて、お爺に復讐してやろう思うたんよ。そしたらお爺突然肝硬変で死んでもうた。それから二

カ月、うちのお腹のベビー、もう五カ月よ。もうどもならん。隠しておけん。分かったら、みなに笑われる。死ぬしかなかったのよ。でも赤ちゃんのために、私死にたくない」

急にわーっとまた泣き出した。

祐未子はいった。

「分かったわ。もう中絶はできないけど、私と一緒に東京へ行きましょう。無事で生んだらどこかへ預けるなり、二人で生きて行くなりちゃんとしてあげるわ。うちの探偵局は、合法的に赤字が生まれる出費なら大歓迎なのよ」

そして泣きじゃくる女の肩を抱き、二人で最後の空の缶を下げて岩の階段を下りて行った。

やけくそと絶望をかくした、生還の喜びを称える拍手が岩の下でわき起こり、生駒の山中にひびき渡った。

〈第七話〉　某重大事件

1

当然のことながら、冬は寒い。

冷暖房兼用の窓型（ウインドウタイプ）の機械がはめこまれていて、それにスイッチを入れさえすれば、僅か六畳一間のこの小さな探偵局など、すぐに温まってしまうのだが、しかしモーターが始動すると同時に、もともと資材や建て付けが悪い昭和二十一年（戦後の最貧困時代）に建てられた、超オンボロアパートだから、壁を中心に部屋中が震動する。

それが部屋だけで納まってくれればいいが一階八世帯、二階八世帯の十六世帯のアパート世帯が一斉にゆれ動いて、夜も眠れない事態を招いてしまうことになるので一応は夜は暖房は切る。

二人がすっ裸で毛布にくるまって抱き合っていれば、暖房なんかかけなくても結構暖かい。

その代わり……外に霜が下りたり、陰うつな季候でしんしんと冷えこむ日など、朝九時の目覚まし時計がいくら頑張って鳴ろうと、分かっていても、とてもベッドから抜け出す気になれない。胸の所に抱きついている体をゆすぶりながら、

「もう電話が入るかもしれない。探偵局は依頼が来たら待ったなしだからね、取りあえず食事だけはしておこうよ」

今では夜中に寝つくまでの、十九歳の若い局長の肉体攻勢にすっかり堪能して快い熟睡からさめたばかりの局員の堂四郎はまずまっ先にいう。実は空腹を感じて我慢できないからだ。

実はベッドの二人はまだ夫婦でも何でもない。眠たがっているほうの女は金持ちの娘で、税金対策のため道楽に始めた仕事だ。そして男は空腹で今にも死にそうになってふらふらとさまよい歩いているところを偶然拾われて生命を救（たす）けられたうえ、局員に採用された身であるから、起きる起きないは女局長の考えしだいだ。

その局長の石島祐未子は十九歳のぽってりした、しみ一つない体を、再び毛布の中に深くもぐりこませ、局員堂四郎のこのごろ少し筋肉などもついてきた毛深い胸に体を埋めるようにして、

「いや、起きない。今日はこんなに寒いんだから、どうせ事件の依頼など来やしないわ。もう何もしなくていいから、もっと強く体を抱きしめていて」

といった。

もう日は昇っている。十時に近くなった。まともな社会人が、日曜日でもないのにそういう自堕落な生活をしてはいけない。

いきなりこの安い材木で作った、部屋の扉をノックする音がした。

「もしもし、もしもし」

「だーれ。まだ寝ているのよ。用なら後にして」

ベッドにもぐりこんだまま局長が答える。

とたんに聞きなれた声がした。

「起きろ、祐未子、大事なお客さんだ。まだ裸だったら、とりあえずズロースとシュミーズをつけただけでいい。すぐあけなさい」

随分古い言葉で言いにくいことをいう。それは父親以外にない。あわてて脱ぎ捨てた下着を身につけ堂にもパンツだけはかせ、スリッパの上にガウンだけつけてから、扉をあけた。

父親はまだこの、娘の探偵局へは来たことがない。しかし堂という男と、適当にやっていることは大体察しているから、そのことでは別に咎めだてしたりしない。

たださすがに、狭い部屋にこもった、男と女の体から出る、動物的な体臭には少し辟易したようで、

「ともかく窓をあけなさい。もうそんなに寒くない。くさくてかなわん」

といった。

相手が父親であり、この探偵局の資本主でもあるので、そのいうことをきかなくてはならない。堂四郎のほうはまだやっとパンツをつけたばかりの体に

慌ててワイシャツをひっかぶり袖の所へ手を通しながら、あわてて窓をあけた。

冷たい風が部屋の中へさーっと吹き入る。

温まってふやけた体が一瞬現実にひき戻されて体中が、ぱっちり目をさます。

父親が堂を見る目はまた違っている。以前はあんまりやせすぎて幽霊みたいな男と思っていたが、今、腰のあたりを見てみると、あれから栄養が行きわたったせいか、なかなか見事な肉付きをしている。

男は精力が第一だ。自分も若いころはそのほうが常人以上にたくましかったため、養子稼業が無事務まってきた。この男なら少し年は離れているが、一応東大出だし、充分に娘の祐未子を満足させてやれそうだ。それに今の石島家みたいに、億の下に丸が二つつくか、三つつくか、自分でも分からないぐらいの財産の持ち主の家の婿としては、なまじ目はしがきいて気力が充実し何かやりそうな婿よりは、仕事など何もせず、読書とか、音楽、美術鑑賞とか、適当に趣味の世界に生きていれる人間のほうが好もしい。要は子供だけ作ってくれれば後はどうでもいいので道楽の世界では、たとえどのように金がかかろうと費った金しか減らないが、いったん事業に手を出したら最後、費った覚えがない金まで恐ろしい勢いで出て行き、何百億あろうと、忽ち蟻がたかるように人が群れよってむしりとられてしまう。

それにこの男満更ぐうたらばかりでなく、法律のほうは、かなり詳しいようだ。

『うん、婿としてはなかなかいいのをひっぱってきた。東大では成績もよかったそうだし、こうして現在、同じベッドで直前まで抱き合って寝ていた現場を父親のわしが目撃したからは、もうこの男は、娘と結婚する以外の道は残っていないからな』

と木綿のブリーフの下にある前面のたくましいふくらみを睨んだ。そして重々しく、

「堂君、すぐズボンをはきネクタイをつけなさい。祐未子はすぐ、ここにある一番いいドレスを着なさ

い。シュミーズやペチコートはどうでもいい。上が大切だ」

突然、親父の石島祐太は直立不動の形をとった。

「畏きあたりからのお使いの方がお出でで、既に廊下にお待ちだぞ！　昔なら勅使ご差遣にも当たる重大事で、玄関の両側には地元警察が並び、その後ろに愛国、国防の両婦人会がお互いに相手に対して内に敵意をふくみ表面はにこやかに微笑みながら両側で最敬礼して迎える。それほどの重大事だ」

といった。何やら相当の重大事らしいが、父のいう例えが古すぎるので、言ってることの意味がほとんど分からない。しかしともかく、二人ともこんな狭い部屋の夜の仕度がそのままの所へ客を迎えるわけにはいかない。

大急ぎで服装を整え、ベッドを片付け、そのへんに散らかっているやや恥ずかしいごみ屑などもちり箱に入れて処分した。

「いいかね。もうお使いをお迎えしても」

入口で立ちふさがり部屋を睨み回しながら父親は訊ねた。一つには、立ちふさがったその背中で、昔なら勅使に当たるともいう大事なお客の目をふさごうとしている心遣いでもあったようだ。ようやく仕度を終えた。

「はい、もう結構です」

父は、扉をあけてうやうやしく頭を下げた。

「どうぞお入りくだされませ」

「おっほん……」

と一応形式的な咳払いが聞こえた。そしてモーニングを着た中年の男が、静々と入ってきた。紫のふくさに包まれたお盆でも持っていたら、本当に勅使でもやって来たのかと思うほど、相手はうやうやしい態度であった。

それにつられて、堂も、祐未子も頭を十五度垂れて迎えた。そこで日本国家の最も尊い血筋に対しての敬虔な気持ちは一応表わしたうえで、おもむろに二人とも顔を上げて、

「あっ！」
「なーんだおまえか」
と、それぞれ声を上げた。

2

モーニング姿のお使いは、二人ともよく知っている人物であった。
「脇坂教授」
「脇坂おまえか」
脇坂はいつもなら形式ぶる人ではない。関西生まれの人間特有の出身や階級をひどく気にする一面はあるが、大体は気さくで洒脱な人がらだ。まず祐未子がびっくりして聞いた。
「教授どうしたんです。そんな恰好をなさって」
堂は大学の同級生だからもっと気楽だ。それについ先日は、わざわざ関西の事件現場までひきずっていって、殺人事件が起こりそうになったのを協力して助けてもらった仲だ。
「おい、脅かすなよ。今どき勅使差遣なんてそんな大げさな」
そばへよって肩でも叩きそうにした。先日、生駒山中の四人の神に仕える聖処女たちの生命を救った後、二人は東京へ戻ると石島探偵局長には内緒で、銀座で落ち合って、へべれけになるまで楽しく乾杯したばかりであった。
それから二週間とたっていない。
「……一体何があったんだ」
と近寄って行くのに、真剣な顔をした教授は、改まった声でいった。
「二人とも慎み控えなさい」
こうなると国文学者をやっているだけあって、万葉や古今の歌に通じ、朗誦も得意なほうで、ときどきは宮中のお歌会に招かれて、朗誦士役も務めることがあるだけに、その言葉に自然に威厳がある。
二人とも思わずその場に釘付けになってしまった。

「某、畏きお方からのお言葉を伝えます。身を正して聞くように」
「はい」
「お父上は扉をしめられるように。できればこれは重大な秘密でございますので、いずれもし娘さんからご事情をお聞きするならこちらはかまいませんが、今は室外でご待機願いたい」
「も、もちろん、それほどの重大なご用ならば、私は外で待機して、いかなる者が扉をあけようとしても命をかけてお守りいたします」
何しろ小学校時代は古い教育を受けた人であるから、父親の祐太の考えは、国粋保守主義にこり固まっている。先祖は平安時代の清少納言で、その時代から時のみかどにお仕えして、京都朝廷とは深い縁があった。
江戸時代に関東に土着してからは直接の縁はなくなったが、みかどに対しての尊崇の思いはずっと絶えたことはない。
だから父親がこの娘の名誉にただひたすら感動し、扉の外で中の話を窺おうとする者など出てきたら、生命がけで追い払うと張りきっているのも当然である。といって、別に誰も怪しい者がいるわけではない。珍しいことがあるといつも出てくるアパート放送局の奥さん連中がエプロンで手を拭き拭き五、六人、扉の回りを遠まきにして中の様子を窺おうとしていただけだが、
「みな自分の部屋にひっこもっていなさい。廊下をうろうろ歩いたりしたら、不敬罪で逮捕されるぞ」
と睨みつけた。本当はこんなおじさんになどいくら睨まれても怖くも何ともないが、しかしもし『このおんぼろアパートなどあっても無駄だからぶっこわす』と言われたら、みな稼ぎの悪い亭主を持った不運で、明日から行く場所が無くなってしまう。それが何よりも怖いから、あわてて自分の部屋にひっこんだ。
中での会話は約十分間ぐらいで終わった。

扉があいた。中から教授がいった。
「お父上、どうぞお入りください。ただいま、尊きあたりのお考えをお伝えしましたところ、お二人には快くお引き受けいただきました」
それをきいて入ってきた父は安心していった。
「おう、そうか、よかった、よかった。何事も日本では、まず忠義、それがあって孝行だ。忠を守らなくば本当の孝はあり得ぬ。その意味では、平重盛が平清盛をいさめた『忠ならんと欲すれば孝ならず』というのは、日本人にとっては、まるっきり成立しない論理だ」
どうもそういう尊いお使いの方が、自分の家にやってきたということだけで、この父親の頭の中は狂ってしまったらしい。いうことは支離滅裂になってしまった。だが若い娘には何を言ってるかさっぱり分からないこの言葉も、脇坂教授のほうは、もと古文が専門の国文学者だから、話の内容は大体理解できるらしい。
「そこまでおっしゃってくだされば私としては、その後のお話が大変にしやすいのです。用件はすべてお伝えをし、お二人のご承諾はいただきましたが、まだ経費や、それに対するお支払いのことはお話ししておりません。もともと政府予算がきびしい中で、ご質素な生活をなさっておられる方々でございますので……」
あわてて父はその発言を押しとどめた。
「ああ、その話はそれまで、それまで、どうかもう一言もおっしゃらないでくださいませ。臣石島祐太、そのことでは、ただの一円も儲けようなどとはもちろん、実費もいただこうとも考えておりません。この探偵局そのものが、税務対策上、税務署がみとめる形で合法的に赤字を出すことだけが目的の企業体でありますから、費用はかかればかかるほどありがたいわけでありまして……」
「それでは、ご下賜金は思し召しということで費用については不問、かつ永久に企業極秘事項としてご

処理いただけますか」
「当然でございます。まことにありがたい仰せで、ただひたすら恐懼感激の至りでございます」
両眼からは大粒の涙がぽろぽろこぼれて床へしたたり落ちるほどであった。
「もう一つ尊きあたりのご意思をお伝えする。今度のことが、無事二人の力によってなしとげられたら、まず、今のところ欠席日数が多く、学業成績もあまり芳しくない、石島祐未子君を、その課外活動の功績によって優等卒業生の中に、特旨によって加えられるよう、学長へのご伝言があるはずだ」
「まあー、嬉しい。優等卒業生は、卒業後の同窓会でもずっと特別のリボンをつけて上席に坐ることができるのよ」
父親はまた感激である。
「ま、まことにありがたいことで……」
「そしてもう一つ、かねて堂君から宮内庁側に請願書が出ていた……」
「あ、それは今、ここではやめてください」
と、なぜか堂が真っ赤になって手を上げて脇坂の発言を制しようとする。
「どうしたの……堂さん」
と石島局長が不思議そうにきく。
「いや、何でもない。私のプライベートのことですよ」
すると脇坂教授はいった。
「みかどより、三代までは親王もしくは、内親王といい、五代までは王もしくは女王という。内親王もしくは女王が臣籍の者に降嫁するときは、旧華族に限られている。その場合嫡出の男子が結婚するときは一応所轄官庁（つまり宮内庁のことだが）に届け出て、その許可を受けなければならない、という規則があります」
祐未子はよく言葉の意味が分からない。
「……それ……誰のことをいってるのですか」
「当然堂君のことですよ。まあ、堂君の母親がこの

例に当たるのです。家は旧華族、京都清華十八家の旧伯爵です」
「うおーっ！　万才」
父親は思わず、唸り声とともに、高々と両手を上げた。これで娘を学習院にやった目的が達せられた。石島家はもうこの名家と共にあり、家系は日本貴族の仲間入りを果たして磐石の重みを加える。
まだ意味がよく分からず、祐未子がきく。
「一体それで堂君がどうしたんですって」
「宮内庁に、石島祐未子という娘と結婚していいかという許可を求めたのです」
途中で堂があわてて、脇坂教授の口を掌でおおおうとした。しかしそれは間に合わなかった。
「まあ、堂さんが勝手に私と結婚すると決めたんですって。いくら何でもひどすぎるわ。私にだって選ぶ権利はあるわ」
「まあ、そういうな。清少納言以来ずっと我が家も京都とは深い縁がある。願ってもないことじゃないか」
と父がいさめる。とたんに祐未子はプーッとふくれた。
「ひどい！　ひどいわ。いくら何でも一言も私に相談せずに勝手に決めるなんて。もう堂さんなんか大嫌い。顔を見るのもいや。探偵局は解散するわ。お仕事も辞退するわ」
とたんに石島祐太は娘を一喝した。
「何をいうか。これは尊きあたりのご命令だ。個人の好き嫌いをいえる場合ではない。たとえ身は……」
突然、ものすごく音程の外れた声で、海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、と唱ってから、
「……となろうとも断じて、己れの任務に邁進せねばならん」
と、きびしく娘を諭した。
そして懐ろから百万円の札束を二つばかり出して娘に握らせた。

「ともかくこれを持ってすぐ任務にかかりなさい。途中で金が足りなくなったら、全国どこの銀行でもかまわんから、そこでうちの銀行へ電話をかけさえすれば、いつでも何百万円でもひき出せるようにしておくよ」

3

その日の夕方の最終の長崎行きの飛行機に地味な背広の一見、中学か高校の教師風の、堂四郎と、若い女子大生風（つまり本来の身分そのまま）の祐未子が並んで乗り合わせた。

兄妹とは違うが、恋人としては年が離れすぎている。

まあー、親戚か、三、四年前の教え子と偶然会っての二人連れと考えれば考えられるが、どちらもあまり目立たない服装をしているので、強いて詮索の目を向ける人もいない。

二人が並びベルトをしめた。

「まだ怒っているのですか。局長さん」

堂が心配そうに聞いた。石島祐未子局長はあれから、仕事の計画をたて、その指示はてきぱきと示したが、その他の私事に亘ることは一切口をきかない。

ベルトを強くしめて、機が上昇しきり、水平位置をしめるまでは、唇をぎゅっとひき結んで、正面を睨みすえたまま一言も口をきかなかった。やっと禁煙とベルト着用のサインが消えた。ベルトをほどくと彼女はむっとした顔で堂を睨みつけるといった。

「ともかくあんたはばかよ。女心が一つも分からないんだから」

それからハンドバッグから、一つの手紙を取り出した。

それは、分厚い封書で、封筒も一流の和紙店で特製させたらしい高価な物であった。中には、いわゆる水茎の跡美しいという形容が丁度ぴったりの手紙が入っている。

表に宮内庁の文書課の受取り印がある。宛名は、ある方の名が書いてあるが、あまりにも畏れ多いというので、そこは白い和紙でおおわれていて、手渡された二人にも、読めないようになっている。しかもそれを二人に手渡すとき、脇坂教授はきびしく注意した。

「内容を読めば、どなたにあてた手紙か分かる。だからその白い紙におおわれた宛名を絶対見ないように。もし見るとこの一件の依頼者は、その宛名の方ということになり、重大な政治問題になりかねない。あくまで宮内庁とふだんお出入りを許されている私個人が相談して、勝手に行なったことにしたい」

だから二人はその手紙をバッグから読み直しのため出すときもあたりに注意した。もっとも乗るときに、一番前の壁に面した席に坐ったから、二人だけで見ている分にはのぞかれることはない。

『このお手紙は決して私情や、怨みで出したものではありません。

あくまで日本を愛し、この国の将来を憂える気持ちから、重大な決意をし、女の身で非礼ではありますが、ここに敢えてお手紙を差し上げたしだいであります。』

字はたしかに女の手だ。それもかなりの名のある書家に習った品格のある筆遣いだ。しかし文章を考えたのは男か女か分からないちぐはぐのところがある。どこかの男が口述し、せいぜい女らしく見せるために、ときどき女言葉らしいものを入れるのを女の書家がそばで聞いて、そのままさらりと書いている感じである。

『いよいよご子息の成婚も間近で今回のご慶事、国民の一人として、心からお喜びを申し上げるしだいでございます。

ただいま、そのお相手のお姫様の候補も十家に絞られて、その中であらゆることを慎重にご調査なされていることを伺い、まことにお目出たい限りでございます。

さて、もし万一にも、ちりほどの瑕瑾もあってならない今回のご慶事に対して、国民の一人としては、どうしても愛国の至情からは黙っていられないことでございますので、敢えて女の身の差し出がましいことでございますが、ここに筆を執ったしだいでございます。

それは九州長崎から、十キロほど行った、さる山間地帯を戦国時代より領有する大名で、明治新政府成立のときは二十万石待遇で侯爵の封位を賜わりました、山村家のご令嬢の件でございます。

もちろん次女のみゆき様については、学習院の成績もよろしく、お人柄もまた明朗で活発、お体もご健康で、どこといって非の打ちどころのないお方でございます。

ただもし、日本国家永遠の発展のために申し上げにくいことを敢えて申し上げさせていただくなら、姫のお祖父様の弟君が町のいやしい女と、心中事件を起こしたことでございます。

これをぜひお調べのうえ、今度のご選考にお臨みにならないと、いずれ週刊誌に書きたてられ、とんでもないことになります。

以上、日本を思う愛国の熱情が敢えてこれを書かせたのでございまする。何とぞ苦衷お察しのうえ、微意お汲みとりくださいませ。

かしこ』

もう既に何度読んだことであろう。

全体はいかにも、我が国の尊き家庭のご慶事に、少しでも傷がついてはいけないという忠節の思いを訴えているように見せかけているが、その心の中は邪悪な感情に満ちている。

卑怯な密告という手段は、たしかに憎むべきである。当人の父母の代ならまだしも祖父の弟といえば、もはや当人には全く関係のないことで、普通の世界ではまるで問題にもならないできごとであるが、しかし、ただの家の縁談とは違う。

もしこのことが、週刊誌や、今はやりの写真週刊誌での恰好の話題になって、連日のようにあちこち書きたてられたら、当人が可哀そうだ。普通の人と平穏な結婚をしていたら、全く世間に知られないですんだ恥を敢えてさらすことになる。

問題はそのいやしき女というのが、どのくらい、いやしい女だったかということと、心中がどんな形で行なわれたかということだ。

首つりや、凄惨な血まみれだったら、やはり、そのことが表面に出ないよう、この縁談そのものを見送ってしまうのが当人のためにも幸せであろう。

二人とも考えは同じだ。

しかし今のところ、局長と堂との間が必ずしもうまく行ってないで、自分たちの結婚問題でやや睨み合っている状態なので、その件については充分な意見の交換をしていない状態だ。

二人はもう任務についているのに、しかもこの探偵局始まって以来の重大な任務というのに、まだ打ちとけた話し合いは一度もしていない。

「ともかく私たちは今度こそ絶対に目だってはなりません。だから行動に便利なベンツを持ってこなかったのですからね。徒歩、バス、そしてレンタカーで困難な調査をしなくてはいけませんよ」

どことなく言い方もよそよそしい。それに対して堂も他人行儀な声で、

「はい承知しました」

とそう答える。

もうあたりがすっかり暗くなるころ長崎空港へ着いた。

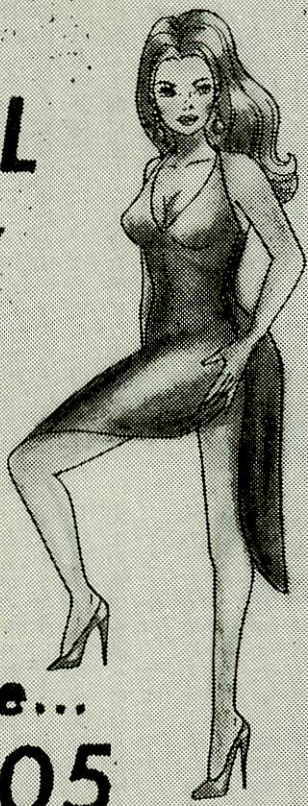
空港の前からタクシーを拾い、乗ってからきいた。

「どこか山の中の町らしいが昔の殿様の山村伯爵家のご領地のあった市を知らないかね」

そう堂がきくと、運転手は車を動かしながら答えた。

「旦那は東京からいらしたのですか。今、大勢のマスコミの方が来ておられますよ。あの町には」

WGIRL
to show
OU—
ng goes
ONI
Anytime...
32—6105



E MICHIGAN

「我々はマスコミとは何の関係もないよ」
堂は少しどきっとして答えた。だがそこは石島局長よりはいくらか年をとっているからとぼけ方がうまい。
「何でそんな山の中の町がマスコミに関係があるのかね」
「いくら隠してもだめですよ。あんた方がこの土地の人ではないということはいっぺんに分かりますたい。その山村のお殿様の領地を山の中の町というたのが何よりもの証拠ですたい。ばってん、山村市は、実は山に無くて海に面した大きな湾になっとりますたい。知らん人は山村だから山の中とこう思いますし」
「なるほどね。でもただそれだけでは、何もその町にマスコミが集まる理由がなかろうに」
「いやいや、そうではありませんたい。今のお殿様の次女のみゆき様に大変なお目出たいお話が持ち上がっているのですたい。我々臣下の者としては、そのお話がどんなものであるかはあまりにも畏れ多くて、とても申し上げられませんし、まだ何も決まったわけではありませんので、県民はそのことについては今から軽々しく発言をしないようにときびしく申し伝えられていますたい。私も決してここでは何も申し上げないことになっています」
そう重々しくいうわりには口が軽い。
「ともかくその話は私たちは初めてきいたが県民の間にそうきびしく言い伝えられているのなら、軽々しい発言は私たちも慎むよ。私たちは、ただ古い歴史上の事実を調べに行くだけだからね」
「そうですか。ではマスコミの方ではないのですね。それで私も安心しました。まあー、今のお嬢様に関係のないことなら、何でもきいてください。何でもお答えできますたい。実はね、私は生まれは山村町でしてね、今はもう立派な市になっております。今度のことのご成功をただひたすら待ち望んでいるものですたい」

これだけおしゃべりなら、この運転手から何かそれに関して聞き出すのはわけはなさそうだが、こういうことはストレートに問題に当たるより、遠回しに少しずつ聞いて行って、結局外堀をきっちり埋めて行くようにしてすべてを知ったほうがいい。今度は局長がきいた。

「私たちそんな最近のことには何の興味もないのよ。あるのは古い山村藩の歴史上の事実だけなの。戦国時代でもいいし、ずっと下って明治時代でもいいの。山村藩が全藩あげて争って憎み合ったどこかの藩がないかを探しているのよ」

「そらありますよ。あの町では、今でもわざとそちらのほうへ足を向けて眠るし、家を作ったら便所の位置は必ず、その藩のある方向へ向けて作るというぐらい憎しみ嫌っている藩があります」

「まあー」

何だかぴったり狙いが決まりそうで思わず声がはずんだが、そんな思いが相手に悟られてはいけないので、わざと押えて、ごく冷静な歴史を研究している学生の態度をとってきいた。

「それはどこの藩かしら」

「それは岩手県の県北にある、北奥藩ですよ。そこの藩は茂木様という方がお殿様でしたが、戦前の貴族院の廊下ではすれ違うとお互いにそっぽを向いたそうですよ」

「そうですか。なぜでしょうね」

「さあ、そこまでは私は知らんがね。ばってん、北奥藩の人も、私ら山村藩の人間のことは、まるで鬼のようにいうてるようですたい。まあ、遠いから、お互い縁組のことなどは起こりようはなくてよかったのですが」

そこまで言ってから急に運転手はきいた。

「あんたら山村市は初めてのようだけど、どこか宿の予約をしておりますか」

「いや、全然」

「それでは今からではどこも無理ですたい。マスコ

ミがいっぱい来てますでね。それにお二人は恋人にしては年が離れすぎていますし、親子というには近すぎる。こういう組み合わせは不倫ものいうて、この県では一番嫌いますたい。何しろ物固い県ですでの。どこもいきなり行っても泊めてはくれませんよ」

「それは困ったわ。私たち親戚どうしで別に不倫な関係でも何でもないのよ。まさか外で眠るわけにはいかないし」

「まあ、私に任せておきなさい。私の母が山村の町の真ん中で、あまり大きゅうはないが、旅館をやっております。そこなら何とか今からいうても泊めてもらえますたい。でも部屋は一つですよ。いくら親戚いうても年ごろの女子のいますたい、布団だけは、二つ別々に敷かせますがな」

とうとう、運転手のペースで、彼の母親が経営する旅館に連れられていってしまった。

4

ほんの商人宿を少し上等にしたぐらいの宿屋だが、ここへ来て二人は初めての経験をした。

小さな風呂場があったが、中から鍵をかけて二人だけで入ったのだ。

「うわーっ恥ずかしい」

これまで堂の前で素っ裸になって立ったことが何度もあるのに、手拭一つ持って、狭い風呂場に立ったときは、思わず祐未子はそういって体中を真っ赤にした。

乳房と下腹の今はかなり色も濃くなってきた茂みの上を、手拭で押えた。そして片足ずつそっと風呂桶へ入れて、肩まで湯の中にひたしてから、その外に手拭で前を押えるのも忘れて呆然と立っている堂に、

「何をぼんやりしているの。もう冬よ。そこで立っ

ていたら風邪をひいちゃうわ。早く入りなさいな」
といった。堂がおずおずと答える。
「あのう、ぼくそこへ入っていいんでしょうか。今、物凄く局長に嫌われているんでしょう」
「ばかね。ずっと好きよ。好きだから怒ったんじゃない。そんなこと男のくせに分かんないの。早く入って、『君が好きだよ』と、お風呂の中で強く抱きしめてよ。喧嘩はこれで終わりよ」
「ありがとうございます」
堂は狭い風呂桶の中へむりに体をわりこませるようにして入ってきた。
「局長、あんたが大好きだ。好きで、好きでたまらないぐらいだ」
「でも結婚するとなると、あんたが養子になるのよ」
自分の滑らかな体を、彼の膝の上にチョコンと腰かけるようにして、何度も唇をよせるようにして、頬や首筋にキスしてやると、そういった。
「ぼくは四男です。だからいつでも養子に行けます。ただし宮内庁の許可がいるので、この間から秘かに何度も書類を出していたのです。勝手なことをしてすみません」
「いいのよ。本当は嬉しかったのよ」
すっかりもとに戻った二人は、大事な任務も忘れて、風呂場の中で、しばらくは戯れあった。二人とも時間をかけて充分に温まって出てくると座敷の膳には、さすがに海浜の町らしく、海でとれたばかりの新鮮な魚介類がたくさん並んでいる。
今日は朝から忙しかった。まずコップでビールを乾杯してから、日本酒を飲み、おいしいご馳走に手をつけ出した。
そこに、
「失礼をばします」
そう丁寧な言葉がかかり、老女が一人、うやうやしいおじぎをしてから入ってきた。
さっきの運転手が自分の母親だといった宿の主人

らしい。
「先ほどは息子の車をご利用いただいて、まことにありがたいことでございますたい」
「いえ、こちらこそお宿まで紹介いただきまして」
祐未子が一応そう挨拶する。
「何しろ最近は年の暮れのことでもありますし、めっきりお客さんも減りまして、ずっとどこもガラガラでございまして」
随分、さっきの息子の運転手のいう話とは違うようだ。
「何かマスコミの方がいっぱいやってきて、どこの宿屋も満員とかききましたが」
「いえとんでもない。町の中心の目抜きの大通りの二、三軒の東京資本の大ホテルに、五、六人の週刊誌の記者が、殿様のご次女のみゆき姫のことについて、この町の中学に二年間お学びになったことがあるとのことで何やら昔のお話など聞きにきたぐらいです。それもほんの一週間前で終わりまして、今はどこもガラガラで殆どお客の影も見えません」
「そうですか」
何だかがっかりしたが、よく考えてみるとそのほうが取材しやすい。
この婆さん、話し好きらしく、自分で徳利を持って二人に注ぎながらいう。
「お客様方は歴史を勉強なさっていて何か古いことをご研究とか、ききましたが」
「ええ、この藩が、どこかの藩と非常に憎しみ合っているとか、激しい戦争をしたとか、何かそういう歴史的な言い伝えはないかと思ってやってきたのですが」
「そうですか」
ビール瓶をおくと、その老婆は、まるで我が意を得たりとばかりにいった。
「実はそれがあるのですたい。私の父は昔の中学校で歴史の先生をしていたので、私は幼いころからよう聞かされて知っておりますたい。父は立派な先生

でしたのに、息子はどこへも就職せずに、まあ、好きで車の運転手をしていて、私は困ったことだと思っておりますたい」

話し好きの常として、しゃべり出すとつい横道へ入って、行き先が分からなくなるおそれがある。あわてて話を元のほうへひき戻そうとした。

「それはそれとして、どこの藩と仲が悪かったのですか」

「ああ申しわけありません。東北の岩手県と青森県とのほぼ県境にある、北奥藩で、そこの藩主の茂木家とでありますたい。今ではこの町の人は全部、北奥藩のあるほうに足を向けて眠るし、お便所はそちらのほうへ向けて作るほどです」

「それはさっき息子さんから聞きました。ただそれが何の理由か分からないのですが」

「ああ、そのことですか。昔、山村のお殿様と茂木のお殿様は、ご兄弟であったそうです。戦国の時代に、徳川家康様がそれぞれ違うお局のお腹からお生ませになったお子で、とてもお可愛がりになって、よく戦場へ連れて行ったそうです。そして世の中が平和に治まったときは、一人は九州の諸大名の動向を監視し、今一人は東北の有力諸藩の動きを制するために、離れた所に領地を賜わったそうです。一つにはこれは中央の将軍家のそばにおいておくと、逆に将軍の地位を狙う者との疑いをかけられて、兄に亡ぼされる恐れもあるので、わざと遠い所に配置した家康様の親心もあったと聞いています」

「そんな間ならいっそう仲が好いのではないのですか」

「それがまあ、明治ご一新の直前に急にうまく行かなくなったのでございます」

「まあー」

「つまり、九州は、薩摩が近く、勤皇志士の往来が多く、自然時勢を見る目も養われて、ご一新には朝廷方について大いに勤皇の誠を尽くしました。それに対して北奥藩は何しろ東北の山の中の町のことで、

時代の動きというものがまるでのみこめない。それで、ついその流れに乗りおくれ、朝敵として官軍と戦う羽目になりました。それでご一新後に、うちの殿様は侯爵をいただいたのに、北奥藩の茂木家は二段階も下の子爵しかもらえないことになり、それ以来お互いに相手を、朝敵、恩知らずと呼び合って罵り合うようになりました」

「そうですか。そんなことが原因でしたか」

「ところがもっと大きい仲違いの原因があります。今のお殿様のお父さんに当たる人に妹さんがいたのです。つまりお嬢様のさゆり姫様に当たればお祖父様に当たる方ですが、その方の妹様が、それはそれは、お美しい方でした。時代によって女の美しさの特徴は変わりますがそれでもやはりほんとに美しい方はいつの時代でも美しいので、現在のさゆり様よりももっと美しいお方で、当然、高貴なお血筋にお嫁に行くと思われていました」

少し祐未子はあわてた。

どうも、密告の手紙の内容とは違う。密告の手紙では、祖父の弟が何かいやしい女と心中事件を起こしたことになっている。噂とはいかに頼りないものかが分かる。男と女とここでもう狂っているのだ。

しかもこんないい加減な聞きかじりなどで、尊きお方に手紙など出してそのお心を悩ますなどは以ての外のことだ。

「丁度妹姫様が美しく成人なされていたときは、戦争も末期のもう日本の敗戦が目の前に見えていたときでした。この町の岬の外れには、沖縄や南海諸島に向かう特攻機の出発基地があったのですたい」

そこまでしゃべったとき、その婆さんはあわてて口をつぐんだ。

「ええですか。これから先は軍の機密で、この町でも、古くから住んでる人しかよう知らんことですたい。知ってる人も、絶対よそにしゃべらんということを固く守っております。あなた方はこの町の歴史を勉強に来た方でマスコミの方でないですたい、

ばってんお話ししますが、絶対マスコミの人には、言わんようにしてください」

「もちろんですとも、お聞きしたことは誰にもしゃべらないようにしますわ」

やはり何か秘密があるらしい。

二人は息をのんだ。

老婆は話しだした。

「その特攻基地にある日、陸軍中尉の軍服もりりしい青年士官がやってきたのです。当時特攻基地に勤労奉仕に行っていたお姫様は、この青年士官を知り、お互いに絶世の美男美女どうしで一目で愛し合ってしまったのです」

特攻というものがどんなものか、陸軍中尉という階級がどのくらいの位か、それについての知識が全くない祐未子も、この九州の浜辺の町で美男美女が会えばどうなるか大体分かる。

「ご存じのように特攻は行ったら帰れぬ飛行機です。出発命令は八月十六日と決まっていました。その日まで待って、姫様が白い衣裳で飛行機に乗って、一緒に敵艦に体当たりして玉砕することにでもしていたら、この話はこの山村市では今ごろ町の誇りとなってみなに伝えられたでしょう。でも姫様は、その士官に、父から秘かに聞いた話をして『日本はもうじきポツダム宣言を受諾して降服するそうよ。ほんの三日か四日の違いで死んでしまってはつまらないわよ。父の作った山小屋が、山脈地帯の奥にあるから、一緒にかくれましょう』としぶる将校をひきずるようにして九州女の情熱で山の中へかくれてしまったのです。でも当時の日本の憲兵の力では、そんな二人は三日もたたずに見つけ出され、山の中で行なわれた即決軍事裁判で、二人とも犬ころのように射殺されてしまったのです。戦場離脱罪は死刑以外の条文がなかったからですたい。そしてその日が八月十五日の早朝で、すぐ正午にポツダム宣言受諾の放送が、日本中に流れたのです。もう三日か四日か我慢していさぎよく特攻の出発の日を待っていた

ほうが二人とも生きて無事結ばれたのに、結局、半日違いで国賊となって殺されてしまったのですたい。自業自得ですが可哀そうなことです」

「まあー」

「その相手の方が、やはり何の因縁か、北奥藩のご子孫の茂木子爵のお世継ぎのご長男で、普通こういうお方は、特攻隊には選ばれないのですが、ご自分で維新のときの朝敵の子孫だからというので、すすんで血判志願されたそうです」

「なるほど。不思議な因縁ですねー」

「まっこと不思議ですたい。憲兵が山小屋に隠れた二人を見つけて射殺するさい、当主の妹様の姫様のほうがずっといさぎよく立派で、若い北奥の茂木家のぶるぶる震えている若君の体をしっかり抱きしめて、どんなことがあってもその体を離さないように頬をこすりつけていったそうです。『射つなら一緒に射って。どうせ生きていても、私たちは一緒になれないどうしなんだから』といったそうです」

「じゃ妹姫様はもしかして、たとえ戦争が無事終わっても二人は結ばれないことは承知のうえだったかもしれませんね」

「多分にそういうことはあったようですたい。ここでこの二人の死については、当時の軍事日本としてはあってはならない問題ですし、ほんの三、四時間後には、正午の玉音放送があったりで、公(おおやけ)に発表すると、あちこちに別な方向から批難が集中して、どんなにしても穏やかに解決しないということで、関係者の間で重要軍事機密とすることにしたのだそうですたい」

「よく分かりました」

長い話で、日本酒が冷えてきた。

「温かいのを今、女中に持ってこさせます。どうも長いおしゃべりしてしまいました。お許しくださいませ」

そういって宿のおかみは出ていった。

5

翌朝は長崎の町でレンタカーを借りて、昔の特攻基地へ行き、それから宿の婆さんに描いてもらった地図を頼りに、海岸線にそった道をしばらく走って長崎半島の真ん中へんまで行ってから熊ガ峯の山径へ入ってかなり奥まで登った。

その地図に示す山小屋はちゃんとあった。山道で車を止めて、彼らは草むらを越えて入った。

そこはここ何十年もの間、誰も入ったことがないように完全に道は草でおおわれ、小屋もまた半ば朽ちていて今にも崩れそうであった。

考えてみれば、もう四十一年もたっているんだ。誰も住んだり手入れしたりしなければちゃんとした家でもこわれてしまう。まして山小屋だ。殿様の持ち物だったから人が怖れて近よらず形骸だけでも残っているのだ。

今にも幽霊が出そうであった。

一目見てぞーっとして探偵局長はいった。

「帰りましょうよ。これでいいのよ。もうこれだけ客観的に調べたのだから、このとおり宮内庁へ報告を出せば、我々の任務は終わるわよ。何だかぞくぞくしておしっこが出たくなってくるし、こんな所でするのいやだし」

家の中へは一歩も入りたくないらしい。強く堂の袖をひいている。

堂もやはり無気味な思いは一緒だ。

「うん、まあ、ここは外から見るだけでいいだろう。しかしこういう仕事は民間の仕事と違いますからね。とことんまで慎重にしなくてはなりません」

携帯用のカメラを出して、回りから何枚も写すとやっとその山小屋のある谷間を出て、山道へ戻った。そこで堂は急に言い出した。

「実は昨日から考えていたのだがね。私はあの婆させんの話には少し矛盾があると思う。それは町の主

な人の間に嘘と分かっていても重要軍事機密として伝えられ、幾らかの古い人々の間に固く信じられたのだろうがね……それで今は事実めかして伝えられて一般の真相になってしまったのだろうが、どうもこの小屋を見ているうちに一つ腑に落ちないことが考えられてきたのだよ」

「それはどういうこと」

「すぐれた探偵は、その推理をある程度、事実で明らかにされるまでは、仲間にも教えないと、メグレ警視のシリーズの中にも書いてありましたよ」

とたんにまた、祐未子はぷーっとふくれた。

「じゃ、私にもその推理を教えないというの。私は局長よ」

「ともかく、もう少しぼくに黙ってついてきてください」

「まあー、意地悪。ケチ！」

と睨むのを、いきなり、リーチの長い腕がぱっとひきよせ、唇を押しつけてキスした。いくら山の中で人目のない所だといって、あまりといえば、あんまりのふるまいだ。

胸と胸とがひきよせられて固く丸い乳房が痛くて潰れそうになるほどに強く合わされる。ともかく唇だけ放して首をのけぞらせ、あいた両手を拳にして握りしめ、どんどんと首や肩を打つ。

「やめて！　エッチ、大声を出すわよ。チカン」

「ここではどんな大声を出したって誰も来やしませんよ。ともかくあなたは黙ってついて来なさい。どうもここらあたりにこの事件の鍵がありそうだ」

そういうとまた祐未子の唇を強く吸った。

こんな山の中ではいくら抵抗しても、もうどうにもならない。仕方なくキスを許す。

昨夜、久しぶりの夜の宿の新しい布団で、新鮮な欲情がわきたぎって体がうんと燃えたというのに、この人は何でこんなに女好きなのだろう。

これが全部、自分一人に限られているのなら、まあ、許せるが、もし他の女の人にすべて広く及ぶも

のなら断じて許せない。
そのときはこちらが若いんだから、毎夜、体力の続く限り絞り尽くして、絶対に他の女に目が行く余裕がないよう、してやるだけだ。
早くもそう固く覚悟を決めると、そこで初めて相手の唇を思いきって受けた。
「好きよ。私も。でもこんなキスを他の女の人にしたら私は絶対、殺すわよ」
「ああいいよ。あんたに拾われなければどうせもう死んでいる体だからね」
「それ浮気するという通告？」
「いやもう他の女とは話もしないという通告だよ」
「じゃ、許してあげる」
あたりには誰もいない。これだけの情熱だ。今すぐにでも草むらに押し倒されるかと思った。こういう所で青空を仰ぎながら、大自然とともに、いとなむのも悪くないと思った。彼の肉体も、また強い昂奮状態にあるのはズボンの上からもまちがいなく分かった。
ところが彼は唇を放し、強い抱擁をとくと、
「すぐ空港へ戻ろう。そこでレンタカーを乗り捨て、料金を精算したら、大阪行きの飛行機を探すのだよ」
と早くも手をひっぱって歩き出す。ややはぐらかされた感じの祐未子は、
「なぜ、いま大阪なの」
と聞く。
「そこから京都までタクシーでぶっとばす。家に帰る。といって、母や兄きに会うわけではない。ある本を探す」
「どんな本」
車の運転は今のところ祐未子の役だ。車にのりこむとすぐエンジンをかけた。
「昭和十八年版のと十九年版の華族譜要といって、各華族の家庭の、当主や家族のその年の年齢や、職業、在学中の学年、軍隊の配属地などが書いてある

本だ」
「なぜ必要なの」
車は今度は、山道を慎重に下りて行く。レンタカーは、車体を見て、傷の有無を調べられる。金などいくらかかってもいいが、その査定のため時間がとられるのが勿体ない。そういう交渉案件はないに越したことはない。
堂は助手席で、山道なのにちゃんと律儀にベルトを肩からかけた。
「きゅうくつだが仕方がないね。大体、人の少ない町ほどお巡りさんは交通違反の監視に熱心だ。根掘り葉掘り聞く。そんな取調べに三十分もとられたら大変なことになるが、向こうは他の仕事がないからやたらに人に長い説教たれたがる」
それから思い出してか、
「ああその華族譜要で、山村家と、茂木家の前世代の家族構成を調べる」
「そんなことあたり前じゃないの。だからなぜ調べるのかと聞いているのよ」
「それは捜査の秘密」
「ばかーッ！　知らない。意地悪いうと、谷間へ車を落っことして、一緒に死んでしまうから」
「いや、多分京都の段階で、確認できる。そこでゆっくり話す。まだぼくもあやふやな状態だから、いいかげんなことを言いたくないのだよ」
車が長崎へ帰ると、空港のレンタカー事務所で、別に割増料金を払わずに無事返却した。
幸い一時間後に大阪行きの直行便があった。
今や神意がこの問題解決のために手助けして、二人はまるで激しく回転するコンベアーにのせられたように動いて行く。
大阪でタクシーを捕まえ、京都に向かう。四条東の商店街を少し入った所に、未だに二千坪もありそうな黒板を塀にした大きな邸があった。
『堂』
と一字だけの表札がかかっている。

そこへ一人でぐんぐん入って行く。庭番や家事手伝いの婆さんらしいのがあわてて出てきて彼の回りにすがりつくようにしてたずねる。

「これは若様、今までどこへ」

「母上がお待ちかねです」

などというのを急に京都弁になって答える。

「今日は時間がないさかいな。挨拶はせなんで帰る。ちょっと書斎に入るでー」

勝手にどんどん中へ入って行く。

昔は立派な御殿だったらしい造りの邸を珍しそうにキョロキョロと見回しているうちに、幾つか大きな部屋を通りすぎて、和書や洋書がぎっしりと積まれている部屋へ入った。

そしてそこに明治年代からずらっと並んでいる華族譜要の中の昭和十八年と十九年とを二冊出して広げた。

「どや」

言葉まで京都弁になって堂がいう。

そこには、山村家と茂木家のことが、ページをおいてのせられている。

「手紙の記述のほうが正しかった。九州の山村家にいたのは美しいお嬢さんやなくて、若君だった。陸軍中尉と書いてあるやろ」

「本当だわ」

祐未子はびっくりしていう。

「茂木家のほうを見てごらん」

「ええ、こちらのほうがお嬢さんになっているわ。堂君はどこでどうしてこのことを感づいたのよ」

「つまり、山村家の今のお姫様の祖父が心中したというのは多分事実なんだ。でもそれじゃ、戦国以来武門の名をほこる名家に傷がつく。そこで死んだのは女にして、次男はどこか南方ででも行方不明ということで、世間をごま化してしまった。茂木家のお嬢様は、東京で在学中にこの次男の若君と知り合い、後を追って九州へ来た。そして必死に面会を求めているうち、特攻基地にいて、近く片道出撃するとい

う事実を知って、男に誘われるがままに、男が哀れで一緒に逃げ出したのだろう」

「恐ろしいことだわ。なぜそんなことしたんでしょう」

「それは二人とも愛を知り、その悦びを肉体で味わってはもう死ぬことなどできなくなったからだよ。多分その娘さんのことなら茂木家の領地の岩手県の奥の北奥藩の城下町へ行けば、今でも覚えている人がいると思う」

「そうでしょうね」

「別にそこまで行かなくても、この段階でこの事実は報告できる。せっかく、ご縁談があった今の山村みゆき姫には、甚だお気の毒だが投書の事実は大筋において間違いない。ただ地元では早くからこのことを恥じて、もう四十年も前から慎重に隠蔽工作の手を打っていたんだが、やはり真実は隠せなかったということだ」

「そうね。今、ここで縁談が決まって逃亡事件の真実が明らかにされるのはちょっと残酷だわ。この国家的な大きな縁談をみゆき姫の身辺から、自然に流してしまうことのほうが、今さら事件がほじくり出されなくて当人のために幸せでしょうね」

そこへいかにも堂上華族の正夫人らしい、品のよい老婆があらわれ敷居際で丁寧に挨拶した。

「これはこれはよういらっしゃいました。四郎が大変にお世話になり、いつぞやは生命まで助けていただいたそうで」

どうも母にはときどき手紙を書いているらしい。

「いえ、ただ少し、お寿司やカツ丼を喰べさせてあげただけで、何もしたわけではございません。どうもすみません」

一応馴れぬ正座をして、頭をぺこりと下げたが、スカートが短いから、膝小僧からもっと奥のほうまでむき出しになってしまって、困ってしまった。

「母上」

と堂が改まっていった。

「はい」
と母は優しい目を向ける。
「三つお願いがございまする」
「何でしょうか」
「一つはこの事件、宮内庁へ正式な書類で返事を出さなくてはなりませんが、その書式を私は全く存じません。内容を用箋に書きますので、今日の夕方までに代筆していただけませんか」
「ええ、いいですよ。こういうことはすべて正式な手続きをもって行なわなくてはなりませぬ。私がして進ぜましょう」
「もう一つのお願いは、この手紙の書き手が誰か大体のご判断をお願いします」
そういってから、祐未子のハンドバッグの中から、宮内庁へやってきた手紙を出させて母に見せた。
表の宛名書きが白紙でおおわれているのを見て、母は急に緊張して、襟元や、膝などを正して、坐り直した。背筋もりんとする。
そっと小声で堂は祐未子にささやいた。
「局長。母はね。藤原能成の跡を継ぐ、全国の書道の家元でね、同時に日本一の書の鑑定家でもあるんだよ」
祐未子もびっくりする。小型の母堂の体にまるで仁王様がのりうつったような、全身の気迫がみちてきた。
じっと見入る。やがていった。
「この書き方は京都から流れて、みちのくへ渡った都風の女文字の一派の書です。最も隆盛だったのは、津軽藩、南部藩、伊達藩の奥向きのお姫様や、お国のご内室様の間でです」
大名の正室は江戸にずっと住んで国もとにはいないから城にいる奥方はご内室になる。
鋭く質問する。
「もし北奥藩の茂木家としたら」
「その可能性があります。戦争中、九州で急に行方不明になられたさゆり姫がお上手でしたが、その妹

様の、わかば姫様もお上手でした。今、姉のぼだいを弔うため仏門に入っているといわれていますが、それは、何でも姉の死が非業な哀れなものであったらしく、父上に無理に、命じられて仏門に入ったそうです。今でも、まだ父や国をお恨みし、あまり悟りきられない、品行がよくない尼さんだときいたことがあります。でも決してこのことは他に洩らしてはなりませんよ」

「はい分かりました」

堂は深々と頭をたれた。すべてが堂が考えた推理の筋道にあてはまって行く。

祐未子もだんだん胸がわくわくしてきた。

中年のお手伝いさんが、京風の菓子に抹茶を持って入ってきた。学習院内の茶道研究部の中でだけだが、少し裏千家のお点前をやっていてよかった。

ここでまごまごして一服のお茶もいただけなかったら大変な恥をかくところだった。

老夫人のほうが息子にきいた。どうも四郎は末ッ子で可愛くて仕方がないらしい。

「それであなたは先ほど私にお願いが三つあると申しましたね。もう一つ残っておりますが」

「それは、結婚したいのです」

「それで相手の方は」

「このお嬢さんです」

祐未子はびっくりしてさすがに真っ赤になって下を向いた。

「それは大賛成ですよ。私はさっきから嬉しくてなりませんでした。おきれいで、健康そうで申し分ありません。以前あなたの手紙がきたとき、石島家ときいて、古い家譜を調べさせていただいたところ、千二百年前に、一度、我が家と縁組みした記録も出てまいりました。もちろん、私は何の異存もありませんが、お嬢様のほうはどうなのですか。あなたは生まれつき慌て者だから、自分で勝手に決めても、お嬢様のほうにだって、選ぶ権利とやらがございますから」

すると石島祐未子は、またいったん坐り直し、一応形式的にスカートの膝をひっぱるだけはひっぱってから、正面を向き直ってきっぱりいった。
「私はその権利を放棄します」

6

東京へ向かう最終二十一時十七分京都発新幹線のグリーンに二人は並んで坐った。
「もうこれからはやたらに飛行機に乗ってはいけません」
という、母の言いつけに従ったのだ。もっとも京都―東京間ならこのほうが早い。
祐未子のバッグの中にこの事件に関して、堂の母親が和紙に毛筆できちんとしたためてくれた正式な書状がある。これで脇坂教授の国語の点も満点であろう。卒業も優等を保証された。
帰ったらすぐ結婚へ向かっての準備だ。
それ以後も探偵局をやるかどうかは、二人で相談しあってきめよう。
しかしともかく聞いておかなければならないことがある。
「ねえー、堂君。どうして山小屋へ行ったとき、そこで死んだのは、男女の、男が茂木家で、女が山村家の娘でなくて、男が山村家の若殿で女のほうが東北から来たさゆり姫だと突然ひらめいたの。そのへんの論理の転換の原因が分からないの」
「コーサンというかい。局長さん」
「いうわよ。コーサン。未来の旦那様」
「まあ、カンだといってしまえば簡単だけどそうじゃない。九州では女は家庭内ではいくら強くても決して一人前の人間扱いはされない。主人の妻でも雇人の後で風呂に入る。洗たくのたらいも別だ。もし日本が二、三日後、ポツダム宣言を受諾するという重大な秘密事項を、父から聞かされて身を隠したというのなら、それは明らかに男しかいない。女に

父がそんな話をするなんてことは戦前は絶対あり得なかったし、現在でも考えられない。だから水前寺清子は男のなりをして歌を唄う。九州女の理想の姿だ。強い男になっていばりたい」

「まあ、そんなものなの」

すり早く回りを見回してキスをすると、走り続ける新幹線の中で祐未子はいった。

「……わたしは、セックスの一部だけのぞけば心も体もすべて男ですからね、それだけはお婿に来る前に覚悟していてね。拳闘だって、から手だってやるんだから……」

この作品は、月刊「宝石」に昭和61年8月号より62年2月号まで連載された作品です。（編集部）

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

ユーモア・ミステリー　気まぐれ令嬢・移動探偵局

昭和62年2月28日　初版1刷発行　定価690円

著者　胡桃沢耕史（くるみざわこうし）

発行者　大坪昌夫

印刷者　塚越栄夫
東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替 東京 6-115347
株式会社 光文社
電話 東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。（ナショナル製本）
表紙の模様・意匠登録 116613　© Kosi Kurumizawa 1987

ISBN4-334-02687-7
Printed in Japan



KAPPA NOVELS

「カッパ・ノベルス」誕生のことば

カッパ・ブックス Kappa Books の姉妹シリーズが生まれた。カッパ・ブックスは書下ろしのノン・フィクション（非小説）を主体としたが、カッパ・ノベルス Kappa Novels は、その名のごとく長編小説を主体として出版される。

もともとノベルとは、ニューとか、ニューズと語源を同じくしている。新しいもの、新奇なもの、はやりもの、つまりは、新しい事実の物語というところから出ている。今日われわれが生活している時代の「詩と真実」を描き出す——そういう長編小説を編集していきたい。これがカッパ・ノベルスの念願である。

したがって、小説のジャンルは、一方に片寄らず、日本的風土の上に生まれた、いろいろの傾向、さまざまな種類を包蔵したものでありたい。かくて、カッパ・ノベルスは、文学を一部の愛好家だけのものから開放して、より広く、より多くの同時代人に愛され、親しまれるものとなるように努力したい。読み終えて、人それぞれに「ああ、おもしろかった」と感じられれば、私どもの喜び、これにすぎるものはない。

昭和三十四年十二月二十五日

光文社

〈カッパ・ノベルス〉出版目録

注 ・この目録は、各著者別にまとめました。なお、順序は、発行順です。
・＊印は昭和62年2月現在品切れ中です。

松本清張 長編推理小説
ゼロの焦点
眼の壁
波の塔
点と線
蒼い描点
黒い画集（全一冊 決定版）
影の地帯
砂の器
考える葉

松本清張 推理小説
危険な斜面
風の視線
黄色い風土
黒い樹海
時間の習俗
水の炎
松本清張短編全集 カッパ版全11巻
花実のない森
連環

松本清張 長編推理小説
蒼ざめた礼服
黒の様式
二重葉脈
弱気の蟲
D の複合
内海の輪
分離の時間
わるいやつら（全一冊 決定版）
けものみち（全一冊 決定版）
球形の荒野

松本清張 長編推理小説
梅雨と西洋風呂
聞かなかった場所
生けるパスカル
歪んだ複写（税務署殺人事件）
遠い接近
不安な演奏
彩霧（さいむ）
告訴せず
溺れ谷
強き蟻

松本清張 長編小説
高台の家
黒い回廊
混声の森
雑草群落（上・下）
馬を売る女
犬たちと殺人と
成吉思汗の秘密
白昼の死角
刺青殺人事件
霧島三郎

松本清張 長編推理小説
山峡の章
高校殺人事件
松本清張、長編推理小説
考える葉

松本清張 長編小説
炎

松本清張 長編推理小説
点と線

松本清張 長編小説
波の塔

松本清張 長編推理小説
眼の壁

松本清張 推理小説
ゼロの焦点

松本清張 長編推理小説
影の地帯

松本清張 長編推理小説
砂の器

松本清張 長編推理小説
考える葉

松本清張 長編小説
連環

松本清張 長編推理小説
球形の荒野

松本清張 長編小説
強き蟻

高木彬光 長編推理小説
刺青殺人事件

高木彬光 長編推理小説
検事霧島三郎

佐野洋 イヤミス・ミステリー傑作集
犬たちと殺人と

高木彬光 長編推理小説
成吉思汗の秘密

高木彬光 長編推理小説
白昼の死角

高木 彬光 長編推理小説
密告者

高木 彬光 長編推理小説
ゼロの蜜月

高木 彬光 長編推理小説
都会の狼

高木 彬光 長編推理小説
炎の女

高木 彬光 長編推理小説
霧の罠

高木 彬光 長編推理小説
追われる刑事

高木 彬光 長編推理小説
灰の女

高木 彬光 長編推理小説
一、二、三——死

高木 彬光 長編推理小説
能面殺人事件

城山 三郎 長編小説
乗取り

笹沢 左保 長編推理小説
愛人関係

笹沢 左保 長編推理小説
眠れ、わが愛よ

笹沢 左保 長編推理小説
地下水脈

笹沢 左保 長編推理小説
求婚の密室

笹沢 左保 長編推理小説
他殺岬

笹沢 左保 長編推理小説
不倫岬

笹沢 左保 長編推理小説
無情岬

笹沢 左保 長編推理小説
逃亡岬

笹沢 左保 長編推理小説
愛人岬

笹沢 左保 長編サスペンス小説
悪魔の部屋

笹沢 左保 長編推理小説
悪魔の湖畔

笹沢 左保 長編推理小説
悪魔の関係

笹沢 左保 長編サスペンス小説
悪魔の人質

笹沢 左保 長編サスペンス小説
悪魔の誘惑

笹沢 左保 長編推理小説
悪魔の沈黙

笹沢 左保 長編推理小説
悪魔 岬

笹沢 左保 長編推理小説
同行者

笹沢 左保 長編推理小説
十五階の地獄

笹沢 左保 長編サスペンス小説
背信の詩集

笹沢 左保 長編推理小説
お前の名は地獄

三好 徹 長編推理小説
コンピュータの身代金

三好 徹 長編推理小説
モナ・リザの身代金

三好 徹 長編犯罪小説
オリンピックの身代金

梶山 季之 長編小説
人妻だから

黒岩 重吾 長編推理小説
廃虚の唇

黒岩 重吾 長編小説
女の小箱

黒岩 重吾 長編推理小説
女の氷河

黒岩 重吾 長編推理小説
闇の航跡

黒岩 重吾 長編小説
肌と金

黒岩 重吾 長編推理小説
詐欺師の旅

黒岩 重吾 長編推理小説
闇の肌

黒岩 重吾 長編サスペンス小説
夜の駐車場

黒岩 重吾 長編サスペンス小説
茜雲の渦

大藪 春彦 長編アクション小説
非情の標的

大藪 春彦 カー情報小説
全開で飛ばせ

大藪 春彦 長編アクション小説
俺に墓はいらない

大藪 春彦 長編アクション小説
裁くのは俺だ

大藪 春彦 連作アクション小説
東名高速に死す

大藪 春彦 連作アクション小説
曠野に死す

黒岩 重吾 長編小説
夜なき亀裂

小松 左京 SF長編小説
日本沈没（上・下）

大藪 春彦 長編連作アクション
破壊指令 No. 1

大藪 春彦 長編アクション小説
偽装諜報員

大藪 春彦 連作アクション小説
贅沢な被葬者

大藪 春彦 長編アクション小説
暴力列島

大藪 春彦 長編アクション小説
狼は暁を駆ける

大藪 春彦 長編アクション小説
マンハッタン核作戦

大藪 春彦 長編アクション小説
処刑軍団

大藪 春彦 長編アクション小説
処刑戦士

大藪 春彦 連作アクション小説
傭われ探偵

大藪 春彦 長編サスペンス・アクション
戦士の挽歌（バラード）（上・下）

島田 一男 長編推理小説
科学捜査官

島田 一男 長編推理小説
迷宮捜査官

島田 一男 連作推理小説
継続捜査官

島田 一男 長編推理小説
国際捜査官

島田 一男 連作推理小説
現場捜査官

島田 一男 長編推理小説
女捜査官

島田 一男 長編推理小説
検視捜査官

島田 一男 長編推理小説
広域捜査官

島田 一男 長編推理小説
機動捜査官

島田 一男 長編推理小説
特殊捜査官

鮎川 哲也 長編推理小説
沈黙の函

森村 誠一 長編推理小説
新幹線殺人事件

森村 誠一 長編推理小説
東京空港殺人事件

森村 誠一 長編推理小説
超高層ホテル殺人事件

森村 誠一 長編推理小説
日本アルプス殺人事件

森村 誠一 長編推理小説
真昼の誘拐

森村 誠一 長編推理小説
悪夢の設計者（デザイナー）

森村 誠一 長編推理小説
黒魔術の女

森村 誠一 長編推理小説
指名手配

森村 誠一 長編推理小説
黒い墜落（フォール）機

森村 誠一 長編推理小説
人間の証明

森村 誠一 長編推理小説
青春の証明

森村 誠一 長編推理小説
野性の証明

森村 誠一 長編推理小説
花の骸（むくろ）

森村 誠一 長編推理小説
誘う鬼燈

森村 誠一 長編推理小説
死定席

森村 誠一 長編推理小説
日蝕の断層

森村 誠一 長編推理小説
火の十字架

森村 誠一 長編推理小説
白の十字架

森村 誠一 長編サスペンス小説
大都会

森村 誠一 長編推理小説
凶通項

森村 誠一 長編推理小説
異型の白昼

森村 誠一 長編推理小説
悪しき星座

森村 誠一 長編推理小説
虹に立てる叛旗（はんき）

森村 誠一 長編推理小説
致死連盟

森村 誠一 長編推理小説
流氷の夜会

森村 誠一 長編推理小説
伝説のない星座

森村 誠一 長編推理小説
方丈記殺人事件

斎藤 栄 長編推理小説
謎の人命電話（ホット・ライン）

斎藤 栄 長編推理小説
謎の幽霊探偵

斎藤 栄 長編推理小説
女子大生短歌殺人事件

斎藤 栄 長編推理小説
OL現代詩殺人事件

斎藤 栄 長編推理小説
花嫁川柳（せんりゅう）殺人事件

斎藤 栄 長編推理小説
富士山麓殺人事件

斎藤 栄 長編推理小説
鎌倉静（しずか）の舞（まい）殺人事件

森村 誠一 長編推理小説
致死海流

森村 誠一 長編推理小説
密閉山脈

清水一行 長編推理小説
動脈列島

清水一行 長編推理小説
極秘指令

清水一行 長編企業小説
女教師

清水一行 長編企業小説
副社長

清水一行 長編企業小説
頭取室

清水一行 長編推理小説
女患者

清水一行 長編企業推理
憤死（ふんし）

清水一行 長編推理小説
処刑教師

清水一行 長編企業小説
冷血集団

清水一行 長編痛快ビジネス
大（おおもの）物（第一・二部）

清水一行 長編企業小説
闘いへの執着

清水一行 長編経済ピカレスク
悪名集団

清水一行 長編経済小説
女重役

清水一行 長編企業小説
欲望集団

西村京太郎 長編推理小説
伊豆七島殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
消えたタンカー

西村京太郎 長編推理小説
消えた乗組員（クルー）

西村京太郎 長編推理小説
発信人は死者

西村京太郎 長編推理小説
寝台特急殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
夜間飛行殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
終着駅（ターミナル）殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
夜行列車殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
北帰行（ほっきこう）殺人事件

西村京太郎 トラベル・ミステリー・傑作集
日本一周「旅号」殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
東北新幹線殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
雷鳥九号殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
「超特急つばめ号」殺人事件

西村京太郎 トラベル・ミステリー・傑作集
高原鉄道殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
北能登殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
寝台特急「日本海」殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
東京駅殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
上野駅殺人事件

西村京太郎 長編ユーモア・サスペンス
富士山麓殺人事件

西村京太郎 トラベル・ミステリー・傑作集
最果てのブルートレイン

西村京太郎 長編推理小説
特急「あずさ」殺人事件

夏樹静子 長編推理小説
蒸発ある愛の終わり

夏樹静子 長編推理小説
喪失ある殺意のゆくえ

夏樹静子 長編推理小説
目撃ある愛のはじまり

夏樹静子 長編推理小説
霧（むひょう）氷

夏樹静子 長編推理小説
光る崖（がけ）

夏樹静子 交通推理小説
77便に何が起きたか

夏樹静子 長編推理小説
遠い約束

夏樹静子 交通推理小説
密室航路

夏樹静子 長編推理小説
Wの悲劇

夏樹静子 長編推理小説
Mの悲劇

土屋隆夫 長編推理小説
妻に捧げる犯罪

土屋隆夫 長編推理小説
盲目の鴉（からす）

嵯峨島昭 連作推理小説
デリシャス殺人事件

嵯峨島昭 長編推理小説
美食倶楽部（クラブ）

石沢英太郎 長編推理小説
21人の視点

石沢英太郎 長編推理小説
九州殺人行

菊村 到 長編推理小説
首 桶 伝 説

草野 唯雄 長編推理小説
女 相 続 人

草野 唯雄 長編推理小説
もう一人の乗客

草野 唯雄 長編推理小説
火 刑 の 女

草野 唯雄 長編推理小説
山口線〝貴婦人号〟

草野 唯雄 長編推理小説
満月殺人旅行

草野 唯雄 長編推理小説
街は狙われた

草野 唯雄 長編推理小説
北リアス海岸殺人事件

草野 唯雄 長編推理小説
「阿い宇え於」殺人事件

川上 宗薫 長編推理小説
狙われた女

川上 宗薫 長編推理小説
寝室探偵

山村 美紗 長編推理小説
花の棺

山村 美紗 長編推理小説
百人一首殺人事件

山村 美紗 長編推理小説
エジプト女王の棺

山村 美紗 長編推理小説
燃えた花嫁

山村 美紗 長編推理小説
消えた相続人

山村 美紗 キャサリン傑作集シリーズ
京友禅の秘密

山村 美紗 長編推理小説
黒百合の棺

山村 美紗 長編推理小説
小野小町殺人事件

山村 美紗 キャサリン傑作集シリーズ
ミス振袖殺人事件

山村 美紗 長編推理小説
恋盗人

山村 美紗 長編推理小説
京都不倫旅行殺人事件

山村 美紗 長編推理小説
京都化野殺人事件

日下 圭介 長編推理小説
山頭火 うしろ姿の殺人

伴野 朗 長編アドバンテージ推理
必殺者

赤川 次郎 ユーモア・傑作集ミステリー
三毛猫ホームズの運動会

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの騎士道

赤川 次郎 ユーモア・傑作選ミステリー
三毛猫ホームズのびっくり箱

赤川 次郎 ユーモア・傑作選ミステリー
三毛猫ホームズのクリスマス

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの幽霊クラブ

赤川 次郎 ユーモア・傑作集ミステリー
三毛猫ホームズの感傷旅行

西村 寿行 長編サスペンス小説
遠い渚

西村 寿行 長編サスペンス小説
風は悽愴

西村 寿行 長編バイオレンス・ロマン
昏き日輪

西村 寿行 長編ハード・ロマン
汝は日輪に背く

山村 美紗 長編推理小説
成田空港殺人事件

福本 和也 長編ハード・ロマン
狼よ、逆潮を翔べ

福本 和也 長編アクション小説
大阪極道戦争

福本 和也 長編ハード・ロマン
新・大阪極道戦争

生田 直親 長編推理小説
K峰殺人事件

和久 峻三 長編推理小説
偽証法廷

日下 圭介 長編推理小説
告発者は闇に跳ぶ

山村 美紗 長編推理小説
謎の巨人機

福本 和也 長編推理小説
謎のエジプト女王の棺

福本 和也 長編アクション小説
暴力株式会社

福本 和也 長編ハード・ロマン
ロンド

赤川 次郎 長編サスペンス
おやすみ、テディ・ベア

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの推理

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの追跡

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの怪談

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの狂死曲ラプソディー

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの駈落ち

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの恐怖館

赤川 次郎 長編推理小説
顔のない十字架

赤川 次郎 ユーモア・サスペンス
ひまつぶしの殺人

赤川 次郎 長編推理小説
梓弓執りて

西村　寿行　長編ハードアクション
無　頼　船

西村　寿行　ハードアクション傑作集
二万時間の男

西村　寿行　長編ハードバイオレンス
妖　獣　の　村

西村　寿行　長編恐怖小説
滅　び　の　宴

西村　寿行　ハードサスペンス傑作集
闇　の　法　廷

西村　寿行　長編ハードロマン
ふたたび渚に

西村　寿行　長編パニック痛快
風　紋　の　街

西村　寿行　長編復讐小説
蘭　菊　の　狐

門田　泰明　長編サスペンス小説
濡れて探る

門田　泰明　長編医学サスペンス
癌病棟のメス

門田　泰明　長編超時空バイオレンス
大病院が霞える日

門田　泰明　長編伝奇バイオレンス
影　の　軍　団

西村　寿行　長編警鐘小説
鯊　鰐　の　宴

西村　寿行　長編ハードアクション
狼のユーコン河

西村　寿行　長編ハードアクション
黒猫の眸のほめき

西村　寿行　官能ハードアクション
群　狼　候

西村　寿行　長編ハードアクション
魔境へ、無頼船

西村　寿行　長編痛快小説
戯　竜　と

小林　久三　長編推理小説
スーパーゴリラ

宇能鴻一郎　長編推理小説
遠野殺人事件

高杉　良　長編企業ミステリー
対（たいけつ）決

檜山　良昭　長編スペクタル小説
日本本土決戦

檜山　良昭　長編スペクタル小説
ソ連本土決戦

檜山　良昭　長編スペクタル小説
アメリカ本土決戦

檜山　良昭　長編スペクタル小説
日本潰滅

檜山　良昭　トルーマン・ナヤーナル・スターリン
ポツダム三巨頭を消せ

檜山　良昭　長編冒険スペクタル
剣

檜山　良昭　長編近未来スペクタル
日本潰滅

勝目　梓　長編ハードアクション
血の狩人

勝目　梓　長編ハードアクション
地獄の狩人

勝目　梓　痛快ハードアクション
悪（わる）党

勝目　梓　長編ハードアクション
露（ろしゅつ）出

勝目　梓　痛快アクション
悪女は午前二時に眠る

内田　康夫　長編推理小説
小樽殺人事件

勝目　梓　長編アクション
血の狩人

勝目　梓　長編ハードアクション
地獄の狩人

勝目　梓　痛快ハードアクション
悪（わる）党

勝目　梓　長編ハードアクション
露（ろしゅつ）出

勝目　梓　痛快アクション
悪女は午前二時に眠る

内田　康夫　長編推理小説
小樽殺人事件

内田　康夫　長編推理小説
遠野殺人事件

内田　康夫　長編推理小説
倉敷殺人事件

内田　康夫　長編推理小説
津和野殺人事件

内田　康夫　長編推理小説
白鳥殺人事件

辻　真先　長編モノ推理
迷犬ルパンの名推理

辻　真先　長編モノ推理
迷犬ルパンの大活劇

辻　真先　長編モノ推理
迷犬ルパンの檜舞台

辻　真先　長編モノ推理
迷犬ルパンの蒸発

辻　真先　長編モノ推理
迷犬ルパンの犬疑

辻　真先　長編モノ推理
迷犬ルパンの挑戦

鷲尾　三郎　長編推理小説
北アルプス殺人組曲

長井　彬　長編推理小説
過去からの狙撃者

長井　彬　長編推理小説
奥穂高殺人事件

長井　彬　長編推理小説
槍ヶ岳殺人行

広瀬　仁紀　長編企業ピカレスク
乗取り屋

広瀬　仁紀　長編企業ピカレスク
約束された明日

広瀬　仁紀　長編企業小説
飛竜の如く

広瀬　仁紀　長編経済ピカレスク
仕掛け屋

島田　荘司　長編推理小説
寝台特急「はやぶさ」1/60秒の壁

島田　荘司　長編推理小説
出雲伝説7/8の殺人

島田 荘司 長編推理小説
北の夕鶴2/3の殺人

島田 荘司 長編推理小説
高山殺人行1/2の女

泡坂 妻夫 長編推理小説
花嫁は二度眠る

大下 英治 長編ペンス小説
視聴率ハンター

胡桃沢耕史 ミステリー・ムーモア・デカ
ズベ刑事

胡桃沢耕史 ミステリー・ムーモア・デカ
ズベ刑事コネクション

谷 恒生 長編伝奇バイオレンス
闘牌伝① 多魂の巻

谷 恒生 長編伝奇バイオレンス
闘牌伝② 幽冥の巻

谷 恒生 長編伝奇バイオレンス
闘牌伝③ 凶魔の巻

谷 恒生 長編伝奇バイオレンス
闘牌伝④ 奔雷の巻

南里 征典 長編推理小説
機密狩り コンピュータ・オーダーズ

小野 博通 長編医学推理
腎移植殺人事件

菊地 秀行 長編超伝奇バイオレンス
妖魔戦線

菊地 秀行 長編超伝奇バイオレンス
妖魔軍団

菊地 秀行 長編超伝奇バイオレンス
妖魔淫獣

夢枕 獏 長編スーパーバイオレンス
獅子の門 群狼編

山田 智彦 長編ビジ小説
重役室午前零時

山田 智彦 長編推理小説
24時間の罠

有明 夏夫 長編連作推理
汚名をそそげ

志茂田景樹 長編ユーモア推理
怪盗とジゴロと孔雀警視ー

志茂田景樹 長編ユーモア推理
怪盗とジゴロと孔雀警視ー II

井上 淳 長編ハードアクション
殺戮者

都筑 道夫 長編連作ミステリー
死体置場の舞踏会

津村 秀介 長編推理小説
宍道湖殺人事件

深谷 忠記 長編推理小説
0・096逆転の殺人

西木 正明 青春冒険小説
想い出のグリーングラス

本岡 類 長編推理小説
武蔵野0・82t殺人事件

岡嶋 二人 長編推理小説
コンピュータの熱い罠

中津 文彦 長編推理小説
千利休殺人事件

⊙アンソロジーシリーズ

鮎川哲也編 鉄道ミステリー傑作選
下り〝はつかり〟

鮎川哲也編 鉄道ミステリー傑作選
急行出雲

鮎川哲也編 鉄道ミステリー傑作選
見えない機関車

E・クイーン編 第1・2・3集
日本傑作推理12選 華麗なる賭け

石川喬司 結城信孝編
女は一回勝負する

⊙ノンフィクションシリーズ

トキワ荘青春日記
藤子不二雄

落ちこぼれ軍団の奇跡
馬場 信浩

従軍慰安婦・慶子
千田 夏光

野獣の刺青
福田 洋

奇跡の対話教育
磯村 懋

日本が叩き潰される日
落合 信彦

日本の地下人脈
岩川 隆

E・クイーン編
日本傑作推理12選

E・クイーン編
日本文芸推理12選&ONE

E・クイーン編 新庄哲夫訳
世界傑作推理12選&ONE

E・クイーン編
新世界傑作推理12選

現代ミステリー傑作選・上中下
生首コンテスト

鮮血ラブコール

白骨ハンティング
日本推理作家協会編

大西巨人編
日本掌編小説秀作選 [I][II]

阿刀田高編 〝黒い哄笑〟ニッポンの
ブラック・ユーモア傑作選

佐野 洋編 医学推理小説
ミステリー総合病院

石川喬司 結城信孝編
黄金の指

鎌田 慧
狙われた教科書

◉最新刊シリーズ

長編推理小説
山陰路殺人事件
西村京太郎

長編超伝奇バイオレンス小説
妖魔異伝 淫虐編
菊地 秀行

長編推理小説
「ガラスの城」殺人事件
小林 久三

長編ハード・ロマン
極道株式会社
福本 和也

長編企業小説
逆転の歯車
清水 一行

長編痛快小説
夢想幻戯
西村 寿行

長編推理小説
鎌倉流鏑馬殺人事件
斎藤 栄

長編推理小説
白馬山荘殺人事件
東野 圭吾

長編推理小説
函館駅殺人事件
西村京太郎

名探偵キャサリン傑作集Ⅲ
京都絵馬堂殺人事件
山村 美紗

長編推理小説
大雪山牙と顎の殺人
本岡 類

長編推理小説
ミセス捜査官
島田 一男

長編推理小説
三毛猫ホームズの歌劇場
赤川 次郎

長編推理小説
「阿蘇・雲仙」逆転の殺人
深谷 忠記

長編伝奇バイオレンス小説
髑髏伝 5 宿業の巻
谷 恒生

最新傑作ミステリー 上
殺意の狂詩曲
日本推理作家協会編

長編推理小説
血の砂丘
笹沢 左保

長編スーパー・バイオレンス小説
獅子の門 玄武編
夢枕 獏

長編推理小説
殺人路・上高地
長井 彬

最新傑作ミステリー 中
犯罪の葬送曲
日本推理作家協会編

長編推理小説
グルメを料理する十の方法
栗本 薫

長編超バイオレンス・サスペンス
叛撃戦線
門田 泰明

長編推理小説
Yの構図
島田 荘司

最新傑作ミステリー 下
恐怖の変奏曲
日本推理作家協会編

トラベル・ミステリー傑作集
日本海からの殺意の風
西村京太郎

超バイオレンス・アクション
淫殺街
菊地 秀行

長編推理小説
新幹線多重衝突セヨ
和久 峻三

長編ハード・アクション小説
無頼船、極北光に消ゆ
西村 寿行

ユーモア・ミステリー
気まぐれ令嬢・移動探偵局
胡桃沢 耕史

長編推理小説
熱海・十国峠殺人事件
島田 一男

長編推理小説
京都茶道家元殺人事件
山村 美紗

長編ハード・バイオレンス小説
白昼の処刑
勝目 梓